

宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告VI  
丁長遺跡（第1次）・大谷遺跡（第1・2次）  
発掘調査報告

2009（平成21）年

三重県埋蔵文化財センター









丁長遺跡古代官道跡（南東から斎宮跡方面を望む）



丁長遺跡古代官道跡（西から伊勢方面を望む）





丁長遺跡古代官道跡（垂直写真：上が東）



丁長遺跡古代官道跡（西から）



## 序

本書で報告する丁長遺跡・大谷遺跡は、多気郡明和町・度会郡玉城町にそれぞれ所在する古代から近世にいたる遺跡であります。明和町・玉城町の所在する多気郡・度会郡は、伊勢神宮の鎮座とともに神領となり、それ以来神宮と深い関わりを持ちながら歴史を歩んできた地域と言えます。さらに丁長遺跡が所在する明和町には、天皇の名代として遣わされた斎王が住まわれた斎宮跡が所在し、古代には栄華を極めた地域としても知られます。丁長遺跡では、古代において重要な地方拠点であった伊勢神宮や斎宮と都を結ぶ官道跡が確認され、この地域が古代史上重要な地域であったことを再認識することができました。

今回の発掘調査では、このような地域に残された往時の人々の足跡を、断片的ながらも垣間見ることのできる資料が得られました。今回報告するのは、丁長遺跡第1次調査、大谷遺跡第1次・第2次調査の記録であります。本書が郷土に残された貴重な歴史遺産を、未来に伝える一助となれば幸いと存じます。

なお、末筆ながら、現地調査や報告書作成に際し、ひとかたならぬご理解とご協力をいただいた多くの方々に心から深謝し、厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫



# 例 言

- 1 本書は、三重県多気郡明和町斎宮字丁長に所在する丁長(ちなが)遺跡の第1次調査及び度会郡玉城町上田辺字不動に所在する大谷(おおたに)遺跡の第1次・第2次発掘調査報告書である。
- 2 本書が扱う発掘調査の原因事業は、平成17・18年度国営宮川用水第二期土地改良事業である。
- 3 発掘調査は下記の体制で実施した。

## 丁長遺跡

### 第1次調査

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱ課 木野本和之 小山憲一 西口剛司 前野謙一

労務提供 鹿島・大日本土木・日本土建共同企業体近鉄富屋川橋梁JV工事事務所

## 大谷遺跡

### 第1次調査

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱグループ 小山憲一 浅生卓司

調査委託 A・B地区 朝日航洋株式会社

C地区 安西工業株式会社

### 第2次調査

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

調査研究Ⅱ課 小山憲一 前野謙一

調査委託 D地区 株式会社イビソク

- 4 本書が対象とした実調査面積は、次のとおりである。  
丁長遺跡 第1次調査：2,800㎡ 工事立会：280㎡  
大谷遺跡 第1次調査：4,100㎡ 第2次調査：1,635㎡
- 5 本書が対象とした現地調査期間は、次のとおりである。  
丁長遺跡 第1次調査：平成18年4月7日～平成18年5月26日  
工事立会：平成18年6月5日～平成18年6月7日・平成20年2月14日～平成20年2月20日  
大谷遺跡 第1次調査：平成17年11月15日～平成18年1月25日  
第2次調査：平成18年9月8日～平成18年10月31日
- 6 調査にかかる諸費用は、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所が全額負担した。
- 7 本書が扱う発掘調査の資料並びに出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 本書の執筆・編集及び遺物の撮影は、小山憲一が行った。
- 9 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、明和町都市計画図、農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所の事業計画図である。
- 10 本書で示す方位は座標北を用いた。座標は日本測地系に準拠し、国土座標第Ⅵ系を用いた。なお、磁針方位は西偏6度30分、真北方位は西偏0度20分である(平成9年)。
- 11 本書では、下記の遺構表示略記号を用いた。  
SF：道路遺構 SK：土坑 SD：溝 SR：自然流路 SZ：落ち込み・性格不明遺構  
SE：井戸 Pit：小穴
- 12 本書で使用する用語は、以下に統一している。  
つぼ：壺 わん：椀 なべ：鍋
- 13 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』(21版、日本色研事業株式会社、1998年)に準拠した。
- 14 挿図と写真図版の遺物番号は相互に対応している。なお、遺物の写真図版は縮尺不同である。
- 15 出土石器・石製品の石材については堀木真美子氏に鑑定いただいた。
- 16 現地調査及び報告書作成にあたり、下記の方々に様々なご指導・ご助言をいただいた。(敬称略・五十音順)  
奥 義次・金田章裕・藤澤良祐・堀木真美子

# 本文目次

I 前言	1
II 位置と環境	9
III 丁長遺跡（第1次調査）	13
1 遺構	13
2 遺物	27
3 結語	32
IV 大谷遺跡（第1・2次調査）	37
1 遺構	37
2 遺物	53
3 自然科学分析	68
4 結語	73
V 附編	75

# 挿図目次

第1図 事業関連遺跡位置図	2	第23図 大谷遺跡D地区土層断面図	46
第2図 遺跡位置図	10	第24図 大谷遺跡S R31・37・38・43、S D40・45 土層断面図	47
第3図 丁長遺跡周辺地形図	13	第25図 大谷遺跡S D41・45・47・53、S Z44、S K 46・50・52・54・55・57・59土層断面図	48
第4図 丁長遺跡範囲確認調査坑配置図	14	第26図 大谷遺跡S K46遺物出土状況図	49
第5図 丁長遺跡調査区位置図	15	第27図 大谷遺跡A・B地区出土遺物実測図	54
第6図 丁長遺跡調査区地区割図	15	第28図 大谷遺跡C地区出土遺物実測図	55
第7図 丁長遺跡I区遺構平面図	17・18	第29図 大谷遺跡D地区S R31、S K58、S D45、 S D47、S K46出土遺物実測図	56
第8図 丁長遺跡I区土層断面図	19	第30図 大谷遺跡D地区包含層他出土遺物実測図①	58
第9図 丁長遺跡II区遺構平面図	21・22	第31図 大谷遺跡D地区包含層他出土遺物実測図②	59
第10図 丁長遺跡II区土層断面図	23	第32図 大谷遺跡範囲確認調査出土遺物実測図	61
第11図 笹笛川右岸工事立会調査区平面図	24	第33図 大谷遺跡周辺遺跡分布図	74
第12図 笹笛川右岸工事立会調査区土層断面図	25	第34図 範囲確認調査実施遺跡位置図	75
第13図 丁長遺跡出土遺物実測図	29	第35図 生洲遺跡調査坑配置図	76
第14図 斎宮周辺古道想定図	35	第36図 野田遺跡・黒桂遺跡調査坑配置図	76
第15図 大谷遺跡調査区位置図	37	第37図 範囲確認調査実施遺跡出土遺物実測図	78
第16図 大谷遺跡調査区地区割図	38		
第17図 大谷遺跡A・B地区遺構平面図	39・40		
第18図 大谷遺跡A・B地区土層断面図	41		
第19図 大谷遺跡S R1～3断面図	42		
第20図 大谷遺跡C地区遺構平面図	43		
第21図 大谷遺跡C地区土層断面図	44		
第22図 大谷遺跡D地区遺構平面図	45		

## 挿 表 目 次

第1表	事業関連遺跡一覧表	3	第11表	大谷遺跡出土遺物観察表⑤	66
第2表	丁長遺跡遺構一覧表	26	第12表	大谷遺跡出土遺物観察表⑥	67
第3表	丁長遺跡出土遺物観察表①	30	第13表	大谷遺跡出土木製品樹種同定結果	72
第4表	丁長遺跡出土遺物観察表②	31	第14表	大谷遺跡出土種実同定結果	72
第5表	大谷遺跡遺構一覧表①	51	第15表	範囲確認調査実施遺跡出土遺物観察表①	80
第6表	大谷遺跡遺構一覧表②	52			
第7表	大谷遺跡出土遺物観察表①	62	第16表	範囲確認調査実施遺跡出土遺物観察表②	81
第8表	大谷遺跡出土遺物観察表②	63			
第9表	大谷遺跡出土遺物観察表③	64			
第10表	大谷遺跡出土遺物観察表④	65			

## 図 版 目 次

巻頭図版1	丁長遺跡古代官道跡（南東から斎宮跡方面を望む） 丁長遺跡古代官道跡（西から伊勢方面を望む）	図版9	D地区SR31（南から） D地区SK46遺物出土状況（南から）
巻頭図版2	丁長遺跡古代官道跡（垂直写真：上が東） 丁長遺跡古代官道跡（西から）	図版10	D地区SK46遺物出土状況近景（南から） 工事完了後状況（南東から）
<b>丁長遺跡</b>		図版11	出土遺物①（土器）
図版1	I区SF7（西から） I区SF7（東から：平成19年度工事立会調査区）	図版12	出土遺物②（土器）
図版2	I区調査区遠景及び旧参宮街道（南東から） I区工事完了後状況（南から）	図版13	出土遺物③（土器・陶器）
図版3	II区調査区全景（垂直写真：上が西） II区調査区全景（北から）	図版14	出土遺物④（木製品）
図版4	II区SD24・36（南から） II区工事完了後状況（北から）	図版15	出土遺物⑤（木製品）
図版5	出土遺物①（土器・陶器）	図版16	出土遺物⑥（木製品）
図版6	出土遺物②（石器）	図版17	出土遺物⑦（木製品）
<b>大谷遺跡</b>		図版18	出土遺物⑧（木製遺物・金属製品）
図版7	A・B地区調査区全景（西から） C地区調査区全景（北東から）	図版19	出土遺物⑨（石器・石製品）
図版8	C地区SR23（南から） D地区調査区全景（北東から）	図版20	出土木製遺物顕微鏡写真①
		図版21	出土木製遺物顕微鏡写真②
		図版22	出土木製遺物顕微鏡写真③・植物遺体写真
		<b>黒桂遺跡・野田遺跡・生洲遺跡</b>	
		図版23	範囲確認調査実施遺跡出土遺物



# I 前 言

## 1 調査に至る経過

### (1) 宮川用水事業とのこれまでの経過

農林水産省東海農政局が主管する国営宮川用水第二期土地改良事業（以下、当事業と略表記）は、昭和32～41年にかけて実施された第一期事業で整備された農業用水施設の老朽化やその後の営農環境の変化によって生じた用水不足等の問題を解決するために平成8年3月に計画確定した事業である。当事業に関する埋蔵文化財保護の調整・協議については、平成9年度から本格化し、平成10～14年度の5ヶ年には、農林水産省と三重県との間で調査委託契約を締結し、発掘調査を実施している。この間の当事業全般にかかる調査に至る経緯や埋蔵文化財保護協議等については、既刊の「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ～Ⅴ」<sup>①</sup>に詳述しているため、詳細は前掲書を参照されたい。

平成10～14年度に本格実施された当事業に伴う発掘調査は、平成14年度の中で事業の全体計画の見直しが検討されることに伴い、未実施分の調査が凍結され、次年度以降の調査委託契約の更新も見送られることとなった。

事業計画の見直しの後、新たな事業計画をもとに埋蔵文化財保護の調整・協議が本格的に再開したのは平成16年度である。平成16年度は、事業計画と工事の進捗に合わせ、分布調査や範囲確認調査の実施を農林水産省東海農政局宮川用水第二期農業水利事業所（以下、宮川用水事業所と略表記）から依頼されたが、年度途中で発掘調査協定や調査委託契約の締結が困難なため、範囲確認調査の実施にあたっては「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査の確認書」を平成16年11月19日付けで宮川用水事業所長と三重県埋蔵文化財センター所長の間で取り交わし、労務提供の形で調査を実施した。また、次年度以降の調査体制を整備するため、平成17年4月1日付けで、宮川用水事業所長と三重県教育委員会教育長との間に「宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査協定」が締結され、平成17年度以降、調査委託契約を

締結し、発掘調査を本格的に実施することとなった。

平成17年度には、斎宮調整池の拡張造成に伴う残土処分場に計画された同池西側の谷地及び丘陵部の詳細分布調査を行った。その結果、事業地内に調査対象となる古墳が新たに複数確認されたため、保護協議の対象地として宮川用水事業所と協議を行い、後述の丁長遺跡とあわせて同年度末に協定変更を行った上で、18年度以降の調査対象地とした。当事業にかかる平成16年度以降の協議対象遺跡については、第1図及び第1表を参照されたい。

### (2) 丁長遺跡

丁長遺跡は、二級河川笹川川の左岸に位置する。同河川では県事業の総合河川流域防災事業が計画されたが、笹川川を横断する近畿日本鉄道（以下、近鉄と略表記）の橋脚が事業地内にあり、当該橋脚部分を含む事業地の一部を農林水産省が担当することとなったため、平成17年4月28日付け17宮二水第77号で同省担当範囲の埋蔵文化財の分布調査依頼が県教育長宛てになされた。当該範囲は、国史跡斎宮跡史跡指定地の東端より東方約600mに位置し、これまでに史跡内の調査で確認されていた古代官道の延長線上に位置したため、要調査の回答を行い、保護協議の対象とした。当遺跡については、平成17年度の中で協議対象となったことから、宮川用水事業所内で調整が図られ、平成18年3月に労務提供により事業地内の遺跡範囲確認調査を行うこととなった。調査の結果、笹川川左岸の近鉄線の南側事業地内で古代道路の側溝と考えられる並行する二条の溝が検出された。また、近鉄線の北側事業地においても溝・土坑等の遺構が検出されたため、南北合わせて2,800㎡の本調査を18年度早々に行うことで宮川用水事業所と合意した。さらに、当該調査の結果を受け、北側に隣接する県事業の範囲にも遺跡が広がることが確実となったため、三重県埋蔵文化財センターの県公共事業担当課が範囲確認調査を行った結果、1,400㎡について本調査を実施することとなった。なお、当遺跡の調査回数については、農林水産省事業範囲を第1次調査、県事業範囲を第2次調査と整理した。

第2次調査の調査成果については、既刊の報告書<sup>②</sup>を参照されたい。

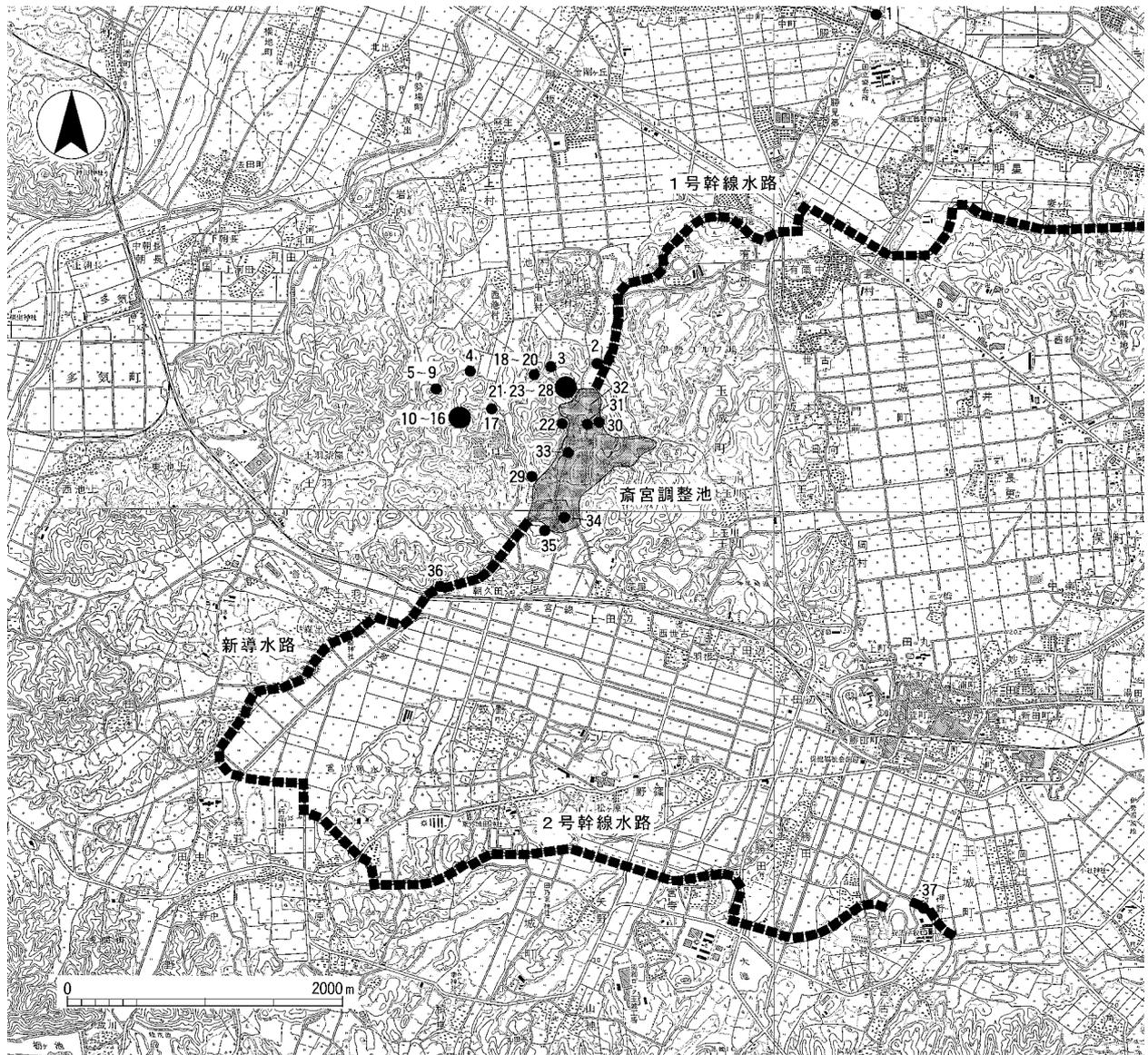
第1次調査は工事スケジュールの都合上、4～5月の2ヶ月間で調査を終了させる必要があったことから、調査体制を当該範囲の工事施工を請け負った鹿島・大日本土木・日本土建共同企業体近鉄富屋川橋梁JV工事事務所（以下、JV工事事務所と略表記）による労務提供とすることで宮川用水事業所と合意した。また、笹笛川右岸側の仮設工事範囲及び近鉄線南側の左岸側堤防下の範囲は古代道路の東側延長部の確認のため施工時の立会調査を実施することとした。

### (3) 大谷遺跡

大谷遺跡は多気郡明和町南部と度会郡玉城町を隔

てる通称玉城丘陵の南端部の谷筋に位置し、現況は水田・畑地である。当該範囲は、北側に位置する現況の斎宮調整池を南側に拡張する事業計画地内にあたるため、平成12年度に事業地内の詳細分布調査を行った。調査の結果、広範囲に土師器・須恵器等の遺物が散布していたため保護協議の対象地とし、13年度に範囲確認調査を行うこととなった<sup>③</sup>。しかし、その後の調整・協議の中で、工事工程の優先度や当該用地の地権者の要望等から14年度に現地着手が延期され、さらに前述のとおり平成14年度途中の事業の全体計画の見直しに伴い、調査は凍結された。

事業計画の見直しの後、新たな事業計画をもとに当遺跡の調整・協議が再開したのは平成16年度である。平成16年度には、用地買収の遅延や地権者の要



第1図 事業関連遺跡位置図 (1:50,000)

No.	遺跡名	所在地	範囲確認調査 (㎡)	本発掘調査 (㎡)	工事立会 (㎡)	調査年度 (平成)	備考
1	丁長遺跡	明和町斎宮	575	2,800	280	18・19	
2	生洲遺跡	明和町池村	432	—	20	16・18・19	施工可
3	黒桂遺跡	明和町池村	288	—	—	16	施工可
4	野田遺跡	明和町池村	368	—	—	16・18	施工可
5	高塚2号墳	明和町池村	18	—	—	20	事業地外
6	高塚3号墳	明和町池村	11	—	—	20	事業地外
7	高塚4号墳	明和町池村	75	1,301	—	19・20	
8	高塚5号墳	明和町池村					
9	高塚6号墳	明和町池村					
10	小金2号墳	明和町池村	78	620	—	20・21	※
11	小金3号墳	明和町池村	50	806	—	19・20	
12	小金4号墳	明和町池村	36	—	—	19	事業地外 県事業広域農道範囲
13	小金8号墳	明和町池村	12	—	—	19	施工可
14	小金10号墳	明和町池村	4	—	—	19	事業地外
15	小金11号墳	明和町池村	66	—	—	19	施工可
16	小金12号墳	明和町池村	—	130	—	19	県事業広域農道範囲
17	池村3号墳	明和町池村	3	—	—	19	事業地外 県事業広域農道範囲
18	黒桂3号墳	明和町池村	33	—	—	19	施工可
19	黒桂4号墳	明和町池村					
20	黒桂5号墳	明和町池村					
21	斎宮池3号墳	明和町池村	15	—	—	20	事業地外
22	斎宮池16号墳	明和町池村	15	615	180	11・17	平成17年度事業地外確定 現状保存
23	斎宮池18号墳	明和町池村	—	—	—	20	平成20年度協議で現状保存
24	斎宮池19号墳	明和町池村	39	240	—	20・21	※
25	斎宮池20号墳	明和町池村	54	—	—	18	施工可
26	斎宮池21号墳	明和町池村					
27	斎宮池22号墳	明和町池村	18	—	—	18	施工可
28	斎宮池23号墳	明和町池村	47	—	—	18	事業地外 県事業広域農道範囲
29	等峯A4号墳	明和町池村	—	—	—	—	平成17年度事業地外確定 現状保存
30	斎宮池遺跡	明和町池村	120	824	—	11・19	
31	真木谷遺跡	明和町池村	42	300	—	12・19	
32	斎宮池敷内遺跡	明和町池村	592	—	4,000	12・19・20	※
33	長谷町遺跡	明和町池村	100	946	—	12・18	
34	大谷遺跡	玉城町上田辺	1,664	5,735	—	16・17・18	
35	長楽寺関連遺跡	玉城町上田辺	—	—	100	19	施工可
36	与五郎谷遺跡	多気町土羽	—	523	5,500	18・20	
37	鉄砲塚遺跡	玉城町宮古	16	—	—	18	施工可
小計			4,771	14,840	10,080	—	
合計			29,691				

第1表 事業関連遺跡一覧表（平成16～21年度。備考欄に※が付された遺跡は平成20・21年度調査の予定面積。）

望から範囲確認調査対象地の一部のみを実施し、翌17年度の上半期に全対象地の調査が完了した。調査の結果、合計面積5,735㎡が本調査対象地となり、平成17年11月から翌18年1月にかけてA～Dの4地区に設定した調査区の内、A・B地区2,800㎡、C地区1,300㎡の合計4,100㎡の本調査を2班体制の同時進行で実施した。平成18年度は9月から10月にかけてD地区の1,635㎡の本調査を実施した。

## 2 調査の経過

### (1) 調査経過の概要

#### ① 丁長遺跡

調査体制等の具体的な打合せ協議を平成18年4月4日に行った。工事施工は、宮川用水事業所が近鉄に対して業務委託を行い、近鉄が工事発注を行うこととなっていたため、協議は宮川用水事業所及び近鉄・JV工事事務所・三重県埋蔵文化財センターの4者で行った。また、2ヶ月間で2,800㎡の調査に対応するため、近鉄線の北と南の2調査区を2班体制の同時並行で行うこととした。

現地調査は、同年4月7日に開始した。調査期間は梅雨時期前であったが、天候不順の日が多く、調査工程の遅延が心配された。しかしながら、JV工事事務所をはじめ、関係機関の全面的な協力を得ることができたため、調査終了時期が遅延することなく、同年5月26日に本調査対象地の全調査を終了し、斎宮跡で確認されていた古代官道跡と一直線に繋がる道路遺構等を確認することができた。また、調査成果の還元として5月21日に行った現地説明会には130名の参加者を得ることができた。

笹笛川右岸側の工事立会は同年6月5日から7日にかけて行った。仮設の作業ヤード設置のためにH杭を打設する範囲について近鉄線の南北でトレンチ調査を行った。調査の結果、近鉄線の南側で笹笛川右岸に延長することを想定した古代道路は、笹笛川の河道の経年変化により破壊・分断されていることが判明した。

古代官道を確認した近鉄線南側の笹笛川左岸堤防下については、工事施工が平成19年度末となったため、平成20年2月14日から2月20日にかけて立会調査を行った。調査の結果、18年度調査で確認した古

代道路が堤防下に残存しており、改修前の笹笛川の河道によって古代道路が破壊・分断されていることが確認された。

#### ② 大谷遺跡

**第1次調査** 平成17年12月5日にA・B地区、同年12月6日にC地区の表土掘削を開始した。調査区は谷筋に位置する水田及び畑地で、以前は沼田であったため湧水や周辺からの漏水が激しく、地山が軟弱な粘土質もしくは砂質であったことから、掘削作業は難航したものの、検出遺構は大半が自然流路であり、また遺物包含層や遺構からの出土遺物が僅かであったため、調査終了時期が遅延することなく、A・B地区は翌平成18年1月24日に、C地区は同年1月20日に現地調査を終了した。

**第2次調査** 平成18年9月8日に調査を開始した。第1次調査同様、湧水や周辺からの漏水、軟弱な地山等、掘削作業は難航した。検出遺構も第1次調査同様に大半が自然流路であったが、遺構密度は比較的密であり、遺物包含層もしくは遺構出土の遺物も第1次調査に比して一定程度の出土量をみた。出土遺物の所属時期や種類も多様で、縄文時代～中世にかけての土器・石器・石製品・木製品等が出土した。掘削作業は難航したものの、天候不良等による現場作業の休止も少なく、同年10月31日には現地調査を終了した。

### (2) 調査日誌 (抄)

#### ① 丁長遺跡

##### I 区

4月7日 調査前写真撮影。

4月10日 調査区北端より表土掘削開始。

4月17日 人力掘削開始。

4月18日 東地区包含層掘削・遺構検出開始。古代道路の南北側溝を検出。遺構のラインはやや不明瞭。

4月19日 中地区包含層掘削・遺構検出開始。

4月24日 中地区遺構検出ほぼ終了。古代道路北側側溝は風倒木・攪乱で残存状況不良。

4月25日 西地区包含層掘削・遺構検出開始。全地区検出終了。古代道路検出状況写真撮影。

4月26日 東地区・中地区遺構掘削開始。古代道路北側側溝をSD1、南側側溝をSD2と

命名。

4月28日 東地区古代道路側溝SD1・2掘削。出土遺物僅少。深さは30cm程度。

5月1日 東地区南半部遺構検出。南端部で落ち込み検出。

5月2日 東・中地区ほぼ掘削完了。

5月9日 西区古代道路側溝SD1・2掘削。

5月12日 調査区土層写真撮影。

5月15日 調査区全景写真撮影前の清掃作業。

5月16日 ラジコンヘリコプターによる調査区全景空中写真撮影。

5月17日 午前中土層検討。午後雨天のため現地説明会準備。

5月18日 雨天のため現地作業は休止。報道関係への資料提供。

5月19日 雨天のため現地作業は休止。現地説明会準備。

5月21日 現地説明会実施。130人の参加を得る。三重テレビ放送の取材を受ける。

5月22日 調査区土層断面図作成。

5月23日 京都大学金田章裕教授による調査指導。

5月24日 遺構平面図作成。

5月25日 遺構平面図作成。中地区古代道路路面断ち割り。路面整形（舗装）の痕跡は確認できず。

5月26日 道路面断ち割り後の断面図作成。平面図・断面図の図面確認。全調査工程終了。

## II区

4月7日 調査前写真撮影。

4月10日 調査区南端より表土掘削開始。

4月13日 表土掘削継続。溝・井戸などを検出。

4月17日 表土掘削終了。人力掘削開始。P8グリッド包含層から木葉形尖頭器出土。

4月19日 遺構検出及び遺構掘削。SD21・22、SK23完掘。SD24掘削。

4月24日 SD24掘削。山茶碗出土。

4月28日 SD26・27検出。

5月2日 遺構掘削。SD24埋土下層に土器片・拳大の石多く含む。最底部は砂。埋土土層写真撮影。

5月10日 遺構掘削。SD24・36は中世の道路側溝

か？

5月12日 遺構掘削。SD24から磨製石斧・土師器小形壺出土。

5月15日 遺構掘削。調査区全景写真撮影前の清掃作業。

5月16日 ラジコンヘリコプターによる調査区全景空中写真撮影。個別遺構写真撮影。

5月17日 午前中調査区土層断面図作成。午後雨天のため現地説明会準備。

5月19日 雨天のため現地作業は休止。現地説明会準備。

5月21日 現地説明会実施。

5月22日 遺構平面図・調査区土層断面図作成。

5月24日 遺構平面図作成。井戸SE25断ち割り。全調査工程終了。

## ②大谷遺跡

### 第1次調査

#### A・B地区

12月5日 A地区西半部表土掘削。地表下50～60cmで地山（明青灰粘質土）検出。

12月6日 A地区表土掘削完了。東西方向に蛇行した流路（SR1）を検出。

12月7日 A地区壁面清掃。SR1の断面確認。B地区東側から表土掘削開始。地表下80～120cmで地山検出。

12月12日 A地区東半部の精査。B地区表土掘削終了。A地区で検出したSR1がB地区へ続いていることを確認。

12月14日 A地区SR1掘削。東西の壁際でSR1の断ち割り。検出面より1mで底を確認。A地区全景写真撮影。

12月19日 B地区遺構検出。南北方向に延びる溝SR2を検出。

12月20日 B地区遺構検出。SR1・2の続きとSR3を検出。

12月27日 遺構検出・掘削。SR1の続きを検出。SR3は北へ向かうにつれ浅くなり、途中で平面プランが確認できなくなる。

1月11日 B地区全景写真撮影のための清掃。A・B地区遺構平面図作成。

1月13日 B地区全景写真撮影。遺構平面図・土層

断面図作成。

- 1月16日 遺構平面図・土層断面図の補測。  
1月17日～20日 室内整理作業。  
1月23日 遺構平面図・土層断面図の補測。  
1月24日 S R 1 の断ち割り及び記録作業。全調査工程終了。

### C地区

- 12月6日 調査区東側から表土掘削。地表下70cmで遺物包含層上面、1mで地山検出。  
12月8日 引き続き表土掘削。南北両面の壁面精査。  
12月12日 遺構検出。自然流路状の落ち込み確認。  
12月14日 遺構検出・掘削。ミニチュア土器1点が出土した自然流路をS R 23とする。  
12月19日 遺構検出・掘削。土器出土は数点。  
12月21日 遺構掘削ほぼ終了。  
12月26日 写真撮影用清掃作業。  
12月27日 調査区全景・個別遺構写真撮影。  
12月28日～1月19日 遺構平面図・土層断面図作成。  
1月20日 図面修正作業。全調査工程終了。

### 第2次調査

#### D地区

- 9月8日 調査区東側から表土掘削開始。  
9月11日 表土掘削。縄文土器や抉りの入った木製品等が出土。  
9月14日 表土掘削。自然流路2条検出。  
9月20日 表土掘削終了。自然流路や溝を数条検出。  
9月25日 人力掘削開始。包含層掘削・壁面精査等。  
9月28日 遺構検出・掘削。調査区東側で自然流路S R 31、落ち込みS Z 32～36検出。S R 31掘削。  
9月29日 包含層、S R 31、S Z 32～36掘削。S Z 32～36写真撮影。S Z 34・35平面図作成。  
10月3日 調査区西側の包含層掘削・遺構検出。S R 37検出。  
10月10日 遺構検出・掘削。蛇行する溝・自然流路検出。  
10月16日 包含層掘削。遺構検出・掘削。南北方向に延びるS R 38・46、S D 45等を検出。調査区土層断面図作成。  
10月18日 遺構検出・掘削。調査区南側S D 47から木製品(平鋏)出土。自然流路・溝が激

しく切り合う。縄文土器(中期)が20点程包含層から出土。

- 10月19日 調査区北壁付近で検出したS K 46から板状木製品出土。  
10月20日 写真撮影用清掃作業。S R 31写真撮影。  
10月21日 調査区全景写真撮影。  
10月24日 S K 46遺物出土状況図作成。  
10月25日 S K 46木製遺物取上げ。遺構平面図作成。  
10月26日～30日 遺構平面図作成。  
10月31日 遺構平面図・土層断面図修正作業。S K 46木製遺物取上げ。全調査工程終了。

### (3)文化財保護法等による諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

#### ①丁長遺跡

- ・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)平成18年4月10日付教埋第19号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(松阪警察署長宛県教育長通知)平成18年6月22日付教委第12-4-3号

#### ②大谷遺跡

##### 第1次調査

- ・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)平成17年11月16日付教埋第289号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(伊勢警察署長宛県教育長通知)平成18年2月14日付教委第12-4-31号

##### 第2次調査

- ・文化財保護法第99条第1項にかかる発掘調査実施報告(県教育長宛埋蔵文化財センター所長通知)平成18年9月4日付教埋第254号
- ・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知(伊勢警察署長宛県教育長通知)平成19年2月26日付教委第12-4-34号

## 3 調査の方法

### (1)遺構番号について

#### ①丁長遺跡

現地調査の段階で、I区には1から20の遺構番号

を、Ⅱ区には21以降の遺構番号を予め割り振った。現地調査の結果、Ⅰ区では1から6までを使用、Ⅱ区では11から41までを使用した。前述した第2次調査では、これを踏襲して遺構番号を51から使用し、第1次調査のⅡ区から延長した同一遺構の番号は同一番号を使用している。第1次調査では、報告書作成段階での整理で、5・8～20を欠番とした。詳細は第2表の遺構一覧表を参照されたい。

## ②大谷遺跡

第1次の現地調査の段階で、A・B地区には1から20の遺構番号を、C地区には21以降の遺構番号を予め割り振った。現地調査の結果、A・B地区では1から3までを使用、C地区では21から24までを使用した。第2次調査のD地区では、これを踏襲して遺構番号を31から使用し、現地調査の結果、31から61までを使用した。なお、4～20・25～30は欠番である。詳細は第5・6表の遺構一覧表を参照されたい。

## (2)地区割と調査区の設定について

### ①丁長遺跡

地区割については、近鉄線の南北に調査区が分断されている点や、後の第2次調査の実施を考慮して、国土座標（日本測地系）を基にした100m方眼の大地区を設定し、南からA～D地区とした。各地区にはさらに4m方眼の小地区を設定した。この小地区には北から南にアルファベットを、西から東に算用数字を配置して小地区名とし、遺構実測や出土遺物の取り上げ時の基準とした。調査区名は報告書作成時に近鉄線南側をⅠ区、同北側をⅡ区としたが、Ⅰ区は前述の大地区名ではA～D地区に相当し、Ⅱ区はD・E地区に相当する（第6図参照）。Ⅰ区については調査区が3分割されているため、現地調査時に便宜的に西地区・中地区・東地区と呼称しており、当報告でも必要に応じてこの呼称を使用した。

### ②大谷遺跡

調査区が4地区に点在しているため、A～Dの地区名を付与した。遺構実測や出土遺物の取り上げ時の基準とする4m方眼の小地区は国土座標（日本測地系）を基に設定し、北から南に算用数字を、西から東にアルファベットを配置して小地区名とした（第16図参照）。

## (3)掘削の方法

### ①丁長遺跡

掘削は、表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

### ②大谷遺跡

掘削は、表土を重機で行い、包含層及び遺構を人力で行った。

## (4)遺構図面の作成について

### ①丁長遺跡

遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図…1：20
- ・土層断面図…1：20

### ②大谷遺跡

**A・B地区** 平面図については電子平板測量により作成した。土層断面図については、デジタル写真のデジタルトレースにより作成した。各図の保存図面の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図…1：50
- ・土層断面図…1：20

**C地区** 遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図…1：20
- ・土層断面図…1：20

**D地区** 遺構図面の作成は、すべて手書きによる。各図の作成時の縮尺は以下の通りである。

- ・遺構平面図…1：20
- ・遺物出土状況図…1：10
- ・土層断面図…1：20

## (5)遺構写真について

### ①丁長遺跡

調査区全景写真は、ラジコンヘリコプターを使用して空中撮影を行った。フィルムは、6×6cm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。個別の遺構写真は、現場の状況から撮影台の設置が困難であったため、基本的に地上で撮影した。フィルムは、4×5インチ判（モノクロ・カラーポジ）に加え、6×9cm判（モノクロ・カラーポジ）、35mm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。

### ②大谷遺跡

調査区全景写真は、全調査区ともにローリングタ

ワーを設置して撮影した。個別の遺構写真は、一部ローリングタワーを設置して撮影した。フィルムは、4×5インチ判（モノクロ・カラーポジ）に加え、35mm判（モノクロ・カラーポジ）を使用した。

**【註】**

- ①『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 外山遺跡・片落C遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）  
『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ 発シB遺跡－第3次調査－』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）  
『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ 発シA遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 2002年）  
『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅳ 野田塚・野田遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 2003年）  
『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ 発シA遺跡－第2次調査－』（三重県埋蔵文化財センター 2003年）
- ②『丁長遺跡（第2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2007年）
- ③『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』（三重県埋蔵文化財センター 2001年）

## II 位置と環境

### 1 位置と地理的環境

丁長遺跡（1）は三重県多気郡明和町斎宮字丁長・上横田に、大谷遺跡（2）は度会郡玉城町上田辺字不動にそれぞれ所在する。明和町と玉城町は概ね南北に隣接し、やや東偏するが南北に長い本県のほぼ中央部に位置する。

明和町の地形は伊勢湾に面する北部の低地、中央部の台地、南部の丘陵地の概ね3地形に区分され、南部の丘陵地である玉城丘陵を境に玉城町と隣接している。丁長遺跡は町域のほぼ中央部を北流する笹笛川の中流域左岸側に立地するが、当遺跡周辺は笹笛川がその源流となる南部の丘陵地から中央部の台地面を開析して形成した谷底平地となる。

玉城町の地形は、北部の玉城丘陵、南部の国東山地、東部の宮川低地、中央部の外城田川平野の概ね4地形に区分され、大谷遺跡は北部の玉城丘陵南端部の谷筋に立地する。

### 2 歴史的環境

丁長遺跡・大谷遺跡が所在する周辺地域は、旧石器時代以降、各時代の遺跡が濃密に分布する地域である。以下に各時代の様相を概観していきたい。

玉城丘陵及びその北東に位置する大仏山丘陵周辺は、県内有数の旧石器時代遺跡の分布地域であり、300点を超えるナイフ形石器が出土したカリコ遺跡（3）は拠点的な集落跡と想定され<sup>①</sup>、上地山遺跡（4）、シンゲ池遺跡（5）、コドノA・B遺跡（6・7）、上村池A・B遺跡（8・9）、北野遺跡（10）などが同時代の遺跡として挙げられる。続く縄文時代の遺跡としては、早期の押型土器が多数出土した石川遺跡<sup>②</sup>（11）や中期から晩期の遺物が出土した金剛坂遺跡<sup>③</sup>（12）、中期末から後期初頭にかけての集落跡と考えられる斎宮池遺跡<sup>④</sup>（13）などが分布しており、旧石器時代に続く人間の営為の跡が確認できる。

櫛田川右岸の明野台地上に立地する金剛坂遺跡（12）は、次代の弥生文化が前期から後期に至るまで営まれた大規模集落であり、弥生文化が南勢地方

へ伝播したルート上の遺跡という位置付けがなされている<sup>⑤</sup>。同じ台地上には同様の弥生集落がいくつか形成されており、中期から古墳時代初頭の寺垣内遺跡<sup>⑥</sup>（14）、中期から後期の西出遺跡<sup>⑦</sup>、後期から古墳時代初頭に至る北野遺跡<sup>⑧</sup>（10）などで竪穴住居や方形周溝墓が多数確認されている。

古墳時代に入ると、玉城丘陵周辺には多数の古墳が造営されるようになる。この地域の古墳の初現は、5世紀前半の大型方墳である権現山2号墳（15）とされており、その後5世紀後半には高塚1号墳（16）、大塚1号墳（17）、神前山1号墳（18）等、首長墓相当の帆立貝式大型前方後円墳が玉城丘陵上に造営される<sup>⑨</sup>。続く6～7世紀に至っても古墳造営は営々と継続され、垣場古墳群（19）、世古古墳群（20）、天王山古墳群（21）、河田古墳群（22）、斎宮池古墳群（23）、上村池古墳群（24）、ユブミ古墳群（25）、朝久田古墳群（26）、辻ノ長古墳群（27）などの小規模な群集墳が玉城丘陵上に造営され、確認されている総数は500基を超える。一方、台地上にも古墳の造営は広がり、塚山古墳群（28）、坂本古墳群（29）などが造営された。一方で、この地域の同時代の集落跡の確認例は少ないが、古轡通りB遺跡（30）ではくり抜き井戸の付随する、前期の四面庇の掘立柱建物が確認され、豪族居館の施設と想定されている<sup>⑩</sup>。また、中の坊遺跡<sup>⑪</sup>（31）、北野遺跡<sup>⑫</sup>（10）、堀田遺跡<sup>⑬</sup>（32）では、初頭から後期の竪穴住居等が確認されている。

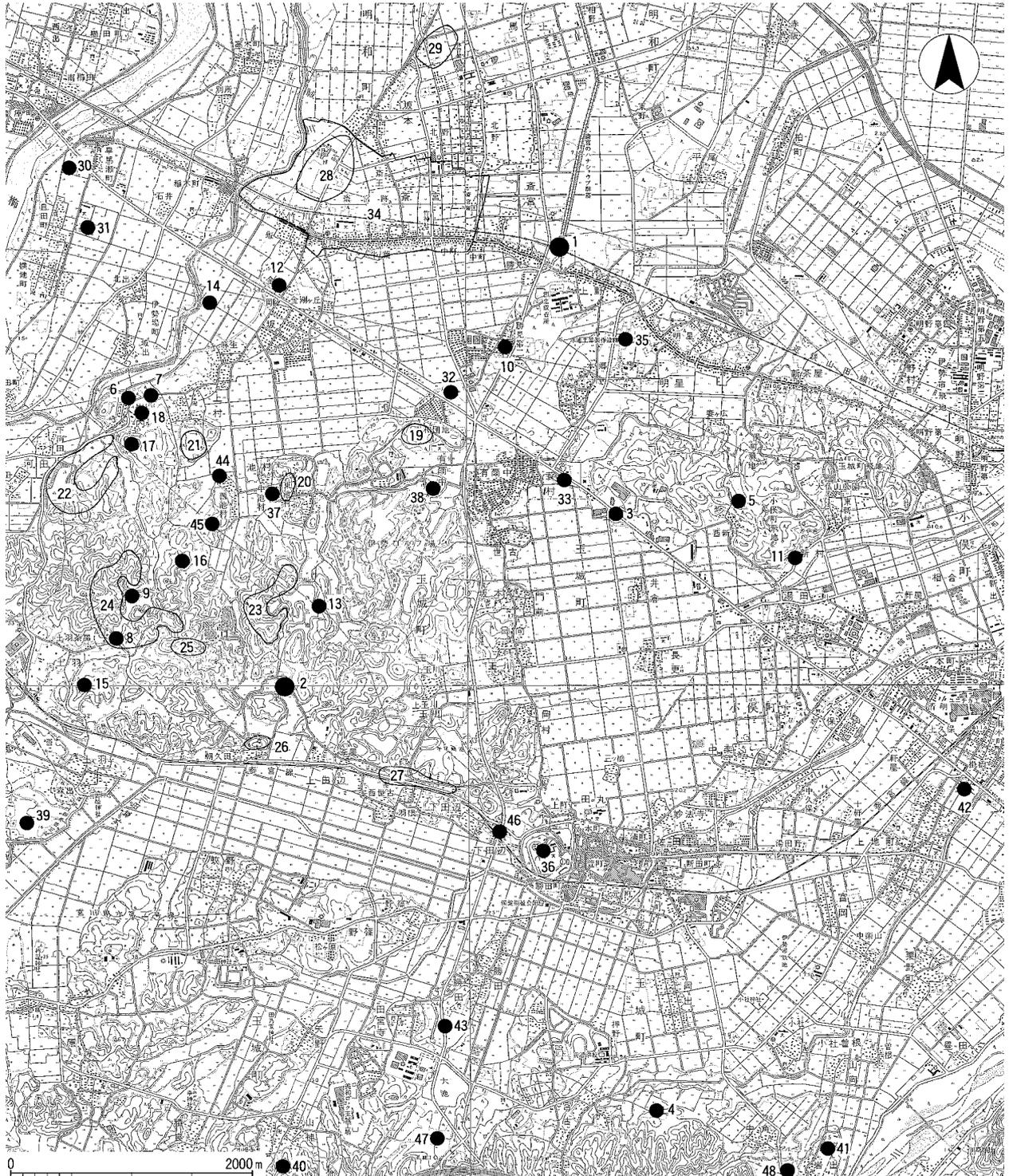
丁長遺跡・大谷遺跡が所在する多気郡及び度会郡は、7世紀には伊勢神宮の神領となっていた。多気郡から分離され公郡として独立していた飯野郡も、9世紀末には神領に復し、以降この地域は神三郡と称された。多気郡の有爾郷鳥墓には、伊勢神宮の庶務一般を管掌する神序が置かれ神政が執り行われていた。この神序は、現明和町叢村所在の鳥墓神社周辺に比定され、鳥墓遺跡（33）として周知されている<sup>⑭</sup>。

天武天皇二年（673年）に大来皇女が卜定されてから制度的に確立されたと言われる斎宮も多気郡に置かれ、南北朝期の廃絶までの約660年間、斎王制度は継

続された。斎王とは天皇に代わって伊勢神宮に奉祀するため伊勢に派遣された未婚の内親王若しくは女王を指し、斎宮は斎王の宮殿及び斎宮寮と呼ばれる庶務一般を司る役所の総称である。この斎宮跡(34)の発掘調査は昭和45年に開始され、東西約2km、南北約700m、面積約137ヘクタールが昭和54年に国史跡に指定された。斎宮跡はこの地域を代表する著名

な遺跡であり、これまでの発掘調査により、奈良時代の官道や平安時代の方格地割、鎌倉時代の大溝等が確認されている<sup>15)</sup>。

伊勢神宮の庶務一般を管掌する有爾鳥墓の神所推定地(33)には、現在、神宮御料土器調整所が所在し、伊勢神宮へ土器を貢納している。この地域は古代以来、伊勢神宮や斎宮へ土器を貢納していた地域



第2図 遺跡位置図(1:50,000)〔国土地理院「松阪」「明野」「国東山」「伊勢」1:25,000より作成〕

と考えられており、北野遺跡（10）や水池土器製作遺跡（35）など、飛鳥～奈良時代の組織的な土師器生産遺跡も確認されている。また、古代以来、中～近世においても伊勢神宮への土器貢納が行われていたことは、文献史学を中心に検証されている<sup>⑮</sup>。また、中世以降は伊勢神宮への「奉仕」的生産から、商品土器の生産へと発展し、いわゆる「南伊勢系土師器」の中心的生産地として土器生産が継続された<sup>⑰</sup>。

鎌倉幕府成立後、神三郡は守護不入の地として確保されたものの、主に武家による侵略・横領が相次いだ。その結果、伊勢神宮のこの地域における影響力は次第に低下し、平安時代に隆盛を極めた齋宮も、南北朝期には廃絶する。この頃、伊勢国司として北畠氏が伊勢に入部し、以後、この地域は北畠氏の支配下となる。北畠氏の拠点の一つとなった田丸城跡（36）は、伊勢本街道と熊野街道の分岐点にもあたる交通の要衝に立地し、周辺には、池村城跡（37）、有爾中城跡（38）、笠木館跡（39）、山神城跡（40）、岩出城跡（41）なども所在する。田丸城は、延元元（1336）年に北畠親房、顕信父子が築城して以来、南朝方の拠点となり、南北朝合一後も北畠氏の支配下に置かれた。永禄12（1596）年に織田信長の大河内城攻めの際の和議によって北畠氏の養子となった次男茶筌丸が後に信雄と改名、城主となり、以後、堀・石垣・土塁を備えた近世的平山城として生まれ変わる。江戸時代には、和歌山藩家老の久野家が城代となり、八代続いて明治の廃城を迎える。

古代から中世にかけて、この地域の領主層を支えた集落跡も、いくつか確認されている。野垣内遺跡（42）では平安時代の掘立柱建物5棟や同時期の竪穴住居<sup>⑱</sup>が、上の山遺跡（43）では平安時代中期の総柱建物を含む掘立柱建物2棟<sup>⑲</sup>、西村遺跡（44）・愛場遺跡（45）・波瀬B遺跡（46）では、鎌倉～室町時代の掘立柱建物や井戸・土坑・溝などが確認されており、当時の一般庶民の生活の一端を見ることが出来る。さらに楠ノ木遺跡（47）や岩出遺跡群（48）では、平安時代末期～室町時代の大規模な集落が形成され、岩出遺跡群蚊山地区では江戸時代に瓦窯も営まれている<sup>⑳</sup>。

以上、この地域の歴史的環境を概観したが、近年の開発によって景観の変化は著しいものの、往時を

偲ばせる佇まいも随所に残されている。

## 【註】

- ①『玉城町史 上巻』（玉城町 1995年）
- ②『小俣町史 通史編』（小俣町 1988年）
- ③『金剛坂遺跡発掘調査報告』（明和町教育委員会 1971年）
- ④『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第6号（三重県埋蔵文化財センター 2008年）
- ⑤前掲註①
- ⑥『明和町史 史料編第一巻 自然・考古』（明和町 2004年）
- ⑦『三重県埋蔵文化財年報1－昭和60年度－』（三重県教育委員会 1986年）
- ⑧「多気郡明和町箕村 北野遺跡」（『平成2年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告－第2分冊－』三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年）  
『北野遺跡（第2・3・4次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1995年）  
『北野遺跡（第5次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター 1996年）
- ⑨『明和町史 史料編第一巻 自然・考古』（明和町 2004年）
- ⑩『古轡通りB遺跡・古轡通り古墳群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2000年）
- ⑪『中の坊遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1997年）
- ⑫前掲註⑧
- ⑬「X 多気郡明和町堀田遺跡」（『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1981年）
- ⑭『明和町遺跡地図』（明和町 1988年）
- ⑮『齋宮跡発掘調査報告I』（齋宮歴史博物館 2001年）  
『明和町史 齋宮編』（明和町 2005年）
- ⑯小林秀「中世後期における土器工人集団の一形態－伊勢国有爾郷を素材として－」（『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年）
- ⑰伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」（『研究紀要』第1号 三重県埋蔵文化財センター 1992年）  
「外山遺跡」（『平成元年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告－第一分冊－』三重県埋蔵文化財

センター 1990年)

⑱「伊勢市上地町野垣内遺跡」(『昭和48年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1979年)

⑲『上の山遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)

⑳「VI 多気郡明和町西村遺跡・愛場遺跡」(『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会 1983年)

『波瀬B遺跡発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1992年)

㉑『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告-第3分冊-楠ノ木遺跡』(三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1991年)

『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告-第6分冊-蚊山遺跡左郡地区』(三重県教育委員会 三重県埋蔵文化財センター 1993年)

『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)

#### 【参考文献】

- ・『明和町史 史料編第一巻 自然・考古』(明和町 2004年)
- ・『斎宮跡発掘調査報告 I』(斎宮歴史博物館 2001年)
- ・『玉城町史 上巻』(玉城町 1995年)
- ・『日本歴史地名大系第24巻 三重県の地名』(平凡社 1983年)
- ・『定本 三重県の城』(郷土出版社 1991年)
- ・『三重の中世城館』(三重県良書出版 1977年)

### Ⅲ 丁長遺跡（第1次調査）

#### 1 遺 構

##### (1) I 区

##### ①基本層序と検出遺構

I区の基本層序は、1層（耕作土）、2層（包含層）、3層（地山）である。遺構は3層上面で検出した。遺構検出面の標高は約7.0mである。検出した遺構は奈良時代の道路遺構と時期不明の溝等である。以下、主な遺構について詳述するが、その他の遺構については後掲の遺構一覧表を参照されたい。

##### ②奈良時代の遺構

**S F 7** 調査区の北端部で確認した道路遺構である。調査区の都合上、検出部分は断片的であるが、総延長約37mを確認した。この道路は西北西から東南東に直線的に延びており、道路方向は概ねE15°Sである。道路幅は両側溝（後述のSD1・SD2）の芯々間で約9.4mである。路面の整形痕跡は認められず、

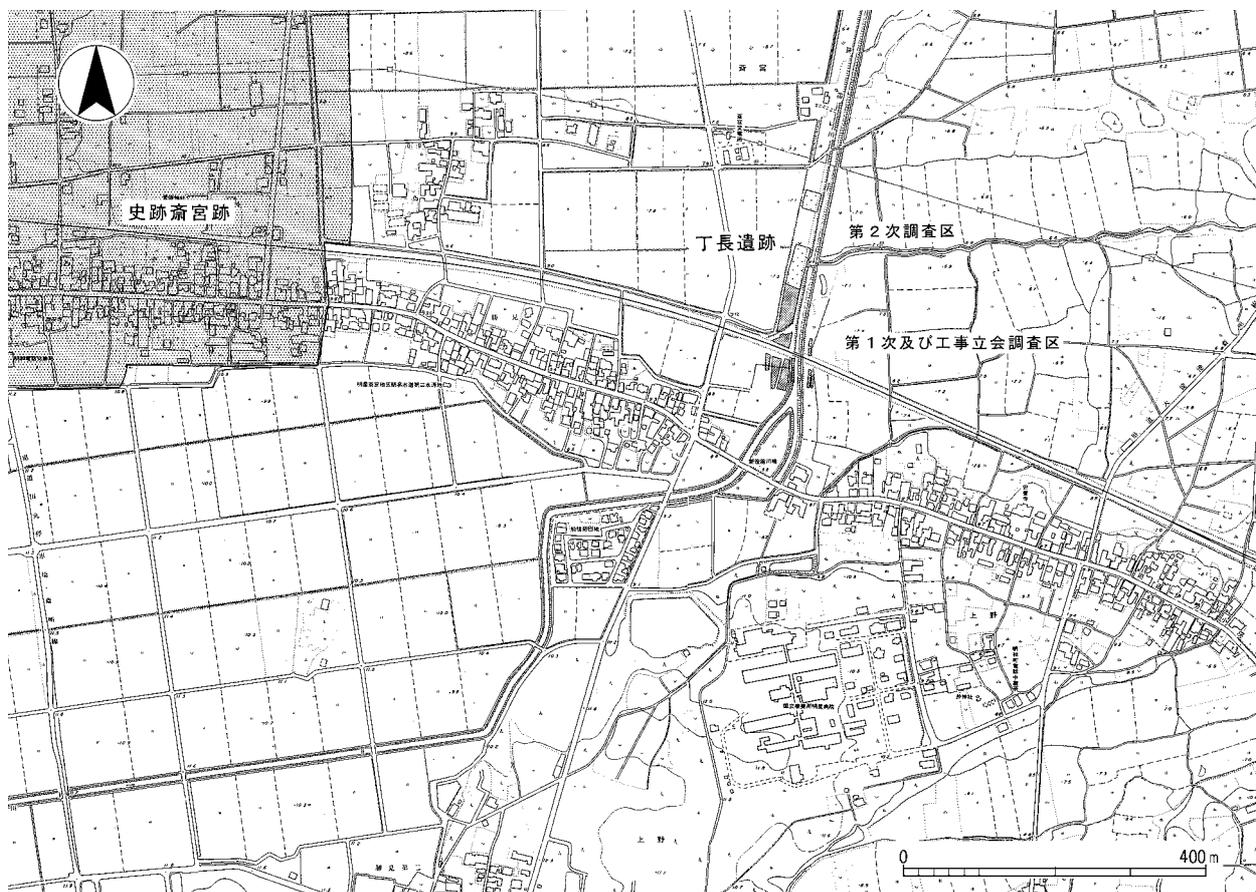
調査の最終段階で第7図のG～H間で断ち割りを行ったが確認はできなかった。

**SD1** 道路遺構S F 7の北側側溝である。一定しないが、幅は約1.5m、深さは約0.35mである。埋土は黒色系の粘土2層で下層の埋土には地山土の黄褐色系粘質土が混在していた。遺物は土錘（1）以外には土師器の細片しか出土していない。

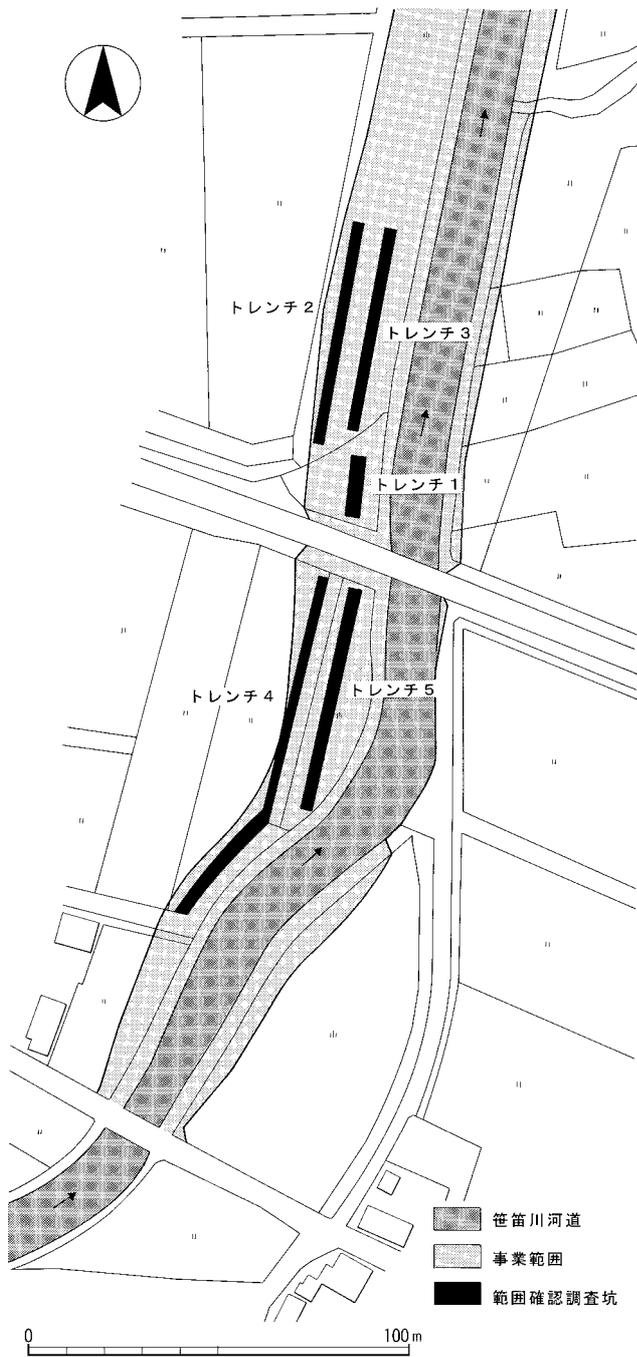
**SD2** 道路遺構S F 7の南側側溝である。一定しないが、幅は約2.1m、深さは約0.37mである。埋土は黒系のしまりの強い粘土2～3層で下層の埋土には地山土の黄褐色粘質土が混在していた。遺物は土師器台付甕（2）以外には土師器の細片しか出土していない。

##### ③時期不明の遺構

**SD3** 調査区の北端部で北東から南西方向に延びる幅約0.2m、深さ約0.07mの溝で、埋土は黒褐色粘質土1層である。時期判断のできる遺物が全く出



第3図 丁長遺跡周辺地形図（1:10,000）〔明和町都市計画図1:2,500より作成〕



第4図 丁長遺跡範囲確認調査坑配置図 (1:2,000)

土していないため、時期は不明である。遺構の性格も判断材料がない。

**SD4** 幅約0.3m、深さ約0.12mの溝で、北西から南東方向に延び、SF7 (SD1・2)・SD6を切る。埋土は黒褐色粘質土1層である。時期判断のできる遺物が全く出土していないため、時期は不明であるが、SF7を切っていることから、奈良時代以降の道路廃絶後に築かれた遺構と考えられる。遺構の性格は判断材料がないため不明である。

**SD6** SD2と並行するように延びる溝である。幅約0.5m、深さ約0.11mで、埋土は黒褐色粘質土1層である。時期判断のできる遺物が全く出土していないため、時期は不明である。しかしながら、SF7と切り合い関係にないものの、道路廃絶後に築かれた遺構と考えられるため、奈良時代以降でSD4が築かれるまでの時期に特定できよう。遺構の性格は判断材料がないため不明である。

## (2) II区

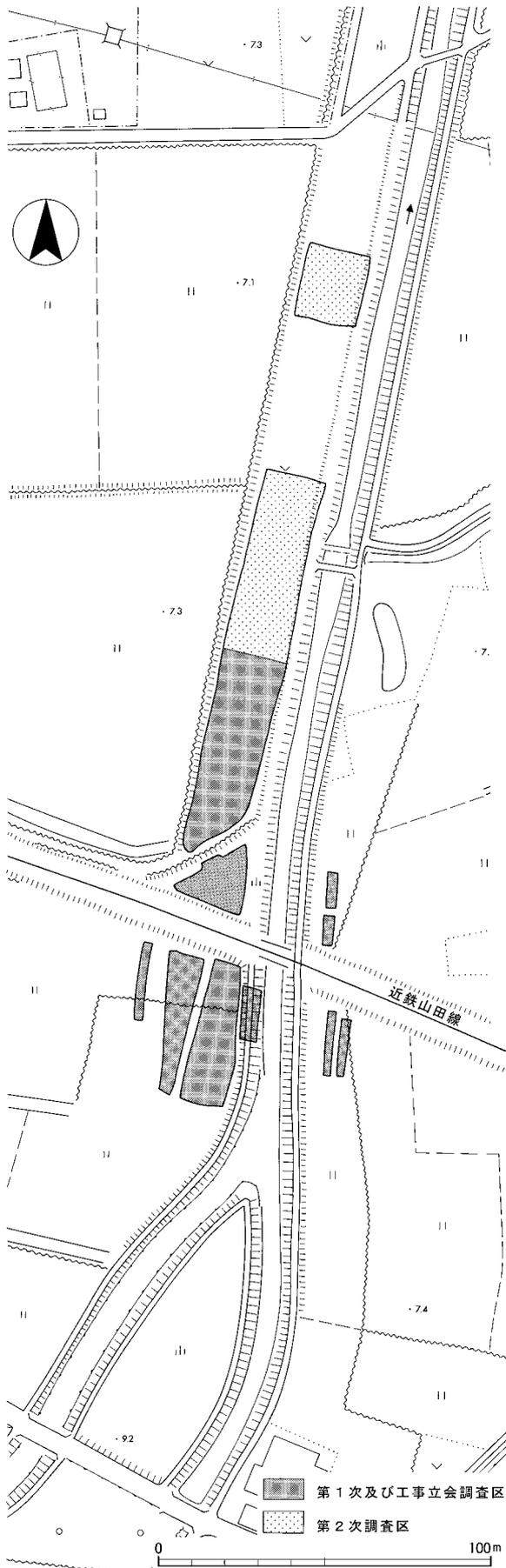
### ①基本層序と検出遺構

II区の基本層序は、第I層：表土・旧耕作土、第II層：やや粘性のある黒色系土、第III層：にぶい黄褐色土で、第II層が遺物包含層に相当し、第III層が地山である。遺構は第III層上面で検出した。遺構検出面の標高は約6.8~7.0mである。検出した遺構は平安時代末期~江戸時代の溝・土坑等である。以下、主な遺構について詳述するが、その他の遺構については後掲の遺構一覧表を参照されたい。

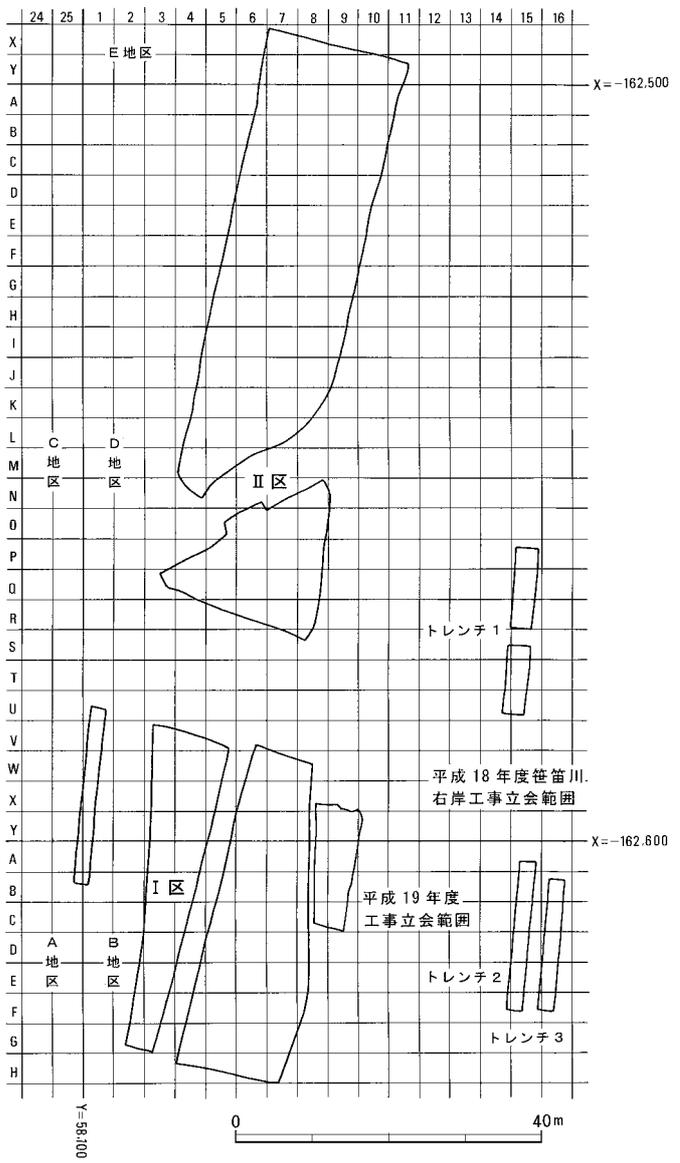
### ②平安時代末期~鎌倉時代の遺構

**SD37** 調査区の東壁際を直線的に延びる溝で、第2次調査区へ延長する。一定しないが、幅約0.8m、深さ約0.26mで、SD36・39に切られる。埋土はやや粘性のある黒褐色土で、地山土のにぶい黄褐色粘質土が少量混入する。遺物は少量かつ図化できない程の小片しか出土していないが、ロクロ土師器や山茶碗と思われる小片が出土しているため、平安時代末期頃の遺構と推定した。

**SD24** 調査区の中央部を南北方向に直線的に縦断する溝で、第2次調査区へ延長する。一定しないが、幅約2m、深さ約0.8mの規模を持つ。埋土は褐色系の粘性土及び細砂もしくは砂礫で、上層に粘性土、下層に砂礫が堆積する。また、上層埋土には地山土



第5図 丁長遺跡調査区位置図 (1:2,000)  
 [明和町都市計画図1:2,500より作成]



第6図 丁長遺跡調査区地区割図 (1:1,000)

のにぶい黄褐色粘質土が少量混入する。第2次調査の所見でも指摘されているが、溝の肩部が抉られたような痕跡が認められる点や、下層埋土の状況から水流があった可能性が考えられる<sup>①</sup>。遺物は12～13世紀初頭の山茶椀（10・11）が出土しているため、鎌倉時代の遺構と判断した。その他の混入遺物として、磨製石斧（12）や古墳時代の土師器壺（8）や台付甕（9）等が出土している。

**SD36** SD24の東側に並行するような状態で南北方向に延びる溝である。一定しないが、幅1.5m、深さ0.5mで、第2次調査区へ延長している。埋土は粘性のある黒褐色土3層で、地山土のにぶい黄褐色粘質土が混入する。12世紀末～13世紀中葉頃の山茶椀（24～27）や12世紀末～14世紀後半頃の南伊勢系土師器皿（19～22）等が出土しているため、鎌倉時代～室町時代初頭頃の遺構と推定される。並行するSD24とは何らかの関係をもって築かれた可能性がある<sup>②</sup>。

### ③室町時代の遺構

**SD29** 調査区の東壁際に位置し、調査区外に延長する。規模は一定しないが、検出した範囲内では幅1.2m、深さ0.38m程である。埋土はやや粘性のある黒色～黒褐色土2層で、地山土のにぶい黄褐色粘質土が混入する。SD36と重複するが切り合い関係は不明瞭である。14世紀後半頃の南伊勢系土師器皿（13）や15世紀後半～16世紀末頃と見られる南伊勢系土師器鍋が出土しているため、室町時代の遺構と判断した。

**SK31** 調査区の中央部付近に位置する長軸4.1m、短軸1.5m、深さ0.12mの不整隅丸長方形土坑である。埋土は黒褐色土の単層で、遺構の性格は不明である。小片のため図化できなかったが、15世紀後半～16世紀末頃と見られる南伊勢系土師器鍋が出土しているため、室町時代の遺構と推定した。

### ④江戸時代の遺構

**SD26** 調査区の中央やや南よりに位置する東西方向に延びる溝で、SD34と並行し、一部重複する。一定しないが幅1.0m、深さ0.3mの規模で、埋土はしまりのない黒褐色～褐色土である。18世紀代の陶器鉢（29）が出土しているため、江戸時代の遺構と判断した。

### ⑤時期不明の遺構

**SE25** 調査区の南側に位置する径0.8m程の土坑で、埋土は黒～灰褐色土である。調査の最終段階で重機による断ち割りを行ったが、検出面から2.5m掘り下げても底に到達できなかったため、作業の安全面から底の確認を断念した。遺物が全く出土していないため時期は不明であるが、遺構の形状から井戸と判断した。

**SD34** 調査区の中央やや南よりに位置する東西方向に延びる溝で、一定しないが幅0.8m、深さ0.1mの規模を持つ。埋土はしまりのない黒褐色土の単層である。15世紀後半～16世紀末頃と見られる南伊勢系土師器鍋が出土しているが、江戸時代の溝SD26を切っているため、江戸時代以降の遺構と推定される。

**SD39** 鎌倉時代の溝SD36に並行するような状態で南北方向に延びる溝である。一定しないが幅0.5m、深さ0.12mで、第2次調査区へ延長している。埋土はやや粘性のある黒色～黒褐色土2層で、地山土のにぶい黄褐色粘質土が混入する。遺物は土師器の小片が少量出土したのみで、時期は不明である。SD24・36と並行するような状態で延びているため、これらと関連する遺構の可能性はある。

## (3)工事立会調査区

### ①調査区の位置

工事立会調査は、平成18年度と19年度に行った。平成18年度に実施した工事立会調査区は、笹笛川右岸側の仮設工事施工部分である。仮設の作業ヤード設置のためにH杭を打設する範囲について近鉄線の南北でトレンチ調査を行った。平成19年度に実施した工事立会調査区は、18年度に本発掘調査を行ったI区の東側隣接地で、改修工事前の笹笛川左岸堤防下部に位置する（第5・6図）。

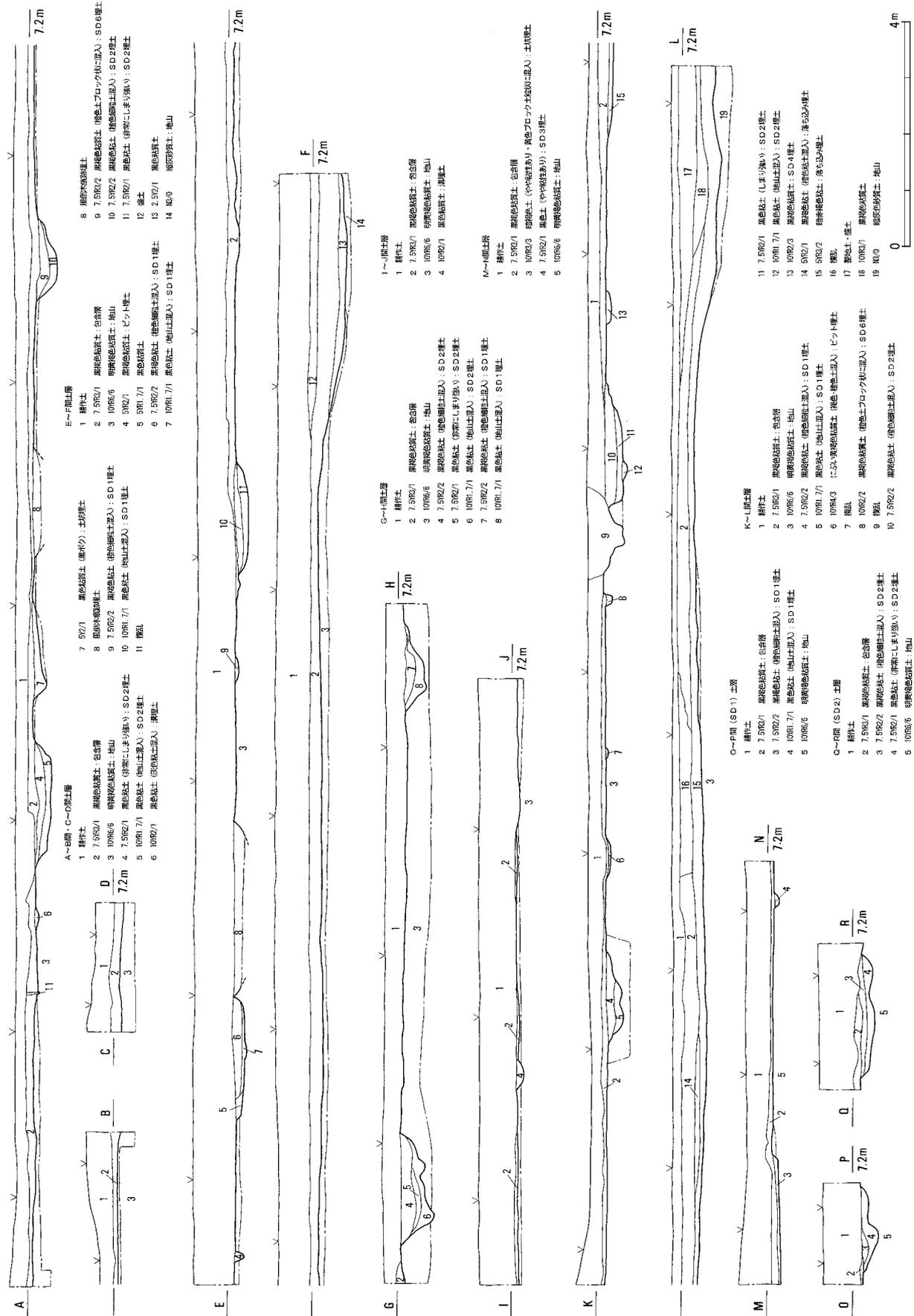
### ②平成18年度調査区（笹笛川右岸）

当該調査区については掘削作業に制限があったため十分な調査はできなかったが、旧地形が推定できる調査結果が得られた。近鉄線の北側に設定したトレンチ1では、地山面までの掘削が完全にはできなかったものの、トレンチの南側で地形が落ち込み、粘性の強い黒色粘土や粒の粗い黒色砂が堆積していたため、この部分は笹笛川の旧河道であった可能性



第7图 丁長遺跡 I 区遺構平面図 (1:200)





第8図 丁卯遺跡I区土層断面図(1:100)

が高い。近鉄線の南側に設定したトレンチ2・3では、ほぼ全面的に近鉄線北側トレンチ1の南側落ち込み部と同様の様相を呈していたため、この範囲も笹笛川の旧河道であった可能性が高い。以上のように、笹笛川の右岸は旧河道の埋没地である可能性が高い結果が得られたことから、笹笛川右岸に延長することを想定した古代官道を今回調査範囲では確認することはできなかった。しかしながら、当該範囲には旧河道の痕跡の可能性のある地割りが残存していることから（第5図トレンチ設定部の水田形状）、トレンチ3の東側隣接地で古代官道の延長部が検出される可能性が高く、橋梁遺構の検出も想定される。なお、当該調査区平面図（第11図）のトレンチ中央部に表現している方形坑はH杭の打設位置で、これらの地点を深掘りし、下部の土層確認を行った。各トレンチの土層断面図（第12図）は、この地点の土層を合成して作図している。

### ③平成19年度調査区（笹笛川左岸）

当該調査区はI区で確認したSF7の延長部分が検出されることが確実であったため、工事施工時に調査を行った。調査の結果、想定どおりSF7の両側側溝SD1・2の延長部が検出され、改修前の笹笛川河道によってSF7が破壊され、分断されていることが確認された。また、道路と川の交差部分であったため、橋梁遺構の検出も想定したが、後世の河道の変化により道路が破壊されていたため、その存在の有無は確認できなかった。なお、当該調査にかかる遺構平面図は、平成18年度本発掘調査区の平面図と接合して第7図に示している。

#### 【註】

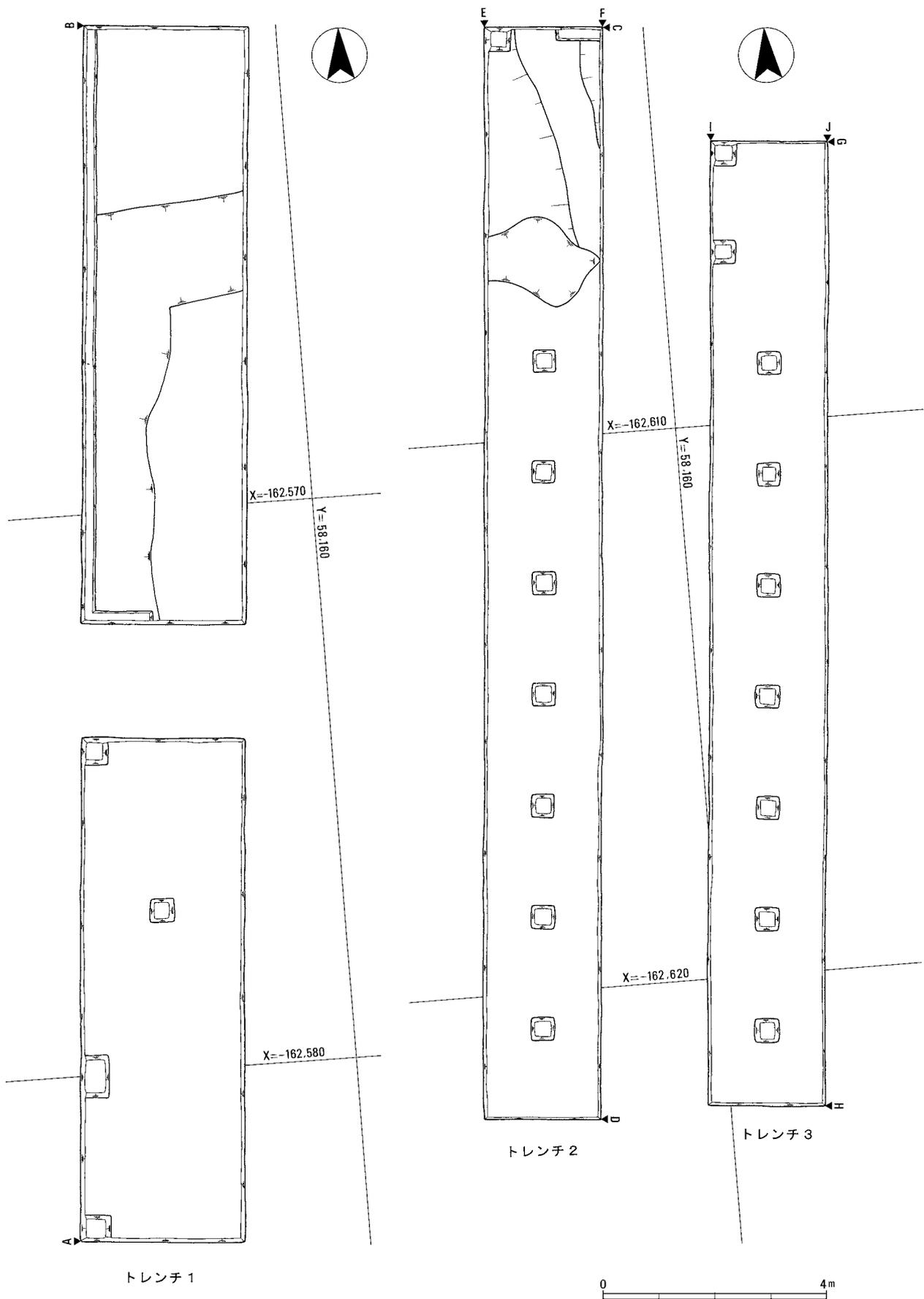
- ①『丁長遺跡（第2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2007年）
- ②前掲註①でも指摘されている。



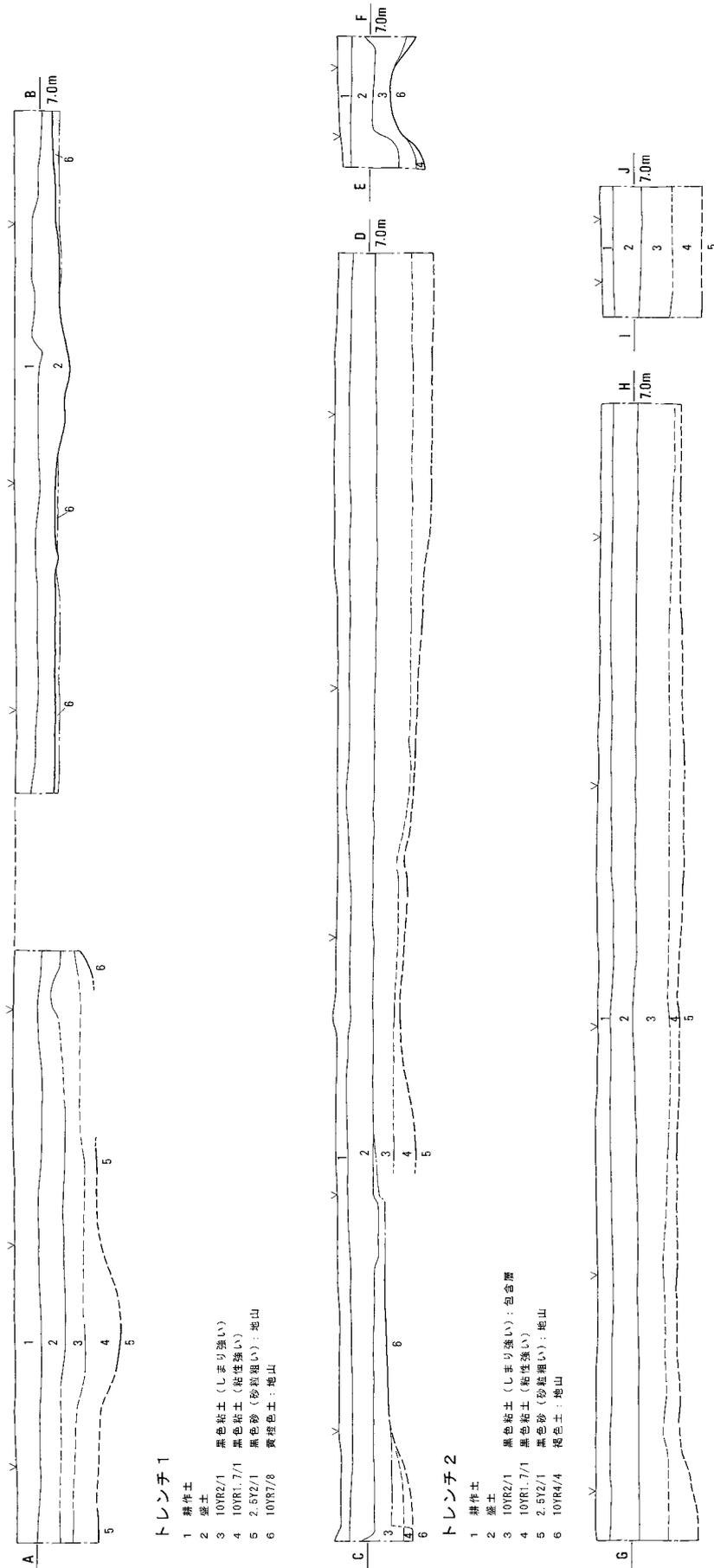
第9图 丁长遗址II区遗构平面图(1:200)







第11図 笹笛川右岸工事立会調査区平面図 (1:100)



第12図 笹笛川右岸工事立会調査区土層断面図 (1:100)

遺構 番号	調査区	大地区	小地区	性 格	時 期	規模 (m)			備 考
						長さ	幅	深さ	
SD 1	I	A・B・C・D	V 1～X 8	道路側溝	奈良	37.5	1.5	0.35	古代官道北側溝
SD 2	I	A・B・C・D	Y 25～B 8	道路側溝	奈良	36.5	2.1	0.37	古代官道南側溝
SD 3	I	A・B・C・D	W 6～8	溝	不明	6.8	0.2	0.07	
SD 4	I	A・B・C・D	X 6～B 8	溝	不明	29.5	0.3	0.12	SD 1・2・6を切る
欠番	—	—	—	—	—	—	—	—	—
SD 6	I	A・B・C・D	X 3～A 8	溝	不明	21.5	0.5	0.11	SD 4に切られる
SF 7	I	A・B・C・D	V 1～Y 25	道路	奈良	37.0	9.4	—	道路幅は両側溝芯々距離
SD 21	II	D・E	N 8、O 7・8	溝	不明	6.0	0.5	0.15	SD 24を切る
SD 22	II	D・E	O 8	溝	不明	1.0	0.8	0.31	SD 24を切る
SK 23	II	D・E	N 8	土坑	不明	3.4	2.0	0.69	SD 24を切る
SD 24	II	D・E	X 7～R 8	溝	鎌倉	74.0	2.0	0.8	第2次調査区へ延長
SE 25	II	D・E	O 6・7	井戸	不明	1.0	0.8	2.5 以上	出土遺物無し
SD 26	II	D・E	K 6～8	溝	江戸	12.0	1.0	0.3	SD 24・27を切る
SD 27	II	D・E	G 5～L 7	溝	不明	23.0	1.2	0.13	
SD 28	II	D・E	J 7	溝	不明	3.3	0.3	0.09	SD 34に切られる
SD 29	II	D・E	G 9～J 9	溝	室町	14.0	1.2	0.38	SD 30に切られる
SD 30	II	D・E	I 7・8、J 8・9	溝	不明	5.0	0.6	0.1	出土遺物無し SD 24を切る
SK 31	II	D・E	H 7	土坑	室町	4.1	1.5	0.21	
SK 32	II	D・E	K 7、L 7	土坑	不明	1.4	0.8	0.48	
SK 33	II	D・E	K 6・7	土坑	不明	1.0	0.7	0.05	SD 26に切られる
SD 34	II	D・E	K 7・8	溝	不明	12.6	0.8	0.1	SD 26を切る
SK 35	II	D・E	J 7	土坑	不明	2.8	1.2	0.16	SD 26に切られる
SD 36	II	D・E	X 8～G 9	溝	鎌倉～ 室町初頭	34.0	1.5	0.5	第2次調査区へ延長 SD 37・41を切る
SD 37	II	D・E	Y 11～G 9	溝	平安末期 以降	31.0	0.8	0.26	第2次調査区へ延長 SD 36・39に切られる
SK 38	II	D・E	D 9・10	土坑	不明	0.9	0.7	0.11	
SD 39	II	D・E	X 9～F 10	溝	不明	28.0	0.5	0.21	第2次調査区へ延長 SD 37を切る
SZ 40	II	D・E	F 9	性格不明	不明	2.1	1.5	0.41	風倒木痕跡の可能性あり
SD 41	II	D・E	Y 8・A 8	溝	不明	7.0	1.0	0.31	SD 24・36に切られる

※遺構番号8～20は欠番

第2表 丁長遺跡遺構一覧表

## 2 遺物

### (1) 出土遺物の概要

今回の調査では、I・II区及び平成18・19年度の工事立会調査を含め、整理箱20箱分(27.35kg)の遺物が出土した。出土遺物の内容としては、縄文～近世に及ぶ幅広い時期の石器・土器・陶磁器等が出土している。以下、出土遺物の概要を遺構別に記述するが、各遺物の詳細については後掲の遺物観察表を参照されたい。

### (2) I区の出土遺物

#### ①SD1出土遺物

1は幅1cm余りの土錘である。

#### ②SD2出土遺物

2は土師器台付甕の脚台部である。脚台端部内面に折り返しは認められず、面を持つ。外面はナデ調整のみである。山田猛氏の分類・編年によるF2類に相当し、6世紀代の遺物と考えられる<sup>①</sup>。

#### ③包含層他出土遺物

3は土師器杯である。口径12cmで、口縁部が強く外反する。斎宮編年第II期第1～2段階に相当し、8世紀末～9世紀前半の所産と考えられる<sup>②</sup>。

4は土師器鍋と推定した。口縁部は「く」の字状に外反する。橙色の色調を呈し、胎土はやや密である。斎宮編年第II期第1段階から出現する鉢と類似するため奈良時代末～平安時代の鉢の可能性もある<sup>③</sup>。

5は山茶椀である。高台の断面形状が逆三角形を呈し、端部が尖る。藤澤良祐氏の山茶椀編年(以下、藤澤編年と略表記)の第3型式に相当し、11世紀後半から12世紀初頭に位置付けられる<sup>④</sup>。

6・7は施釉陶器椀である。6は信楽産で、18～19世紀の所産と考えられる。7は美濃産の小椀で、18世紀後半頃の所産と考えられる<sup>⑤</sup>。

### (3) II区の出土遺物

#### ①SD24出土遺物

8は土師器小型平底壺である。口径と底部径がほぼ同じで、器高が低く、扁平な器形を呈する。口縁部は直線的に外傾する。内外面の調整は、ナデ・オサエのみである。平底壺C類に相当し、山城IV式期の所産と考えられる<sup>⑥</sup>。

9は土師器台付甕の脚台部である。脚台の立ち上

がり角度は緩く、端部内面の折り返しが長い。外面には粗いハケメ調整が認められる。D1～D2類に相当し、山城III～IV式期の所産と考えられる<sup>⑦</sup>。

10・11は山茶椀である。10は藤澤編年の渥美型第5型式、11は渥美型第4型式に相当し、12世紀前半～13世紀初頭に位置付けられるものである<sup>⑧</sup>。

12は全長17cm強の磨製石斧である。側面に研磨痕が認められ、部分的に面を持つ。石材はハイアロクラスタイトである。

#### ②SD29出土遺物

13は口径12cm弱の南伊勢系の土師器皿である。伊藤裕偉氏による編年(以下、伊藤編年と略表記)のIII a期に相当し、14世紀後半代に所属する遺物である<sup>⑨</sup>。

14は南伊勢系の土師器鍋である。口縁部のみの残存であるが、折り返された口縁端部の外面に弱いヨコナデが施される。伊藤裕偉氏による編年の第4段階に相当すると思われる、15世紀後半～16世紀末の遺物と考えられる<sup>⑩</sup>。

15は土師器S字状口縁台付甕である。外面には粗いハケメ調整が施される。C類に相当し、山城II式期の所産と考えられる<sup>⑪</sup>。

16は口径13cm程の玉縁の白磁椀である。11世紀後半～12世紀前半頃の所産と考えられる<sup>⑫</sup>。

17・18は山茶椀である。口径がそれぞれ18cm・22cm程で、ともに藤澤編年の第4型式に相当する。12世紀前半～中頃の所産と考えられる<sup>⑬</sup>。

#### ③SD36出土遺物

19～22は口径が11～13cm程の南伊勢系土師器皿である。伊藤編年のII b～III a期に相当し、12世紀末～14世紀後半頃に位置付けられる<sup>⑭</sup>。

23は土師器S字状口縁台付甕である。口縁端部が水平で先端がやや尖る。外面には粗いハケメ調整が施される。F2～F3類に相当し、6世紀代の遺物と推定される<sup>⑮</sup>。

24～27は山茶椀である。25・26の高台は低く、粗雑である。これらは藤澤編年の渥美型第5～7型式に相当し、12世紀末～13世紀中葉頃に位置付けられる<sup>⑯</sup>。

28は龍泉窯系の青磁椀である。外面には蓮弁文が施される。13世紀前半代の所産と考えられる<sup>⑰</sup>。

#### ④ S D 26 出土遺物

29は美濃産の施釉陶器鉢である。18世紀代の所産と考えられる<sup>⑧</sup>。

#### ⑤ D-I 8 Pit 1 出土遺物

30は土師器の手捏ね土器である。底部から口縁部までくびれない直線的な器形を呈する。古墳時代の所産であろう。

#### ⑥ 包含層他出土遺物

31は粗製の土師器壺である。球形の体部に直線的に開く口縁部が付加される。内外面をナデ・ケズリ調整で仕上げられる。内面には炭化物が、外面には煤がそれぞれ付着しており、火にかけた形跡が窺われる。古墳時代の所産であろう。

32・33は土師器台付甕である。ともに脚台端部内面の折り返しが長く、外面に粗いハケメ調整が施される。いずれもD1～D2類に相当し、山城Ⅲ～Ⅳ式期の所産と考えられる<sup>⑩</sup>。

34は知多産の山茶碗で、低くやや粗雑な高台が付加される。藤澤編年の第6型式に相当し、13世紀前半代に位置付けられる<sup>⑫</sup>。

35は先端部と基部が欠損するため全体の器形は判然としないが、有茎もしくは有舌尖頭器と推定される。石材はサヌカイトである。

36は石核である。図正面は上下方向の剥離、側面は横方向の剥離が認められ、裏面は剥離作業がなされず礫表を残す。石材はチャートである。

37は木葉形尖頭器である。表面は母岩からの剥離面、裏面は礫表のままである。両面ともに周縁部が調整され刃部が作出されている。石材は珪質片岩である。

#### 【註】

①『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター 1994年）

以下、古墳時代の土師器の分類・編年については上記の文献に拠る。

②『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』（斎宮歴史博物館 2001年）

以下、古代の土師器の編年については上記の文献に拠る。

③前掲註②

④藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年）

以下、山茶碗の編年については上記の文献に拠るが、藤澤氏に実見の上ご教示もいただいている。

⑤藤澤良祐氏のご教示に拠る。

⑥前掲註①

⑦前掲註①

⑧前掲註④

⑨『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993年）

『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1996年）

以下、南伊勢系土師器皿の分類・編年は上記の文献に拠る。

⑩伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1 1990年）

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」

（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年）

⑪前掲註①

⑫中世前期の貿易陶磁器の時期判断は下記の文献に拠った。

山本信夫「Ⅳ 考察 1. 中世前期の貿易陶磁器～その分析視点～」（『県営圃場整備国東川南地区関係発掘調査報告書 原遺跡七郎丸1地区・口寺田遺跡』国東町教育委員会 1999年）

⑬前掲註④

⑭前掲註⑨

⑮前掲註①

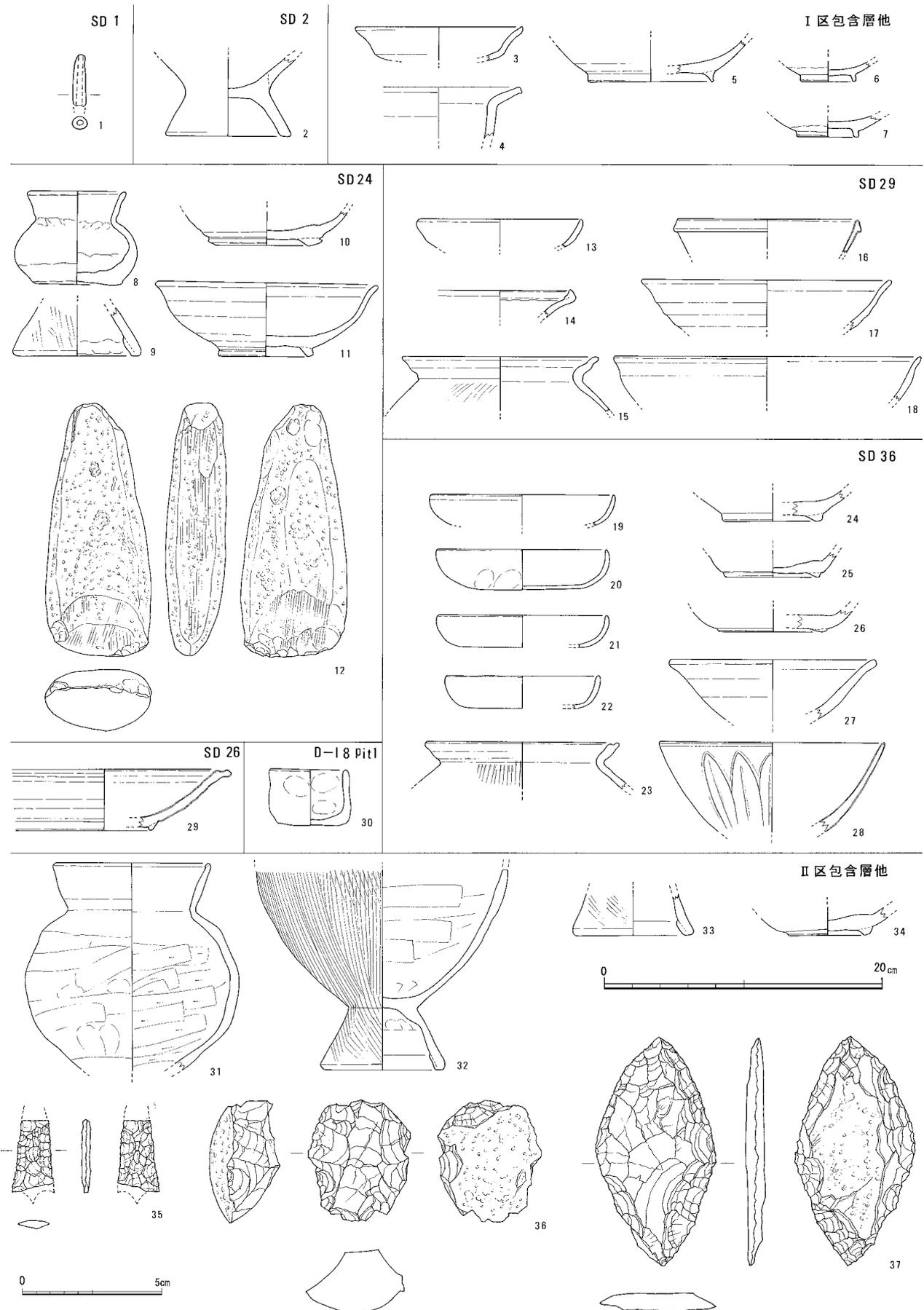
⑯前掲註④

⑰前掲註⑫

⑱藤澤良祐氏のご教示に拠る。

⑲前掲註①

⑳前掲註④



第13図 丁長遺跡出土遺物実測図 (1~34=1:4、35~37=1:2)

遺物 番号	登録 番号	器 種	調査 区	大地区	小地区等	遺構 属位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
1	001-04	土錘	I	D	Y7	SD1	残存長 3.7	幅 1.05	孔径 0.4~ 0.5	-	やや粗(1~2mmの砂粒含む)	並	黄灰 2.5Y6/1	端部 欠損	
2	001-01	土師器 台付甕	I	D	Y1	SD2	-	-	台径 9.0	外面:ナデ 内面:ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/4 橙 7.5YR7/6	台部 1/12	
3	001-02	土師器 杯	I	西区	-	表土	12.0	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 1/12	
4	001-03	土師器 鍋	I	D	W1	包含層	-	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	橙 5YR7/6	口縁部 1/12	
5	001-05	山茶椀	I	-	トレンチ 4	-	-	-	高台径 9.0	外面:ロクロナデ・糸切り・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 N8/0	高台部 1/12	初殻痕有り
6	001-07	陶器 椀	I	-	トレンチ 4	-	-	-	高台径 3.9	外面:ロクロズリ・削出し高台・施釉 内面:ロクロナデ・施釉	密	良	素地:灰白 2.5Y8/2 釉:淡黄 2.5Y8/3	高台部 6/12	信楽
7	001-06	陶器 椀	I	東区	-	表土	-	-	高台径 4.4	外面:ロクロズリ・削出し高台・施釉 内面:ロクロナデ・施釉	密	良	素地:灰白 N8/0 釉:灰白 7.5Y7/1	高台部 3/12	美濃
8	002-03	土師器 壺	II	D	C7	SD24	7.0	6.75	底部径 6.4	外面:オサエナデ 内面:オサエナデ	密(1.5mm以下の砂粒含む)	並	淡黄 2.5Y8/3	底部 12/12	
9	003-02	土師器 台付甕	II	D	K8	SD24	-	-	台部径 9.0	外面:ハケメ(3本/0.6cm) 内面:オサエナデ	密	並	外:浅黄 2.5Y7/3 内:灰黄 2.5Y6/2	台部 2/12	
10	002-02	山茶椀	II	D	O8	SD24	-	-	高台径 8.0	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ・ナデ 内面:ロクロナデ	密(2mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 10/12	自然釉残存
11	002-01	山茶椀	II	D	I7	SD24	16.0	5.3	高台径 6.7	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密(1~2mmの砂粒含む)	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 12/12	自然釉残存
12	006-01	磨製 石斧	II	D	B7	SD24	全長 17.4	全幅 7.5	全厚 4.4	-	-	-	-	完存	重量:950g 石材:ハイロク クラストイト
13	002-04	土師器 皿	II	D	G9	SD29	11.8	-	-	外面:オサエナデ 内面:オサエナデ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 4/12	
14	003-03	土師器 鍋	II	D	I9	SD29	-	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密(0.5mm以下の砂粒含む)	並	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい 黄橙 10YR7/4	口縁部 1/12	
15	003-01	土師器 S字状 口縁台 付甕	II	D	H9	SD29	14.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (4本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	外:灰黄褐 10YR5/2 にぶい黄橙 10YR7/3 内:浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12	
16	002-07	白磁 椀	II	D	I9	SD29	13.0	-	-	外面:ロクロナデ・施釉 内面:ロクロナデ・施釉	密	良	素地:灰白 N8/0 釉:灰白 7.5Y/1	口縁部 1/12	
17	002-06	山茶椀	II	D	I9	SD29	18.0	-	-	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	外:灰白 5Y7/1 内:灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/12	
18	002-05	山茶椀	II	D	I9	SD29	22.1	-	-	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	口縁部 1/12	
19	005-02	土師器 皿	II	D	F9	SD36	13.4	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密(1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
20	004-03	土師器 皿	II	D	B8	SD36	12.4	2.9	-	外面:ヨコナデ・オサエ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 11/12	
21	004-04	土師器 皿	II	D	F8-9	SD36	12.4	2.3	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 2/12	
22	005-01	土師器 皿	II	D	F8-9	SD36	11.2	2.4	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 3/12	
23	005-03	土師器 S字状 口縁台 付甕	II	D	F9	SD36	13.9	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1.6cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:にぶい 黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12	外面煤付着
24	005-06	山茶椀	II	D	G9	SD36	-	-	高台径 7.0	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 3/12	
25	005-08	山茶椀	II	D	F8-9	SD36	-	-	高台径 6.8	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	やや密	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 2/12	

第3表 丁長遺跡出土遺物観察表①

遺物番号	登録番号	器種	調査区	大地区	小地区等	遺構層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
							口径	器高	その他						
26	005-09	山茶椀	II	D	F 8・9	SD 3 6	-	-	高台径 7.7	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 2/12	
27	005-05	山茶椀	II	D	D 8	SD 3 6	14.9	-	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y7/1	口縁部 2/12	
28	005-04	青磁椀	II	D	F 8・9	SD 3 6	16.2	-	-	外面：ロクロナデ・施釉 内面：ロクロナデ・施釉	密	良	素地：灰白 5Y7/1 釉：灰オリーブ 5Y5/3	口縁部 1/12	
29	003-04	陶器鉢	II	D	K 6	SD 2 6	-	-	-	外面：ロクロナデ・施釉 内面：ロクロナデ・施釉	密	良	素地：灰白 7.5Y7/1 釉：オリーブ黄 5Y6/3	口縁部 1/12	美濃
30	004-06	土師器手捏ね土器	II	D	I 8	Pit1	5.6	4.1	底部径 4.8	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・オサエナデ	やや密	並	橙 7.5YR7/6	口縁部 10/12・底部 12/12	外面煤付着
31	004-02	土師器壺	II	D	R 6	包含層	11.3	-	-	外面：ヨコナデ・オサエ後工具ナデ・ケズリ 内面：ヨコナデ・ナデ・ケズリ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 3/12	内面炭化物付着 外面煤付着
32	004-01	土師器台付甕	II	D	R 6	包含層	-	-	台部径 9.0	外面：ヨコナデ・ハクメ (10本/3.4cm) 内面：ヨコナデ・オサエナデ・工具ナデ	密	並	外：灰黄褐 10YR5/2 内：褐灰 10YR4/1	台部 12/12	
33	004-05	土師器台付甕	II	D	O 6	包含層	-	-	台部径 8.7	外面：ヨコナデ・ハクメ (5本/1cm) 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	外面：にぶい橙 7.5YR6/4 内面：にぶい黄橙 10YR7/4	台部 11/12	
34	005-07	山茶椀	II	D	D	表土	-	-	高台径 6.0	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	やや密	良	灰白 2.5Y7/1	高台部 6/12	初殺痕有り
35	006-04	有蓋もしくは有舌尖頭器	II	D	O 6	包含層	残存長 2.6	残存幅 1.5	残存厚 0.35	-	-	-	-	先端部・基部欠損	残重量：1.4g 石材：サヌカイト
36	006-03	石核	II	D	F 9	包含層	全長 4.4	全幅 3.7	全厚 2.5	-	-	-	-	-	重量：43.4g 石材：チャート
37	006-02	木葉形尖頭器	II	D	P 8	包含層	全長 8.3	全幅 4.3	全厚 0.7	-	-	-	-	完存	重量：28.6g 石材：珪質片岩

【凡例】

- ・遺物番号：挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号：実測段階の登録番号を示す。
- ・大地区：100m方眼の大地区の出土位置を示す。
- ・小地区等：4m方眼の小地区または範囲確認調査の調査坑番号等の出土位置を示す。
- ・遺構層位：報告の出土遺構もしくは出土層位を示す。
- ・色調：『新版標準土色帖』1999年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存度：土器・陶磁器は当該部位を12分割した際の残存度を示す。石器・土製品は完形のものは「完存」、欠損部のあるものは欠損部位を示した。また、残存度を示しがたいものは「-」で表記した。

第4表 丁長遺跡出土遺物観察表②

### 3 結 語

#### (1) 丁長遺跡の変遷と遺跡範囲

今回の調査では、近鉄線南側のⅠ区で奈良時代の官道遺構等を、近鉄線北側のⅡ区では中世～近世の溝等をそれぞれ確認した。ここでは、確認した遺構や出土遺物の他、第2次調査の成果も踏まえ、丁長遺跡の変遷と遺跡範囲を見ていきたい。

時期が明確な遺構は古代以降のものしか確認されていないが、出土遺物を見てみると、Ⅱ区では縄文時代草創期にまで遡る木葉形尖頭器や、時期は特定しがたいものの縄文時代の所産と考えられる磨製石斧や石核等が出土している。一方、Ⅰ区でも製品は出土していないが、チャート剥片が4片ほど出土しており、当地では縄文時代草創期頃から人間の営為の跡が認められる。遺跡の南～東が地形的に落ち込む台地の縁辺に相当することから、当該期の当地周辺は集落を営む場所ではなく、専ら狩猟や採集等のフィールドとされていたのであろう。また、同様に遺構は確認されていないが、古墳時代の所産と考えられる土師器の壺や台付甕等が一定量出土していることから、付近で当該期の集落が営まれていた可能性は高い。第1次調査区の北側隣接地である第2次調査区では当該期の遺構・遺物は確認されていないことから、今回調査区の西側に集落が営まれていた可能性がある。

当遺跡において確認されている最も早い段階の遺構は、遺跡南部に位置する古代官道である。前述の通り道路の両側側溝からの出土遺物は僅少であるため、出土遺物を根拠とする遺構の時期は不明と言わざるを得ないが、遺構の規模や方向・位置から史跡齋宮跡で検出されている奈良時代官道の一部であることは確実である。古代官道を確認したⅠ区では、これ以外には時期・性格不明の溝が数条確認されているのみで、これらは検出状況から古代官道廃絶後の遺構と考えられる。包含層他の遺物も含め、出土遺物もⅠ区では僅少であり、古代官道機能時以外には目立った土地利用がなされなかったと推定される。

Ⅱ区では平安時代末期頃から溝が築かれ、以後、中世～近世にかけて溝・土坑等が築かれてはいるが、住居跡と認められるものは検出されていない。第1

次調査区の北側に隣接する第2次調査の成果では、時代が下るにつれて北へ遺構の中心が移っていくことが指摘されており、また、第2次調査区の北側で行われた工事立会では遺構・遺物ともに確認されていない<sup>①</sup>ことから、第2次調査のⅡ区付近が丁長遺跡の概ね北限と考えられよう。前述のとおり遺跡の南～東は地形的に落ち込む台地の縁辺に相当することから、第1次・第2次調査区は遺跡の北限・東限・南限に相当すると考えられる。

#### (2) 古代官道について

古代の伊勢国には、東海道及び東海道鈴鹿駅家から分岐して伊勢平野を南下し、齋宮・伊勢神宮を経て志摩国に至る、一般に伊勢道と称される2本の官道が通っていたとされる。今回の調査では、この内の伊勢道の一部と考えられる路面幅9m余りの道路遺構が検出された。この官道は、齋宮跡周辺では史跡範囲内の発掘調査でこれまでに確認されていたが、史跡範囲外で確認されたのは今回が初めてである。ここではこれまでに齋宮跡で確認された成果や齋宮跡周辺の古代官道に関する論考をもとに、今回確認した古代官道について若干の考察を行いたい。

今回古代官道が確認されたのは齋宮跡の東部である。換言すれば、古代伊勢道が結んでいた伊勢国の拠点施設である齋宮と伊勢神宮を結んでいた官道の一部である。この途上には齋王が神宮三節祭に奉仕するため伊勢に赴く際に宿所とした離宮院が置かれ、その設置場所は延暦16(797)年に度会郡沼木郷高川原(第1次離宮院)から同郡湯田郷宇羽西村(第2次離宮院)に移転したとされる。なお、前者は現伊勢市宮後町付近(第14図M)に、後者は度会郡小俣町(第14図K)に比定されており<sup>②</sup>、この離宮院は太神宮司や神宮への勅使が宿泊する駅使院も併設された神宮にかかる行政・交通の拠点でもあったとされる。さらに、第2次離宮院には天長元(824)年に齋宮が移され、承和6(839)年に多気郡に復するまでの15年間は常齋宮であったとされる。

齋宮跡とその周辺部の古代官道については、これまでいくつかの論考が示されているが、齋宮と伊勢神宮を結ぶルートは諸説有るため、主なものを以下に見ていきたい。

古代伊勢道については、足利健亮氏の研究を端緒

とする。齋宮跡周辺における足利氏の古代伊勢道復元ルートは、都から齋宮へ至る際に通過する齋宮直近の飯高駅家を、駅家の遺称地として現松阪市駅部田（まえのへた）町付近に比定し、そこから遺存する地割りや小字界等に着目し、また、駅馬の意である「はやうま」が渡河する瀬との遺称地として注目した現松阪市早馬瀬（はやませ）町（第14図B）を経て齋宮跡に繋がる直線道路である。齋宮・離宮院・伊勢神宮を結ぶルートについては、齋宮跡の南東約1.5kmに位置する大仏山丘陵の南に開いた谷あいの中央部に残る「有示道下（うじみちした）」（現伊勢市小俣町：第14図J）という小字に注目し、これを「有尔道下（うにみちした）」の転訛である可能性と、この小字所在地の北西2kmに位置する現明和町有爾中集落（第14図H）との関連性を指摘している。その上で、「有示道下」から北西に延びる細道が若干の切り通しを施した古道で、丘陵内の谷筋を辿って明和町有爾中集落に出るとし、さらに北向して齋宮跡中央付近の竹神社（第14図G）に至るとしている。一方、「有示道下」からは南東の官舎神社北辺（＝第2次離宮院推定地：第14図K）を経て最短距離で外宮前面に至るとの想定ルートを示している<sup>③</sup>（第14図A-B-F、G-H-I-J-K-L）。

足利氏の想定ルートに対し杉谷政樹氏は、その後の齋宮跡での発掘調査成果から奈良時代の伊勢道が史跡内を直線的に横断していたこと、奈良時代後期に整備された方格地割が奈良時代伊勢道を分断するように整備されたことを踏まえ、奈良時代伊勢道は足利氏が想定する史跡中央部の竹神社から南下するのではなく、更に直線的に続いてきた可能性が極めて高いとし（第14図C-D-E-F…N）、また、方格地割整備後の齋宮から第2次離宮院へのルートを文献史料の記述をもとに以下のように想定している<sup>④</sup>。まず、齋王参宮史料から齋王が神宮三節祭に齋宮から離宮院へ赴く際に規定された2か所の堺祭の具体的な場所の記述が「宮東湟外及多氣度會兩郡堺」であることに着目し、清浄な齋宮と周囲を画した「湟」が「宮東」である点と、神嘗祭に際して齋王が離宮院に赴く際に、女官一人が「齋宮東字鉗田」の橋桁の破損により乗馬とともに落下して疵を

負う事件が発生し、齋王参宮の路・橋を管理する官司が処罰された記事から、少なくとも平安時代前半段階には、齋王の参宮経路は齋宮から南に向かうのではなく、東に向かっていたことを指摘している。また、神宮勅使史料からは、平安中期以降の記事として、勅使が齋宮を経て伊勢に向かう道は平安時代前半期同様、齋宮から東に向かっていた可能性が高いとしている。次に、齋宮から東に出たその先の離宮院までの経路については、治承元（1177）年の神宮勅使史料に記される「筒丘」・「油多野」の地名から、前者を齋宮と離宮院の間にある大仏山丘陵に、後者を現伊勢市小俣町湯田及び同市湯田野付近一帯に比定し、齋宮跡の東南東方向にある明星から南下して大仏山丘陵の中央部に位置するシゲ池（第14図S）が所在する谷を通過し、丘陵南側の「有示道下（うじみちした）」（第14図J）・「油多野」を経て第2次離宮院へ到達したと推定している（第14図N-Q-J-K）。この「筒丘」に比定された大仏山は現在明和・玉城・小俣の三町にまたがる広域な丘陵を指すが、岡田登氏は杉谷氏の指摘に同意した上で、現伊勢市小俣町に遺存する字「大仏前」・「大仏後」の位置から、広域丘陵の南西部に位置するやや独立した玉城町と小俣町にまたがる小丘陵が「筒丘」であると断定している<sup>⑤</sup>。なお、杉谷氏はこの推定ルート以外に、屈曲地点である明星付近のルートとして、近世参宮街道の屈曲（第14図T-R）と類似するような南東方向のルートであった可能性や、古代伊勢における土師器生産の一大拠点と考えられている北野遺跡（第14図U）で、溝芯々間3～6mを測る古道両側溝とされる溝が確認されていることから、齋宮の方格地割から東南東に向かつて出て約100mの勝見集落（第14図N）から南下し、北野遺跡を通過して有爾中集落で東に転じて以東は足利氏の推定経路で離宮院へ到達するとするルート（第14図N-U-H-I-J-K）も併せて提示している。

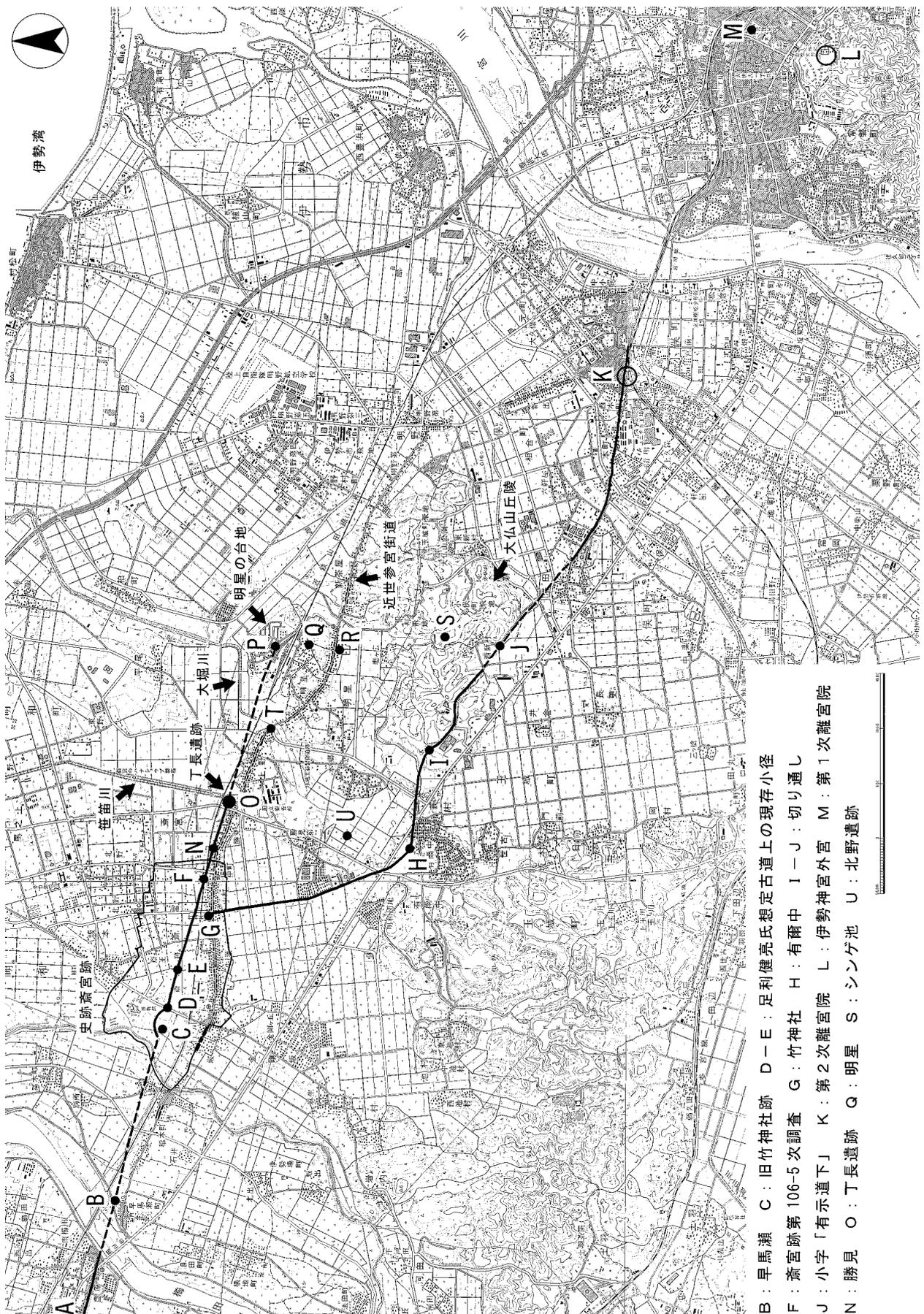
この他、伊藤裕偉氏は、史跡齋宮跡の南部に展開する条里型地割の検討から、一部参宮街道と重複して東西に延びる軸線が齋宮寮方格地割の東西軸と同一方位を示す軸として「多氣郡東西基軸線」、この軸線と直交関係にある小字「上六ノ坪」に西接する

軸線を「多気郡南北基軸線」と設定し、さらに多気郡条里型地割と伊勢道、齋宮寮方格地割の関係の検討からこの三者は有機的に関係するとした。ここでは齋宮以東における伊勢道の道程にはほとんど触れられていないが、伊勢道を史跡齋宮跡地内から東に延長すると、先述の東西・南北両基軸線の交点に交わることを指摘した上で、齋宮寮方格地割の南東で条里交差点に交わるあたりまでは、E15°S（東15度南）の方位で直線的に東進していたものと推定している<sup>⑥</sup>。

以上、齋宮跡とその周辺部の古代官道について触れられた主な論考を見てきたが、ここで改めて今回調査で確認した丁長遺跡SF7について見ていきたい。この道路遺構を確認したのは総延長約37m分であるが、西北西から東南東（E15°S）に直線的に延び、道路幅は両側溝の芯々間で約9.4m、路面の整形痕跡は認められなかった。これまでの齋宮跡での発掘調査事例と道路方向、道路幅、路面の整形痕跡の様子はすべて一致し、図上での位置関係からもSF7は齋宮跡で確認されている古代伊勢道の一部であることは確実である。また、前述の通り道路遺構SF7は両側溝ともに時期判断のできる遺物は出土していないが、齋宮跡の発掘調査成果では8世紀中葉以前の敷設とされている<sup>⑦</sup>ため、SF7もその時期の敷設ということになる。一方、この道路の廃絶時期については判断材料がなく、不明と言わざるを得ないが、包含層等からの出土ながら8世紀末～12世紀初頭頃にかけての遺物が出土していることから、平安時代にも引き続き機能していた可能性がある。そうであるならば、杉谷氏の指摘通り、方格地割の整備後以降、平安時代を通じて齋王の参宮経路及び神宮勅使の使用した経路は齋宮から東へ向かって出る直線的な経路であったとも言えよう。さらに、齋王参宮史料にある神嘗祭に際して齋王が離宮院に赴く際に、女官一人が「齋宮東字鉗田」の橋桁の破損により乗馬とともに落下して疵を負う事件の舞台が、杉谷氏も候補地の一つとして指摘した笹笛川である可能性もあり、今回調査区のこの地点が文献の記述に一致する有力な候補地となる。現在の笹笛川は字境界となっており、丁長遺跡の川を挟んだ対岸（笹笛川右岸側）の字名が「土橋」であるのも示唆

的で、杉谷氏もこの字名に注目している。調査に際しては、調査区が笹笛川の隣接地であったことから橋梁遺構の検出も念頭に置いて現地調査を行ったが、先述の平成19年度調査のとおり、残念ながら河道の経年変化（もしくは近年の河川改修）によって道路遺構は破壊され、橋梁遺構の確認はできなかった。しかしながら、多少の振れはあるものの、平成18年度に行った笹笛川右岸側調査区の東側隣接地で古代官道の延長部が検出される可能性は非常に高く、齋王参宮史料の記事に登場する橋梁遺構が発見される可能性も否定できない。

次に、丁長遺跡で確認された古代伊勢道のさらに東側の延長部についてであるが、現在の地形的な観点から当該部分を見てみると、丁長遺跡の東約800mに大堀川、約1,200mに近鉄明星駅の所在する台地がある。地形的な障害としてはこの2地点が挙げられるが、現在の大堀川については笹笛川同様、古代伊勢道が機能していた時期の河道や川幅等は不明である。一方、明星地区の台地については、近鉄明星駅の設置や住宅の建設で大きく地形が改変されているものの、周辺部との比高差は地形図で見える限り3～4mある。また、明治31年発行の大日本帝国陸地測量部2万分一地形図「田丸町」に当時の明星村の当該台地が表現されているが、周囲から独立した台地（あるいは極めて低位の丘陵）と読み取れ、近世参宮街道はその南側を迂回するように通じている。近年の古代官道にかかる発掘調査事例や研究成果からは、丘陵や谷のような地形的障害も地形を改変してまで直線経路を志向することが指摘されていることから、古代伊勢道についても経路を転換する特別な理由がない限り、直線的な経路が設定された可能性が高い。また、足利氏の復元した古代伊勢道は、「平野がもっとも奥まったところの、丘陵に移り変わる傾斜変換線ぞいを、あるいは、平野に突出する山地や丘陵の先端を結ぶ<sup>⑧</sup>」ルートであることから、明星地区に所在する台地が、極めて低位ながら平野部に突出する一種のランドマークとして設定され、そこを目標として直線道路が敷設されたのではないだろうか（第14図N-O-P）。さらにその先の延長部については、発掘調査による確実な遺構の確認がない限り、そのルートの断定はできないが、離宮



- B : 早馬瀬 C : 旧竹神社跡 D-E : 足利健亮氏想定古道上の現存小径
- F : 斎宮跡第106-5次調査 G : 竹神社 H : 有爾中 I-J : 切り通し
- J : 小字「有示下」 K : 第2次離宮院 L : 伊勢神宮外宮 M : 第1次離宮院
- N : 勝見 O : T長遺跡 Q : 明星 S : シンゲン池 U : 北野遺跡

第14図 斎宮周辺古道想定図 (1:50,000)

院や伊勢神宮に向かうにはいずれ南へルートを転換する必要があるため、その転換点も大きな問題であろう。あくまでも直進性を志向するのであれば、大仏山丘陵の北側を直進し、離宮院へ向かって南折する近世参宮街道に近いルートも想定されるが、齋王参宮史料に記された齋王が神宮三節祭に齋宮から離宮院へ赴く際に規定された堺祭の記事や神宮勅使史料から杉谷氏が指摘した、明星付近で南下して大仏山丘陵を越えて東折し、離宮院に至るルートが現状では最も妥当なルートと思われる。

調査前の丁長遺跡は近年のは場整備や笹笛川の改修で地形が改変され、かつ、遺物の表面採集も困難な状況であったため、通常の分布調査では遺跡として認定しがたいものであった。しかし、齋宮跡の発掘調査で確認されていた古代伊勢道の延長線上に位置することと、齋宮から伊勢への経路として齋宮の東側への延長を指摘した先学の研究成果があったことが、発掘調査を実施する契機となった。今回の発掘調査で確認されたのは、並行する二条の溝のみである。しかしながら、これまで諸説あった齋宮から伊勢神宮へ至る古代伊勢道のルートが、一部ではあるが考古学的な成果として確実となったことは、この地域の古代史を解明する上で貴重な資料が得られたと言え、その成果は決して小さくはないであろう。今後は、先学が指摘した様々な推定ルートに十分な注意を払うことが必要であると同時に、開発事業等との調整には一層の慎重な対応が求められると言えよう。

#### 【註】

- ①『丁長遺跡（第2次）発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 2007年）
- ②岡田登「伊勢国度会駅家所在地考」（『創設十周年記念 皇學館大学史料編纂所論集』皇學館大学史料編纂所 平成元年）
- ③ a 足利健亮「大和から伊勢神宮への古代の道」（『探訪 古代の道』第一巻 法藏館 1988年）  
b 足利健亮「平安京から伊勢神宮への古代の道」（『探訪 古代の道』第二巻 法藏館 1988年）
- ④杉谷政樹「古代官道と齋宮跡について」（『研究紀要』第6号 三重県埋蔵文化財センター 1997年）  
なお、具体的な文献史料については上記文献を参照さ

れたい。また、本文中で掲載した第14図は、上記文献掲載の「第1図 齋宮周辺古道想定図」を参考に一部修正・加筆して作成している。

- ⑤岡田登「天平勝宝八年創祀の度会郡中臣氏神社について」（『史料』第185号 皇學館大学史料編纂所 平成15年）
- ⑥伊藤裕偉「齋宮寮・伊勢道・条里」（『齋宮歴史博物館 研究紀要』十三 齋宮歴史博物館 2004年）
- ⑦前掲註⑥
- ⑧前掲註③ b

## IV 大谷遺跡 (第1・2次調査)

### 1 遺 構

#### (1) A・B地区

##### ①基本層序

A地区の基本層序は、1・2層（耕作土等）と（43・44層を除く）17層以下に大別される。遺構の検出は2層下面で行った。17層以下は粘土・粘質土層もしくは砂粒層の互層となり、安定していない。また、木片が多く混在しており、各層の堆積過程で周辺部に繁茂していた樹木が混入したと判断される。

B地区の基本層序は、2・6層（耕作土等）、14・16・17層（包含層）、23層以下に大別される。遺構の検出は14・16・17層下面で行った。23層以下の状況はA地区と同様で、木片が混入する粘質土と砂粒層の互層である。

##### ②検出遺構

SR1 A・B地区を蛇行しながら縦断する自然流路である。地形から判断すると、西から東へ水流があったものと判断され、B地区の東端部では流路が南北に分岐する。幅は一定しないが、概ね5m程である。深さも一定はしないが、概ね0.2~0.6m程で、深いところでは1m超となる。埋土は粘質土層と砂粒層が何層にも互層堆積しており、同一流路で繰り返し水流が発生しながら徐々に埋没していったと推定される。埋土上層面では大型の樹木が散在的に埋没していたことから、流路埋没の最終段階で比較的多量の水流通ったものと推定される。遺物は埋土上面で15世紀後半頃の土師器皿（1）が出土した他、埋土下層で縄文土器（2）等がごく僅かに出土したのみであり、また、流路全体の確認をしていない



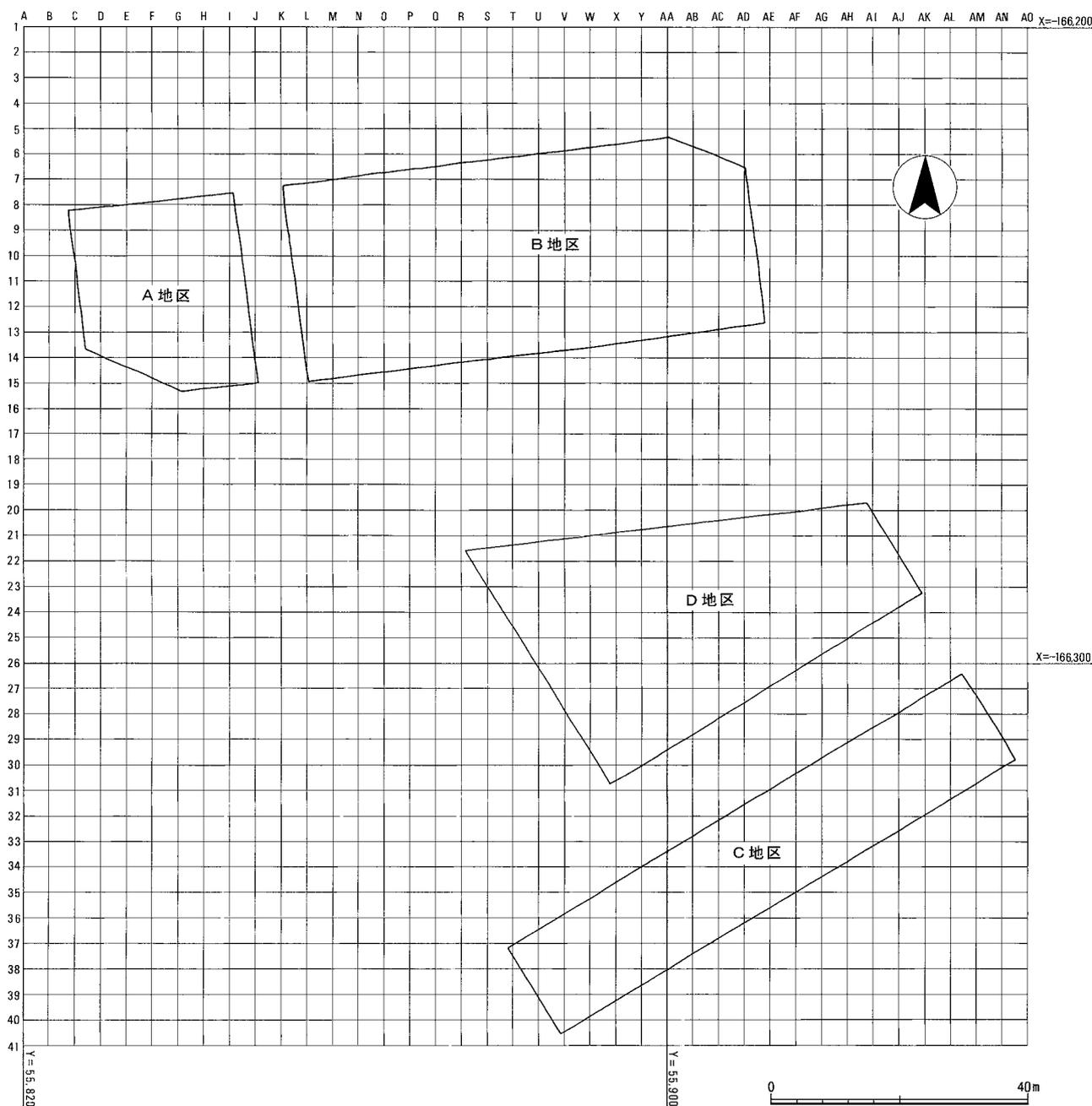
第15図 大谷遺跡調査区位置図 (1:4,000)

め遺構の時期は決しがたい。なお、出土遺物が僅少のため、流路全体の完掘は行わず、部分的な断ち割りを行って断面形状と深度を確認した（第19図）。従って、第17図の遺構平面図では、流路底部の下端を断ち割りによって確認した部分をもとに推定線（破線）で表現した。

**SR2** B地区の中央部を南北に延びる自然流路である。地形から判断すると、北から南へ水流があったものと判断される。一定はしないものの、幅は約1.5m、深さは約0.2mで、SR1を切る。埋土は灰色系の2層の砂層で、木片を多量に混入していた。

南端部では埋土上層が黒褐色系の粘質土層となり、若干深くなる。遺物は古墳時代の土師器壺（3）と高杯（4）の他、樹木が6本程度出土した。その中には端部に伐採痕（切断痕）が残存する原材（5・6）が認められた。流路全体の確認をしていないため遺構の時期は決しがたいが、出土した土器から古墳時代の遺構と推定される。

**SR3** B地区の中央部やや東寄りを南北に蛇行しながら延びる自然流路である。地形から判断すると、北から南へ水流があったものと判断される。一定はしないものの、幅は約1.5m、深さは約0.4mで、S

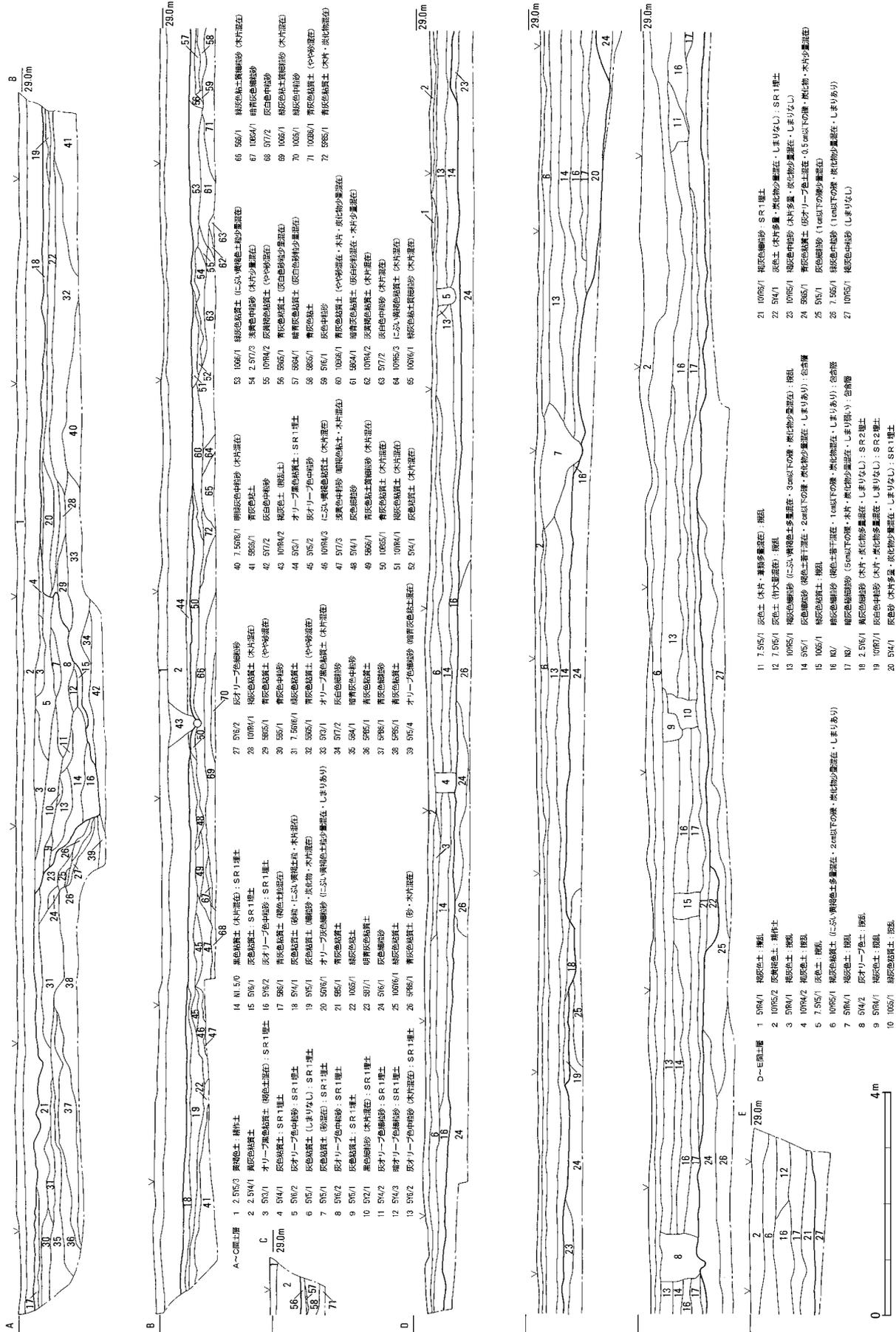


第16図 大谷遺跡調査区地区割図（1:10,000）

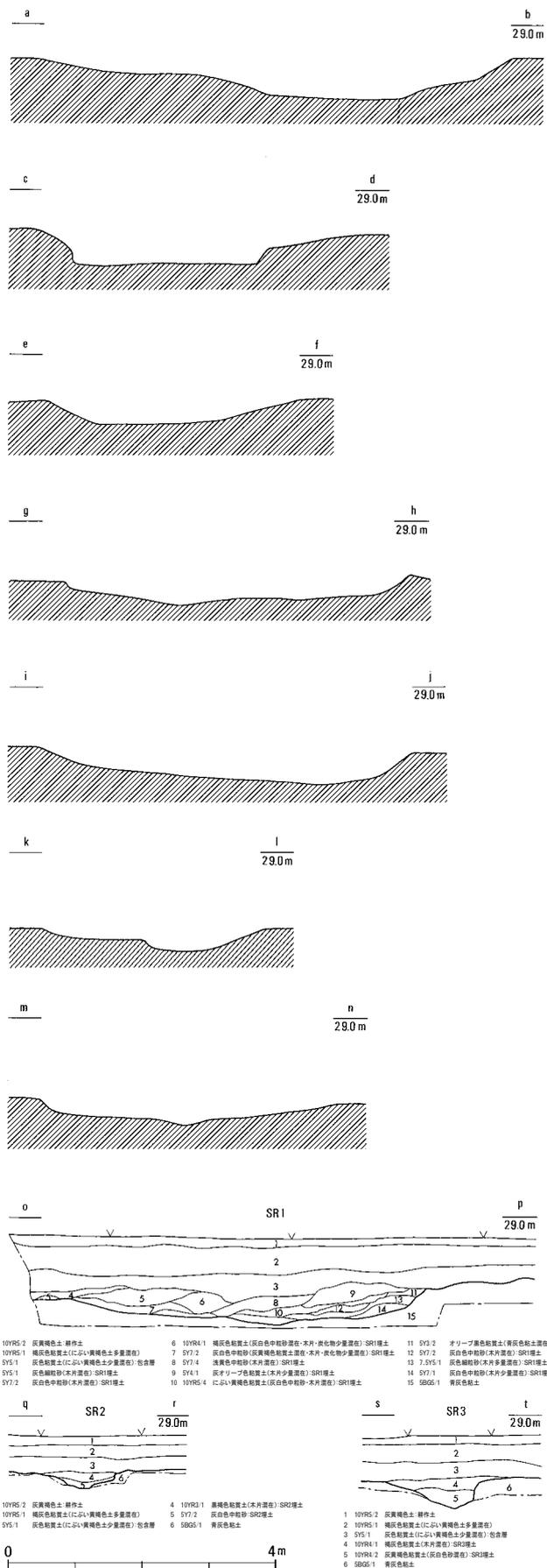


第17图 大谷遺跡A・B地区遺構平面図 (1:400)





第18図 大谷遺跡A・B地区土層断面図 (1:100)



第19図 大谷遺跡 SR1～3断面図 (1:100)

R1を切る。埋土は褐色系の2層の粘質土層で木片や砂粒が混入している。遺物は縄文土器深鉢(8)、弥生土器壺(9)、土師器甕(7)等が出土している。流路全体の確認をしていないため遺構の時期は決しがたいが、出土した土器から奈良時代以前の遺構と推定される。

## (2) C地区

### ①基本層序

C地区の基本層序は、1～5層(耕作土等)、6・9層(包含層)、7・8・41層に大別される。遺構の検出は6層下面で行った。遺構検出を行った7・8・41層の状況はA・B地区と同様の様相を呈する。

### ②検出遺構

**SR21** 調査区の東端部に位置する土坑状の落ち込みである。深さが0.1m程の不定形をした性格不明遺構で、人工的な遺構とは考えられない。自然の落ち込み地形であろう。遺物は、15世紀前半代の土師器皿(29)が1点出土している。

**SR22** 調査区の東端部に位置する自然流路である。不定形で一定しないが、幅約3.5m、深さ約0.3mの規模である。埋土は褐色系の砂質土1層で、木片が混入していた。遺物は小片のため判然としないが、縄文土器が出土している。

**SR23** 調査区の東半部を蛇行しながら南北に延びる自然流路である。地形から判断すると、北から南へ水流があったものと推定される。一定しないが、幅約3m、深さ約0.5mである。埋土は黄褐色系の砂質土で粒度の粗い砂粒が混在する。遺物は台付甕(30)と推定される脚台部片が1点ながら出土している。

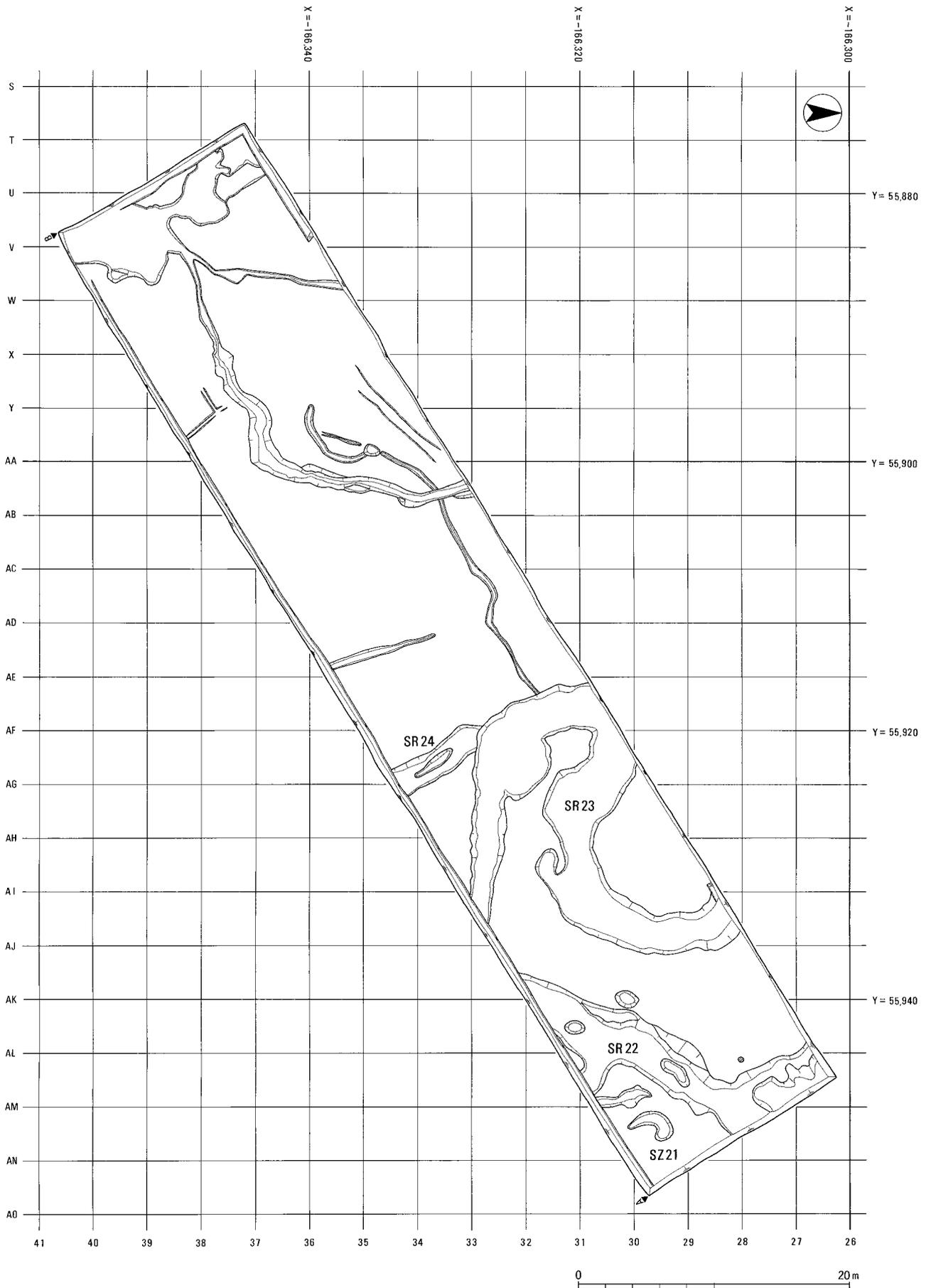
## (3) D地区

### ①基本層序

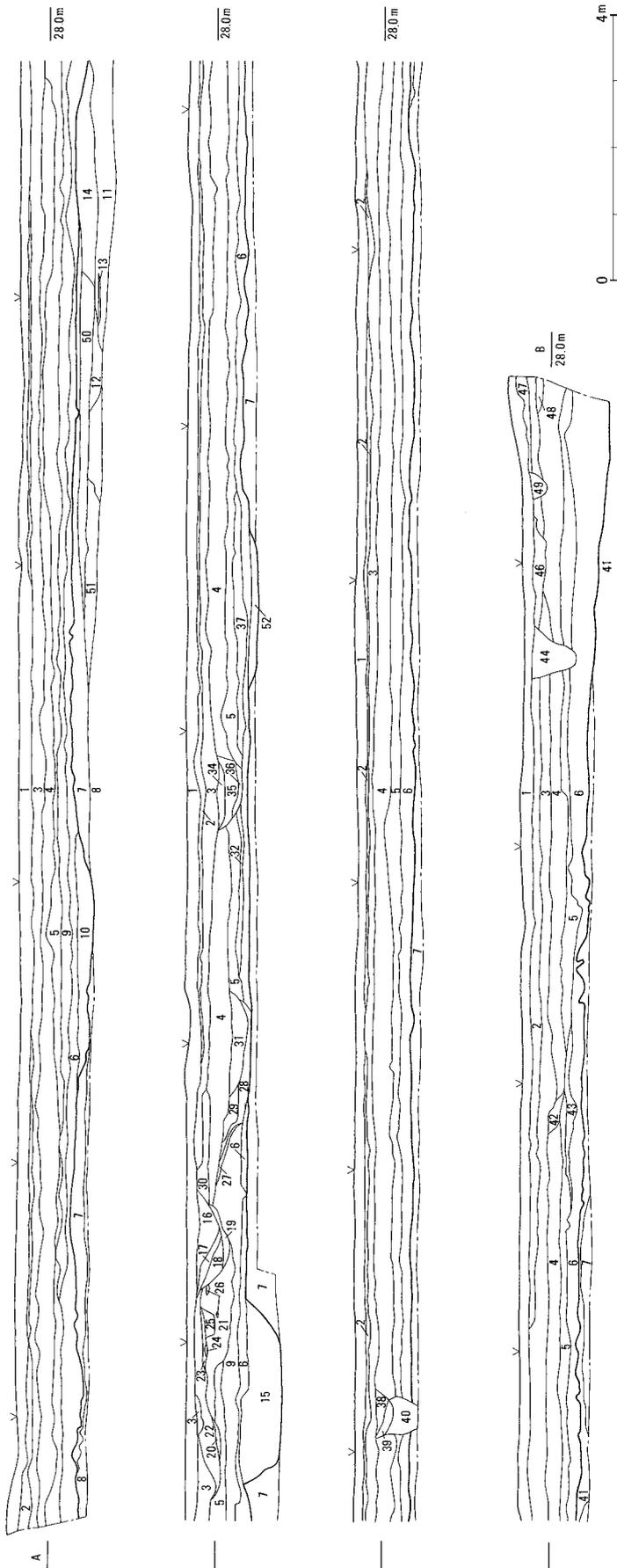
D地区の基本層序は、1～4層(耕作土等)、5～7層(包含層)、21～40層に大別される。遺構の検出は6・7層下面で行った。遺構検出を行った21～40層の状況はA～C地区と同様の様相を呈し、木片等が混入する粘土層と砂粒層が互層となっている。

### ②検出遺構

**SR31** 調査区の東端部で南北方向に延びる自然流路である。地形から判断すると、北から南へ水流が

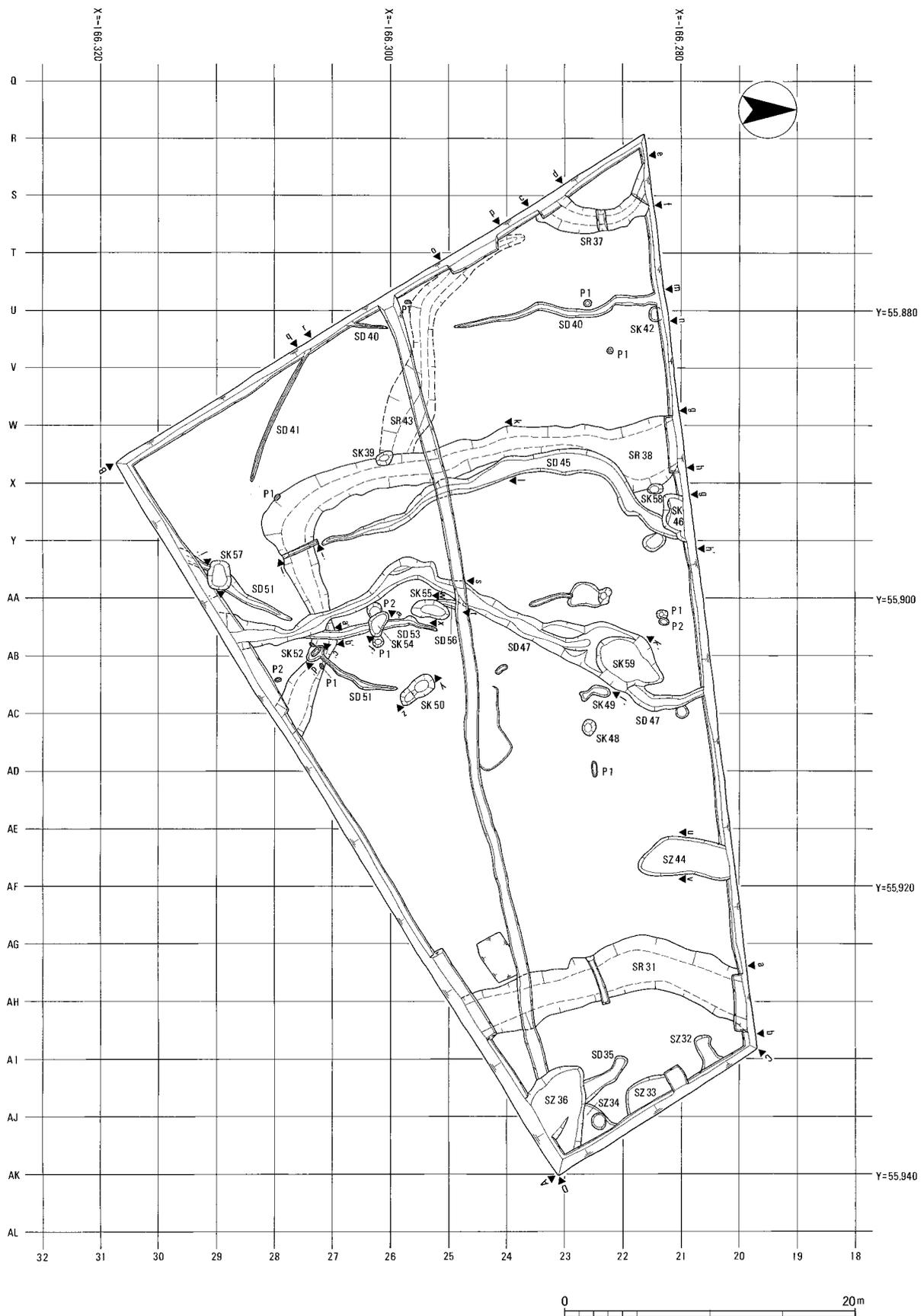


第20図 大谷遺跡C地区遺構平面図 (1:400)

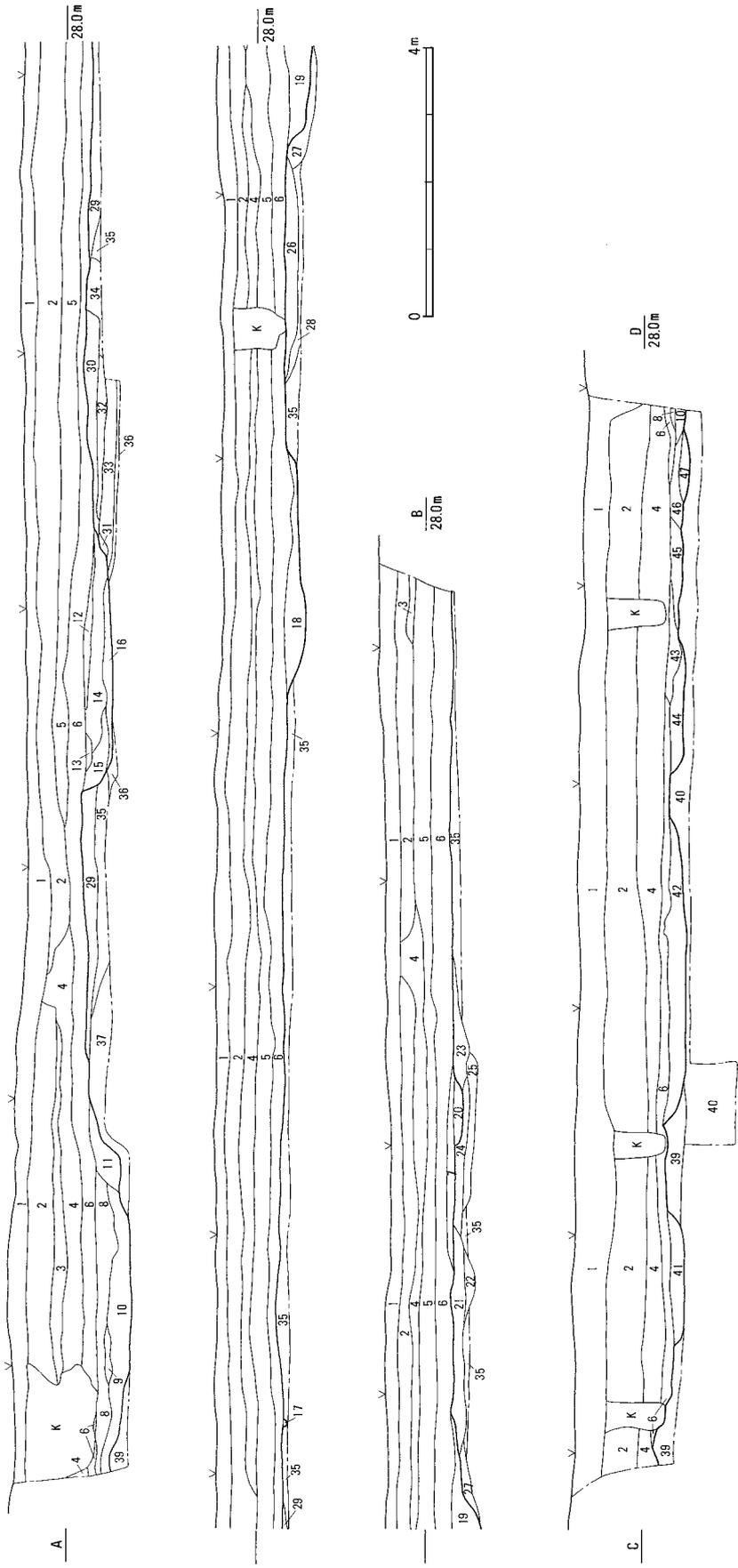


- |            |                             |            |                                  |
|------------|-----------------------------|------------|----------------------------------|
| 1 10R6/1   | 明黄褐色粘質土・耕作土                 | 37 10R6/1  | 黒褐色粘質土                           |
| 2 10R7/6   | 明黄褐色粘質土・床土                  | 38 10R6/4  | にぶい黄褐色粘質土・攪乱                     |
| 3 10R6/3   | にぶい黄褐色粘質土                   | 39 10R5/4  | にぶい黄褐色粘質土 (褐灰色土ブロック状混在)・攪乱       |
| 4 10R6/2   | 灰黄褐色粘質土                     | 40 10R5/4  | にぶい黄褐色粘質土 (褐灰色土・明黄褐色土ブロック状混在)・攪乱 |
| 5 10R6/2   | 灰黄褐色粘質土                     | 41 10R5/1  | 褐灰色シルト                           |
| 6 10R4/2   | 灰黄褐色粘質土 (木片・炭化物混在)・包含層      | 42 10R4/2  | 灰黄褐色粘質土                          |
| 7 10R7/1   | 灰白色粘質土                      | 43 10R2/1  | 黒色シルト                            |
| 8 10R3/2   | 明黄灰色粘質土                     | 44 10R7/3  | にぶい黄褐色粘質土 (小礫混在)・攪乱              |
| 9 10R3/2   | 黒褐色粘質土 (炭化物混在)・包含層          | 45 欠番      |                                  |
| 10 10R3/3  | 明黄褐色粘質土 (木片・炭化物混在) : S R22  | 46 10R6/6  | 黄褐色粘質土・攪乱                        |
| 11 10R4/1  | 褐灰色粘質土                      | 47 7.5R7/4 | にぶい黄褐色粘質土 (小礫混在)・攪乱              |
| 12 10R4/1  | 褐灰色粘質土                      | 48 7.5R5/4 | にぶい黄褐色粘質土 (小礫混在)                 |
| 13 10R6/4  | にぶい黄褐色粘質土 (混在)              | 49 10R5/6  | 黄褐色粘質土 (混在)・攪乱                   |
| 14 10R5/1  | 褐灰色粘質土                      | 50 10R4/6  | 褐褐色粘質土・調査対象外の遺構埋土                |
| 15 10R6/4  | にぶい黄褐色粘質土 (細砂混在) : S R23    | 51 10R5/4  | にぶい黄褐色粗砂                         |
| 16 10R4/3  | にぶい黄褐色粘質土 (黄褐色砂質土・炭化物混在)・攪乱 | 52 10R4/1  | 褐灰色粘質土 (にぶい黄褐色粗砂上層に混在)           |
| 17 7.5R6/6 | 明褐色粘質土 (径2mm木の混在)           |            |                                  |
| 18 10R4/2  | 灰黄褐色粘質土 (明褐色土・炭化物混在)・攪乱     |            |                                  |
| 19 10R6/2  | 灰黄褐色粘質土・攪乱                  |            |                                  |
| 20 10R4/3  | にぶい黄褐色粘質土                   |            |                                  |
| 21 10R6/4  | 明黄褐色粘質土                     |            |                                  |
| 22 10R7/6  | 明黄褐色粘質土                     |            |                                  |
| 23 10R4/2  | 灰黄褐色粘質土 (炭化物少量混在)           |            |                                  |
| 24 10R7/4  | にぶい黄褐色粘質土                   |            |                                  |
| 25 10R7/4  | にぶい黄褐色シルト (灰黄褐色シルト混在)       |            |                                  |
| 26 10R6/4  | にぶい黄褐色粘質土                   |            |                                  |
| 27 10R4/1  | 褐灰色粘質土 (炭化物少量混在)・攪乱         |            |                                  |
| 28 10R6/2  | 灰黄褐色粘質土 (褐灰色砂質土混在)・攪乱       |            |                                  |
| 29 10R6/4  | にぶい黄褐色粘質土                   |            |                                  |
| 30 10R6/4  | にぶい黄褐色粘質土                   |            |                                  |
| 31 10R5/1  | 褐灰色粘質土                      |            |                                  |
| 32 10R4/1  | 褐灰色粘質土                      |            |                                  |
| 33 欠番      |                             |            |                                  |
| 34 10R4/4  | 褐色粘質土・攪乱                    |            |                                  |
| 35 10R4/3  | にぶい黄褐色粘質土 (褐灰色土ブロック状混在)・攪乱  |            |                                  |
| 36 10R6/3  | にぶい黄褐色粘質土 (褐灰色土ブロック状混在)・攪乱  |            |                                  |

第21図 大谷遺跡C地区土層断面図 (1:100)

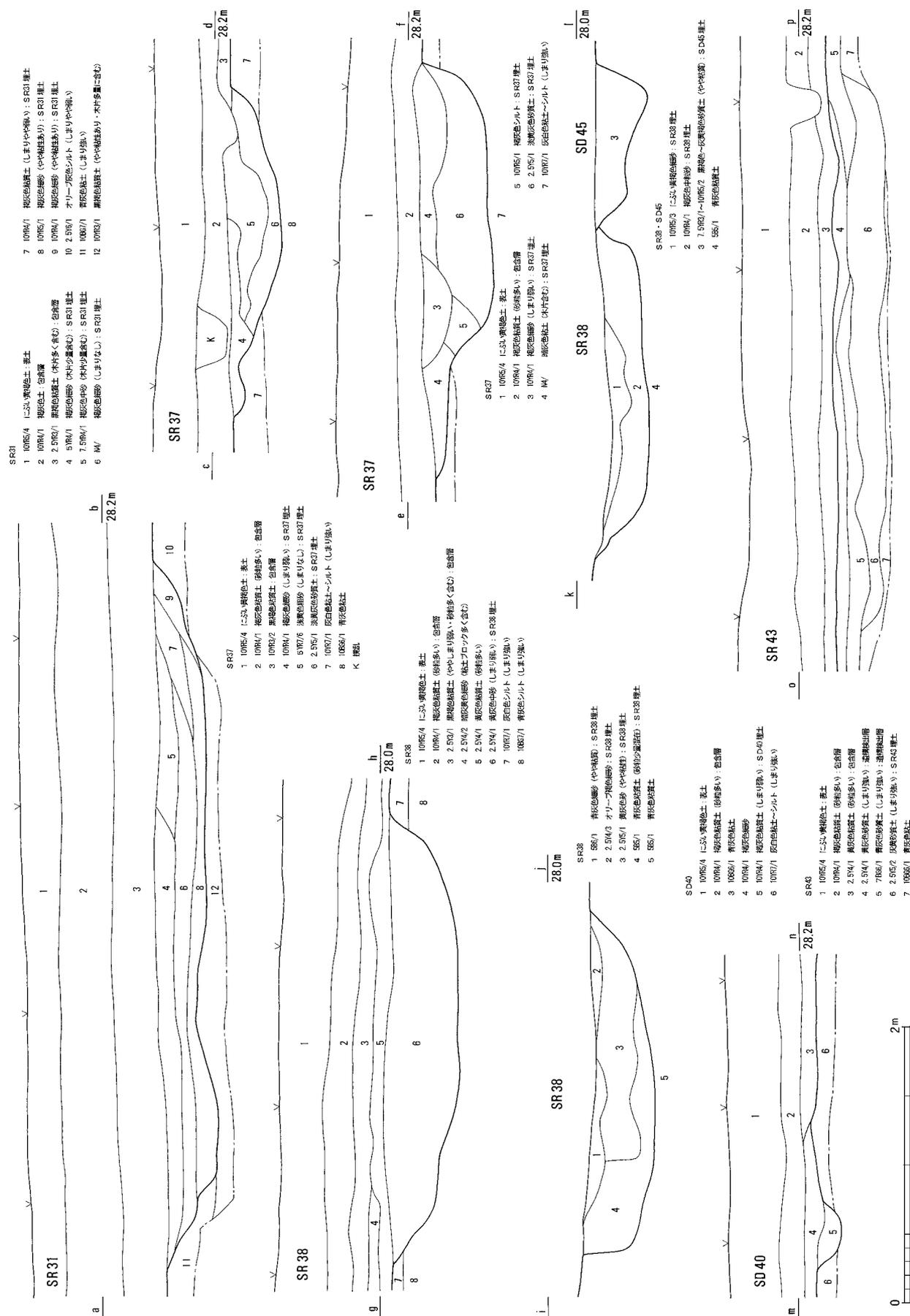


第22図 大谷遺跡D地区遺構平面図 (1:400)



- 1 10R6/6 明褐色粘質土・耕作土
- 2 10R6/3 にふい草粘質土
- 3 10R6/2 灰褐色粘質土 (粘性強い)
- 4 10R6/2 灰褐色粘土 (しまり強い、炭化物・木片若干含む)
- 5 10R7/1 灰白色粘質土 (しまり強い、マンガン多量含む)
- 6 10R6/2 黒褐色粘質土 (粘性強い、しまり強い、炭化物・木片多量含む)
- 7 10R6/2 黒褐色粘質土 (しまり強い、炭化物・木片多量含む)
- 8 10R6/1 黒褐色粘質土 (しまり強い)
- 9 10R6/2 黒色粘質土 (木片多量含む)
- 10 10R6/2 黒褐色粘質土 (木片多量含む)
- 11 N5/ 灰白色粘土 (しまり強い)
- 12 2.57/8 赤褐色粘質土 (しまりなし)
- 13 N5/ 灰白色粘土 (木片多量含む)
- 14 10R6/3 褐色土と淡黄色中粒砂の互層土 (しまり強い)
- 15 6N/ 灰白色粘土 (しまりあり)
- 16 5N/ 灰白色粘土 (しまり強い、木片・灰白色中粒砂多量含む)
- 17 10R3/2 黒褐色粘質土 (しまり強い)
- 18 2.57/6 明褐色中粒砂と青灰色粘土ブロックの互層土 (やしまり強い)
- 19 10R3/2 明褐色粘質土 (やしまり強い、木片多量含む)
- 20 10R6/2 灰褐色粘質土 (やしまり強い、明褐色中粒砂ブロック多い)
- 21 10R6/2 暗褐色粘質土 (木片多量含む)
- 22 10R6/2 暗褐色粘質土 (しまり強い)
- 23 10R6/2 灰褐色粘質土 (やしまりあり)
- 24 2.57/6 明褐色粘質土 (やしまりあり)
- 25 10R6/2 黒褐色粘質土 (明褐色中粒砂多量含む)
- 26 10R6/1 明褐色粘土 (しまり強い、粘性強い)
- 27 2.57/6 明褐色粘質土 (しまり強い)
- 28 2.57/1 明褐色粘質土 (しまり強い)
- 29 2.57/8 赤褐色粘質土 (やしまりあり)
- 30 2.57/6 赤褐色粘質土 (やしまり強い、木片多量含む)
- 31 10R6/6 赤褐色粘質土 (しまり強い)
- 32 2.57/8 淡黄色粘質土 (しまりなし)
- 33 10R6/5 褐色中粒砂 (しまり強い、木片多量含む)
- 34 2.57/1 灰白色粘土 (やしまり強い、木片少量含む)
- 35 10R6/1 明褐色粘土 (しまり強い)
- 36 10R6/1 明褐色粘土 (しまり強い)
- 37 10R6/1 明褐色粘土 (しまり強い)
- 38 2.57/1 灰白色粘土 (しまりなし、凍水する)
- 39 2.57/6/1 オリーブ灰色粘土 (しまり強い、木片少量含む)
- 40 7.55/7/1 明褐色粘土 (やしまりあり)
- 41 2.57/6 淡黄色粘土 (しまりなし)
- 42 10R6/4 褐色粘質土 (やしまり強い、木片多量含む)
- 43 10R6/6 褐色粘質土 (やしまり強い、木片若干含む)
- 44 10R6/6 褐色粘質土 (やしまり強い、炭化物多量含む)
- 45 10R6/2 黒褐色粘土 (しまり強い)
- 46 10R6/2 黒褐色粘土 (しまり強い)
- 47 10R6/2 黒褐色粘質土 (やしまりあり、木片多量含む)
- K 様土

第23図 大谷遺跡D地区土層断面図 (1:100)



第24図 大谷遺跡 SR31・37・38・43、SD40・45土層断面図 (1:40)



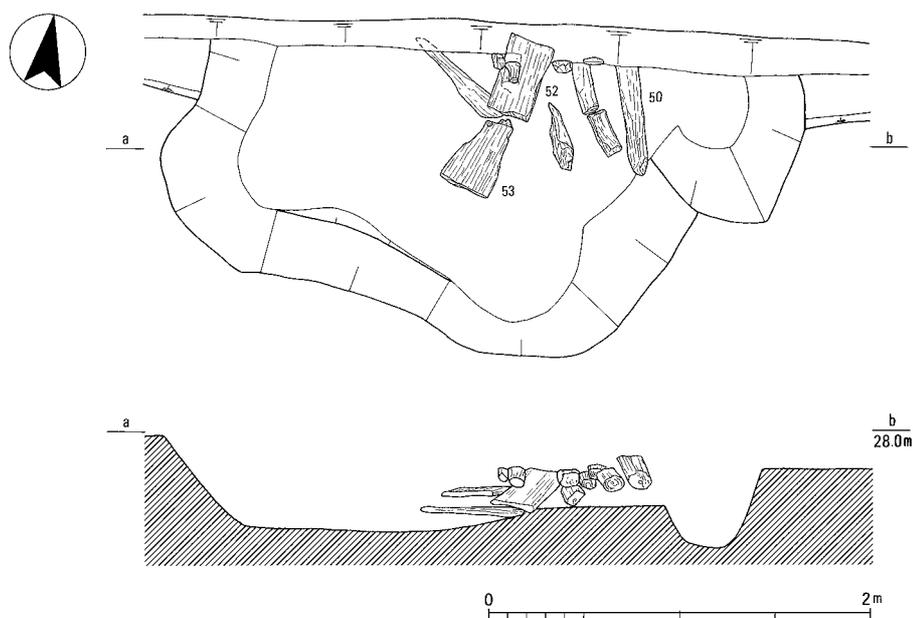
あったものと推定される。一定しないが、幅約3m、深さ約0.5mである。埋土は木片等が混入する灰色シルトと淡黄色砂粒の互層である。遺物は中期末～後期初頭と推定される縄文土器（44）が1点出土したのみであり、また、流路全体の確認をしていないため遺構の時期は決しがたい。なお、出土遺物が僅少のため、流路全体の完掘は行わず、部分的な断ち割りを行って断面形状と深度を確認した（第24図）。従って、第22図の遺構平面図では、流路底部の下端を断ち割りによって確認した部分をもとに推定線（破線）で表現した。

**SR38** 調査区の西半部で南北方向に延びる自然流路である。直線的に延びるが、南部で東側に屈曲し調査区外へ延長する。地形から判断すると、北から南へ水流があったものと推定される。一定しないが、幅約3m、深さ約0.4mである。埋土は位置によって黄灰色砂の単層から複数の砂層と粘質土層が堆積する複雑な様相を呈する。遺物は縄文土器と思われる土器片が1点出土したのみであり、また、流路全体の確認をしていないため遺構の時期は決しがたい。

なお、出土遺物が僅少のため、流路全体の完掘は行わず、部分的な断ち割りを行って断面形状と深度を確認した（第24図）。従って、第22図の遺構平面図では、流路底部の下端を断ち割りによって確認した部分をもとに推定線（破線）で表現した。

**SR43** 調査区の西端部に位置する自然流路である。一定しないが、幅約1.8m、深さ約0.8mである。埋土はしまりの強い灰色系砂質土である。遺物は全く出土していない。当遺構は検出し掘削作業を行ったが、土層を検討した結果、遺構検出面と判断した6・7層下面よりも1～2層下層から切り込んだ流路であり、今回調査では調査対象外となる遺構であるため、第22図の平面図では破線で表現している。

**SD45** SR38の一部を切りながら並行して南北方向に延びる溝である。一定しないが、幅約1.3m、深さ約0.4mで、遺構の南端部は調査区内で途絶えている。埋土は褐色系砂質土の単層である。遺物は土師器台付甕（46）・高杯（47）の他、山茶碗などが出土している。遺構の状況から人工的なものとは考えにくい。



第26図 大谷遺跡 S K 46遺物出土状況図（1:40）

**SK46** 調査区の北壁際で検出した土坑である。調査区外に延長するため全体の形態・規模は不明であるが、径3m程の不整円形土坑と推定される。埋土は黒褐色粘質土の単層で、木片が多く混入している。遺構の底部から樹木の原材や加工途上の木製品が出土している。樹木の原材の中には端部に伐採痕（切断痕）が残存するもの（50・51）が認められた。また、加工途上の木製品には製材された板材（52）と、板材の側面が削られ、より製品に近い形まで加工が進んだ未製品（53）がある。その他の出土遺物として、土師器台付甕（49）が出土しているため、古墳時代の遺構と推定される。

**SD47** 調査区の中央部を南北方向に「く」字状に延びる溝である。一定しないが、幅約1.4m、深さ約0.8mである。埋土は位置によって多くの木片を含む褐色系粘質土の単層から灰色系の粘質土・シルト・砂層が堆積する。遺物は木製農具（48）1点が出土している。土器が出土していないため遺構の時期は決しがたいが、古墳時代以前と推定される。遺構の状況から人工的なものとは考えにくい。

遺構 番号	調査 回数	調査区	小地区	性 格	時 期	規模 (m)			備 考
						長さ	幅	深さ	
SR1	1	A・B	C11・12、D9～11、E8～11、F8～10、G8～12、H9～12、I11・12、K8～12、L8～12、M8～11、N8・9、O8～10、P7～9、Q6～8、R6～8、S7～10、T8～10、U6～10、V6～10、W6～8、X5～9、Y5～9、AA5～9、AB6～10、AC6～12、AD8～12	自然流路	縄文以降	135.0	5	0.2～0.6	蛇行して調査区を東西に縦断。SR2・SR3に切られる。
SR2	1	B	Q6、R6～8、S8～11、T10～13	自然流路	古墳	30.0	1.5	0.22	調査区を南北に横断。SR1を切る。
SR3	1	B	V11・12、W8・10～13、X8～11	自然流路	縄文～奈良	23.0	1.5	0.39	南北に蛇行して延びる。SR1を切る。
SZ21	1	C	AM29・30	性格不明	室町	3.5	1.0	0.1	不定形（三日月状）の落ち込み。
SR22	1	C	AK26～31、AL26～30、AJ31・32	自然流路	縄文以降	22.0	3.5	0.3	
SR23	1	C	AE30～32、AF29～32、AG30・31、AH30・31、AI28～31	自然流路	弥生以降	50.0	3.0	0.5	調査区中央部を大きく曲流。SR24を切る。
SR24	1	C	AE32・33、AF32～34、AG33・34	自然流路	不明	7.1	2.2	0.1	SR23に切られる。
SR31	2	D	AG20～24、AH20・22～24	自然流路	縄文以降	18.0	3.0	0.5	緩やかに蛇行して調査区東端部を南北に延びる。
SZ32	2	D	AH20	性格不明	不明	1.5	1.3	0.3	
SZ33	2	D	AH21	性格不明	不明	0.7	3.2	0.2	
SZ34	2	D	AH22、AI22	性格不明	不明	2.2	2.5	0.3	
SD35	2	D	AI22、AJ22	溝	不明	8.0	0.6	0.3	
SZ36	2	D	AI22・23、AJ22・23	性格不明	不明	4.5	5.0	0.8	埋土に木質を多く含む。
SR37	2	D	R21、S21～23	自然流路	不明	8.0	1.5	0.6	調査区北西端を弧状に流れ、調査区外へ延びる。
SR38	2	D	W21～27、X26～28、Y27、AA26・27、AB27	自然流路	縄文以降	39.0	3.0	0.4	蛇行して調査区を南北に横断。SK39・SD45・SD47・SD51・SK52・SK58に切られる。
SK39	2	D	W26	土坑	不明	1.0	1.2	0.4	SR38を切る。
SD40	2	D	T21～24、U23～26	溝	不明	21.0	0.5	0.3	
SD41	2	D	V27、W28	溝	不明	7.5	0.4	0.2	

第5表 大谷遺跡遺構一覧表①

遺構 番号	調査 回数	調査区	小地区	性 格	時 期	規模 (m)			備 考
						長さ	幅	深さ	
SK42	2	D	T21	土坑	不明	径2.0	—	0.2	
SR43	2	D	S24、T24・25、U25、V25、 W25	自然流路	不明	15.0	1.8	0.8	調査対象外の流路。
SZ44	2	D	AE20・21	性格不明	不明	2.8	6.5	0.2	
SD45	2	D	W22～24、X21・22・25・26	溝	弥生末～ 古墳初頭 以降	28.0	1.3	0.4	調査区北に延びる。SR38・SK46を切る。
SK46	2	D	X21	土坑	古墳	残存 1.0	3.0	1.2	下層に木製品や原木多く出土。SD45に切られる。
SD47	2	D	Y24～26、AA22～24・26～28	溝	古墳 以前	32.0	1.4	0.8	AA27グリッドで木製曲柄平鋸出土。SR38・SD51・SD56を切る。SK59に切られる。
SK48	2	D	AC22	土坑	不明	2.5	4.0	0.3	SK49を切る。
SK49	2	D	AB22	土坑	不明	1.0	1.2	0.4	SK48に切られる。
SK50	2	D	AB25	土坑	不明	1.0	2.7	0.7	SD51を切る。
SD51	2	D	AB25～27	溝	不明	14.0	0.3	0.3	SR38を切る。SD47・SK50・SK52・SK57に切られる。
SK52	2	D	AA27	土坑	不明	0.9	1.3	0.4	SD51を切る。
SD53	2	D	AA25・26	溝	不明	7.5	0.3	0.3	SR38を切る。SD47・SK54に切られる。
SK54	2	D	AA26	土坑	不明	1.3	1.7	0.6	SD53を切る。
SK55	2	D	AA24・25	土坑	不明	1.2	2.8	0.4	SD56を切る。
SD56	2	D	AA24	溝	不明	1.5	0.4	0.3	SK55に切られる。
SK57	2	D	Y28	土坑	不明	1.8	2.3	0.6	SD51を切る。
SK58	2	D	X21	土坑	弥生	0.5	1.4	0.4	
SK59	2	D	AA21・22、AB21・22	土坑	不明	4.5	5.0	1.4	SD47を切る。
SK60	2	D	Y21	土坑	不明	2.0	3.0	0.3	SD61に切られる。
SD61	2	D	Y22	溝	不明	3.0	0.5	0.3	SK60を切る。

※遺構番号4～20・25～30は欠番

第6表 大谷遺跡遺構一覧表②

## 2 遺物

### (1) 出土遺物の概要

今回の調査では、第1次調査(A・B・C地区)で整理箱7箱(重量5.9kg)、第2次調査(D地区)で整理箱11箱(重量22.9kg)分の遺物がそれぞれ出土した。また、範囲確認調査でも整理箱3箱(重量5.17kg)分の遺物が出土しており、総数量は整理箱21箱(重量33.97kg)である。調査面積に比して出土量は多くはないが、縄文時代～近世に至る幅広い時期の石器・石製品・木製品・金属製品・土器・陶磁器等が出土している。以下に出土遺物の概要を調査区別に記述するが、各遺物の詳細については遺物観察表を参照されたい。なお、D地区の出土遺物の内、包含層出土遺物の小地区名に「No.0+〇〇～〇〇」と表記したものは、4m方眼の小地区を調査区内に設置する前の機械掘削時に取り上げたもので、調査区の東壁を概ねの基準線(0m)とし、そこから西へ何メートルの位置(範囲)で出土したかを示したものである。

### (2) A・B地区の出土遺物

#### ①SR1 出土遺物

1は南伊勢系の土師器皿で、口径7cm、器高1cm余りの扁平な手捏ねの小皿である。伊藤裕偉氏による分類のA系統に相当する<sup>①</sup>。15世紀後半頃の所産か。

2は縄文土器深鉢の底部である。底径5cm余りで灰黄褐色の色調を呈する。

#### ②SR2 出土遺物

3は土師器壺である。外反しながら開く口縁部の外面には粗いハケメ調整が認められる。古墳時代初頭頃の遺物と推定される。

4は土師器高杯である。脚部は直線的に開き、裾部は内面が接地するほど急角度で屈折する。山田猛氏の分類・編年によるD4類に相当し、山城V式期に所属する遺物と推定される<sup>②</sup>。

5・6は樹木の原材である。一方の端部には伐採時のものとみられる切断痕が認められる。これらの樹種は同定の結果、5がハンノキ属ハンノキ亜属、6がトネリコ属シオジ節とそれぞれ同定されている<sup>③</sup>。

#### ③SR3 出土遺物

7は土師器甕である。口縁部は「く」字状に屈折

し、端部外面に面を持つ。外面には粗いハケメ調整が施される。奈良時代の所産か。

8は縄文土器深鉢の底部である。底部はやや上げ底となる。

9は弥生土器壺と推定した。底径4.9cmでやや上げ底となる。判然としないが外面にヘラミガキの痕跡が認められる。

#### ④包含層他出土遺物

10・11・12は縄文土器深鉢である。10はC字の爪形文が横位に連続的に施文され、その直下に粗い縄文が施文される。器壁はやや薄い。前期末～中期初頭の所産と考えられる。11は外面に縦方向の条線が施される。中期～後期の所産であろう。12は垂直方向に底部が立ち上がり、外方に屈曲して体部に接続される。

13は弥生土器甕と推定した。底径4.7cmでやや上げ底となる。調整は内外面ともにナデ調整である。

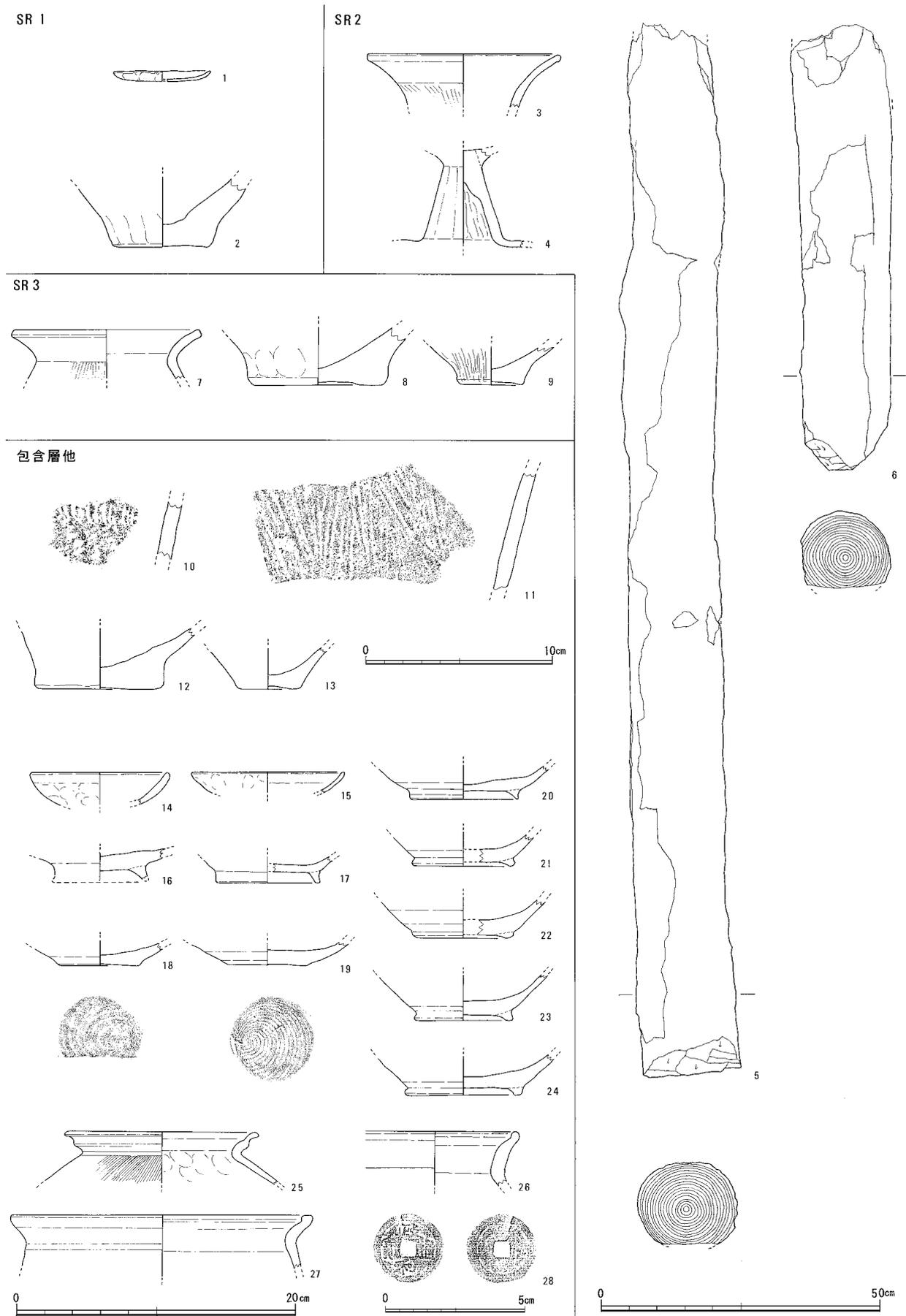
14・15は土師器皿である。14は口径10cmで口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部にヨコナデが施される。斎宮編年の第Ⅲ期第2段階に相当し、11世紀前半代に位置付けられる<sup>④</sup>。15は南伊勢系の土師器皿である。口径11cmで、底部は残存しないが、扁平な器形で器壁は薄い。伊藤分類のD系統に相当する。16世紀代の所産か<sup>⑤</sup>。

16～19はロクロ土師器椀である。16・17は貼付高台が付加されたもの、18・19は粘土塊から切り離されたままで明瞭な糸切り痕が残存するものである。斎宮編年の第Ⅲ期第1～2段階に相当し、10世紀後半～11世紀前半の所産と考えられる<sup>⑥</sup>。

20～24は山茶椀である。20は高台の断面が逆三角形で、端部が尖る。藤澤良祐氏の山茶椀編年(以下、藤澤編年と略表記)の尾張型第3型式に相当し、11世紀末から12世紀初頭に位置付けられる。21～24は底部の器壁がやや厚く、比較的低い高台が付加される。渥美型第5型式に相当し、12世紀末から13世紀初頭に位置付けられる<sup>⑦</sup>。

25は土師器S字状口縁台付甕である。口縁部は緩いS字状を呈する。C類に相当し、山城Ⅱ式期に所属する遺物と考えられる<sup>⑧</sup>。

26・27は土師器甕である。26の口縁端部内面は強いヨコナデを受け、窪みを持つ。27は口縁端部のヨ



第27図 大谷遺跡A・B地区出土遺物実測図 (10・28=1:2、2・8・11・12=1:3、5・6=1:10、その他=1:4)

コナデにより内面が水平な面を持つ。ともに平安時代の後半期の所産と考えられる。

28は宋の徽宗の政和元年（1111年）初鑄の「政和通寶」である。

### (3) C地区の出土遺物

#### ① S Z 21出土遺物

29は口径10cmの南伊勢系の土師器皿である。伊藤分類のB系統に相当する。15世紀前半代の所産と考えられる<sup>⑨</sup>。

#### ② S R 23出土遺物

30は土師器台付甕か。台部径5.6cmで、台部は外方に大きく開き、外面に比較的密なハケメ調整が認められる。

#### ③ 包含層他出土遺物

31は縄文土器深鉢である。無文のため時期は不明である。

32は弥生土器甕である。口径約20cm、口縁部は外反し、口縁端部にヘラ状工具によるキザミが施文される。内外面ともにハケメ調整が施される。

33は土師器高杯である。脚部は直線的に開き、透孔は無い。古墳時代の所産と考えられる。

34は貼付高台が付加されたロクロ土師器椀である。斎宮編年の第Ⅲ期第1～2段階に相当し、10世紀後半～11世紀前半の所産と考えられる<sup>⑩</sup>。

35は低く粗雑な高台が付加された山茶椀である。藤澤編年の渥美型6型式に相当し、13世紀前半代の所産と考えられる<sup>⑪</sup>。

36・37は美濃産の施釉陶器丸椀で、17世紀中葉の所産である<sup>⑫</sup>。

38・39は土師器甕である。38は口縁端部が折り返され、内面のヨコナデにより、やや窪む。内外面にはハケメ調整が施される。平安時代の所産か。39は口縁端部が折り返され、丸く収められる。器壁は厚く、内外面ともにハケメ調整はなされない。12世紀前半代の所産と考えられる。

40は煙管の雁首である。頸部は湾曲し、胴部が膨らんで肩部を作り出している。近世の所産であろう。

41は不明木製品である。真っ直ぐな柄と扁平でやや幅広な身という形態の特徴から、武器形もしくは杓子形木器の可能性はある。

42・43は不明木製品である。ともに板状で42には穿孔が認められる。

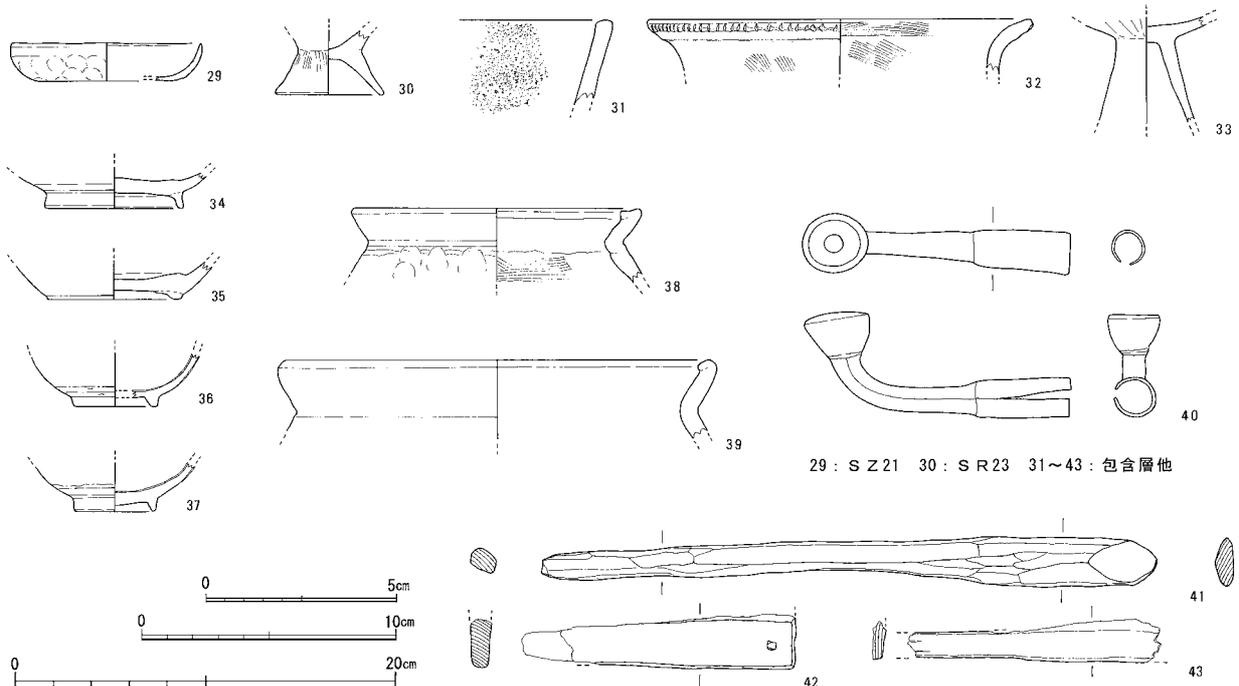
### (4) D地区の出土遺物

#### ① S R 31出土遺物

44は縄文土器深鉢である。縦方向に2条の沈線が施文される。中期末～後期初頭の所産であろう。

#### ② S K 58出土遺物

45は弥生土器壺である。底部は上げ底で立ち上が



第28図 大谷遺跡C地区出土遺物実測図 (31=1:3、40=1:2、その他=1:4)

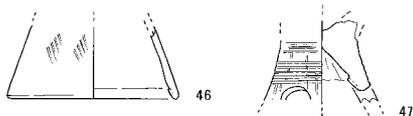
SR 31



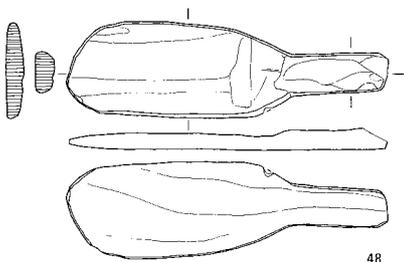
SK 58



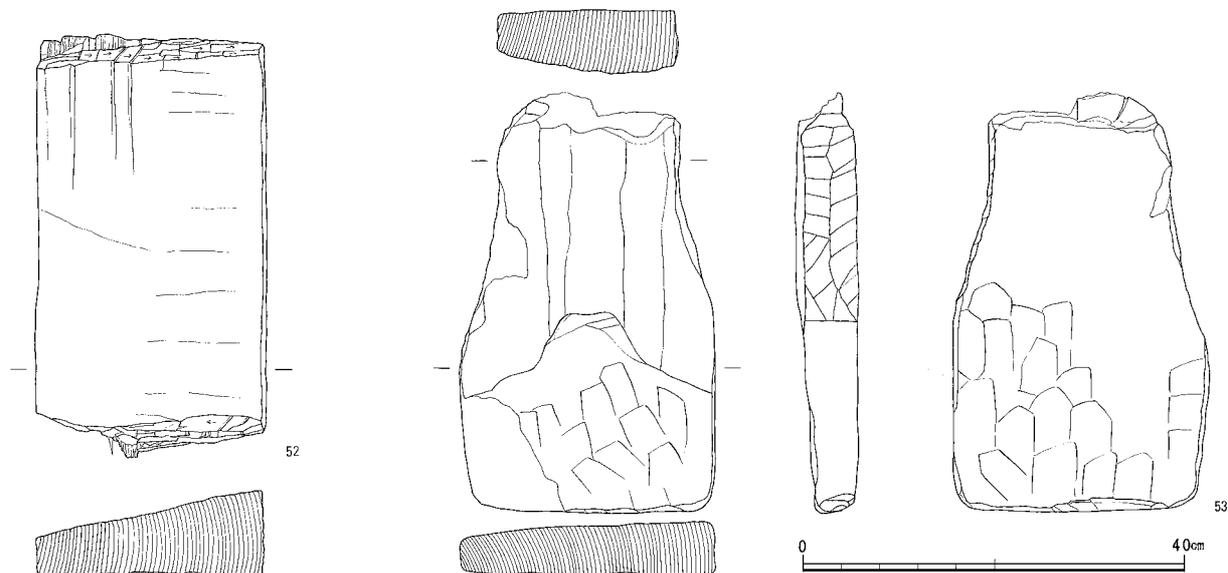
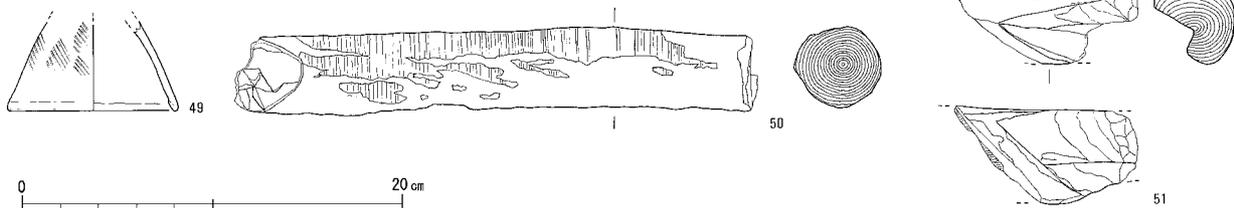
SD 45



SD 47



SK 46



りはなく、丸く体部へ接続する。器面の調整は外面がヘラミガキ、内面はハケメ調整である。中期の所産か。

### ③ S D45出土遺物

46は土師器台付甕である。器壁は薄く、脚台端部内面には僅かに折り返しが認められる。外面にはハケメが残る。弥生時代末～古墳時代初頭の遺物であろうか。

47は土師器高杯である。脚部に透孔が3孔で、外面に櫛描横線文が施文される。弥生時代末期～古墳時代初頭の遺物と考えられる。

### ③ S D47出土遺物

48は木製の棒軸形曲柄平楯の楯身である。樹種同定の結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節と同定されている。

### ④ S K46出土遺物

49は土師器台付甕である。器壁は薄く、脚台端部内面には僅かに折り返しが認められる。外面にはハケメが残る。古墳時代初頭の遺物と考えられる。

50・51は樹木の原材である。ともに伐採時のもの

第29図 大谷遺跡D地区SR31、SK58、SD45、SD47、SK46出土遺物実測図 (44=1:3、

45~47・49=1:4、48・50~53=1:8)

とみられる切断痕が認められる。樹種は同定の結果、50はハンノキ属ハンノキ亜属、51はコナラ属アカガシ亜属とそれぞれ同定されている。

52は板材である。平滑に製材され、長軸方向の両端部には細かい加工痕が残される。原材から製品までの加工過程で製材された中間段階のものであろう。樹種は同定の結果、コナラ属アカガシ亜属と同定されている。

53は直柄平鍬の未製品と考えられる。52のような板材からさらに加工工程が進んだ段階のものと考えられ、両側面上半部に細かい加工がなされている。樹種は同定の結果、コナラ属アカガシ亜属と同定されている。

### ⑤包含層他出土遺物

54～75は縄文土器である。54・55はキャリパー形を呈する口縁部片で、ともに横位に長楕円形の窓枠状沈線が連続して施文される。また、窓枠状沈線の結節部分には上部に半円、下部には同心円状の沈線が施文される。56は54・55と同様の文様構成をもったものであろう。57は波状口縁の端部付近に水平方向の沈線が施文される。58は端部を欠損しているが、54・55と同様のキャリパー形の口縁部で、施文のモチーフも同様と推定される。59～61は口縁端部から曲線的な沈線が施文されたもの、62～64は口縁端部下に水平方向に沈線が施文されたものである。65は無文土器である。66は端部が欠損しているが、58のようなキャリパー形口縁部の一部の可能性もある。67～70は縦位に沈線が施文される体部片である。67は逆U字状の沈線に条線が付加されたものである。71は沈線が認められるが文様構成は不明である。72は縄文施文、73は判然としないが、半截竹管による不規則な施文と思われる。74は口径13cm程の小型の鉢である。特に施文はなされない。75は底径8cm程の底部片である。

76～78は土師器椀・杯である。76は口縁部が大きく外傾して開き、端部は尖る。判然としないが、斎宮編年という椀Aに相当し、第Ⅱ期第1～2段階に位置付けられ、8世紀末～9世紀前半の所産と考えられる<sup>13</sup>。77は口縁部が内弯して開き、端部が丸く収められる。斎宮編年という杯Gに相当し、第Ⅰ期第1～2段階に位置付けられ、8世紀前葉の所産と考

えられる<sup>14</sup>。なお底部外面には「十」もしくは「×」の線刻が施されている。78は口縁部が内弯気味に外方へ開く。斎宮編年第Ⅲ期第3段階に相当し、11世紀後半に位置付けられる<sup>15</sup>。

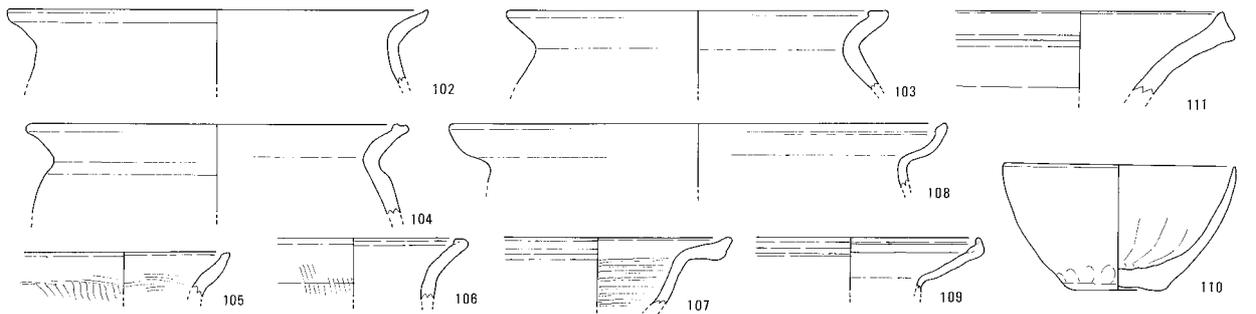
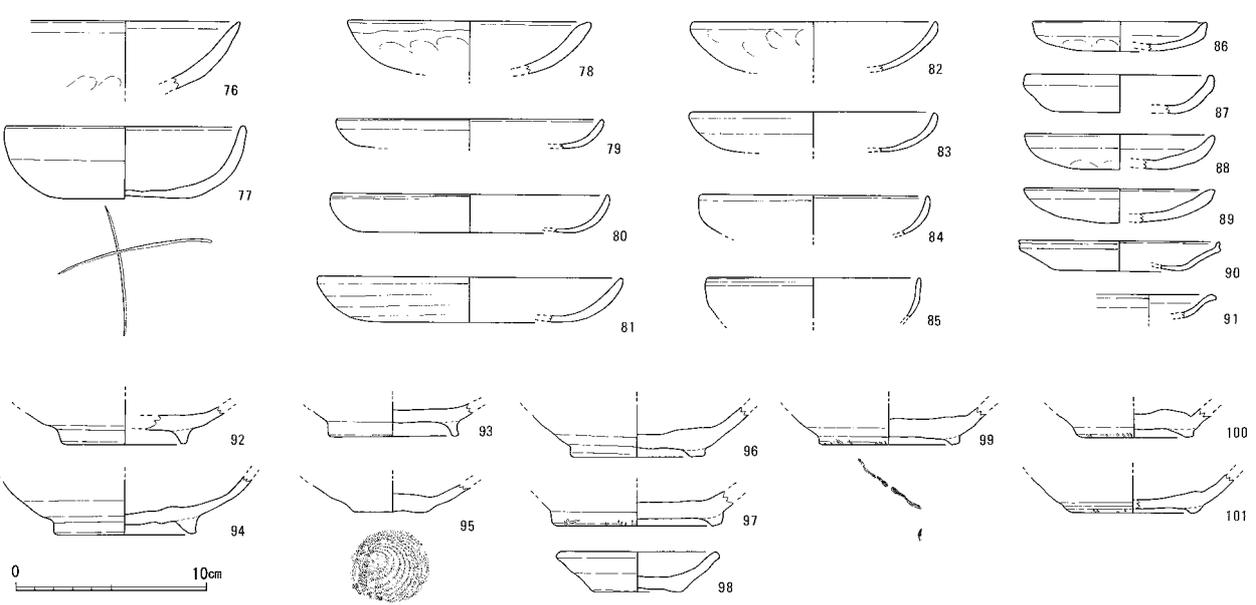
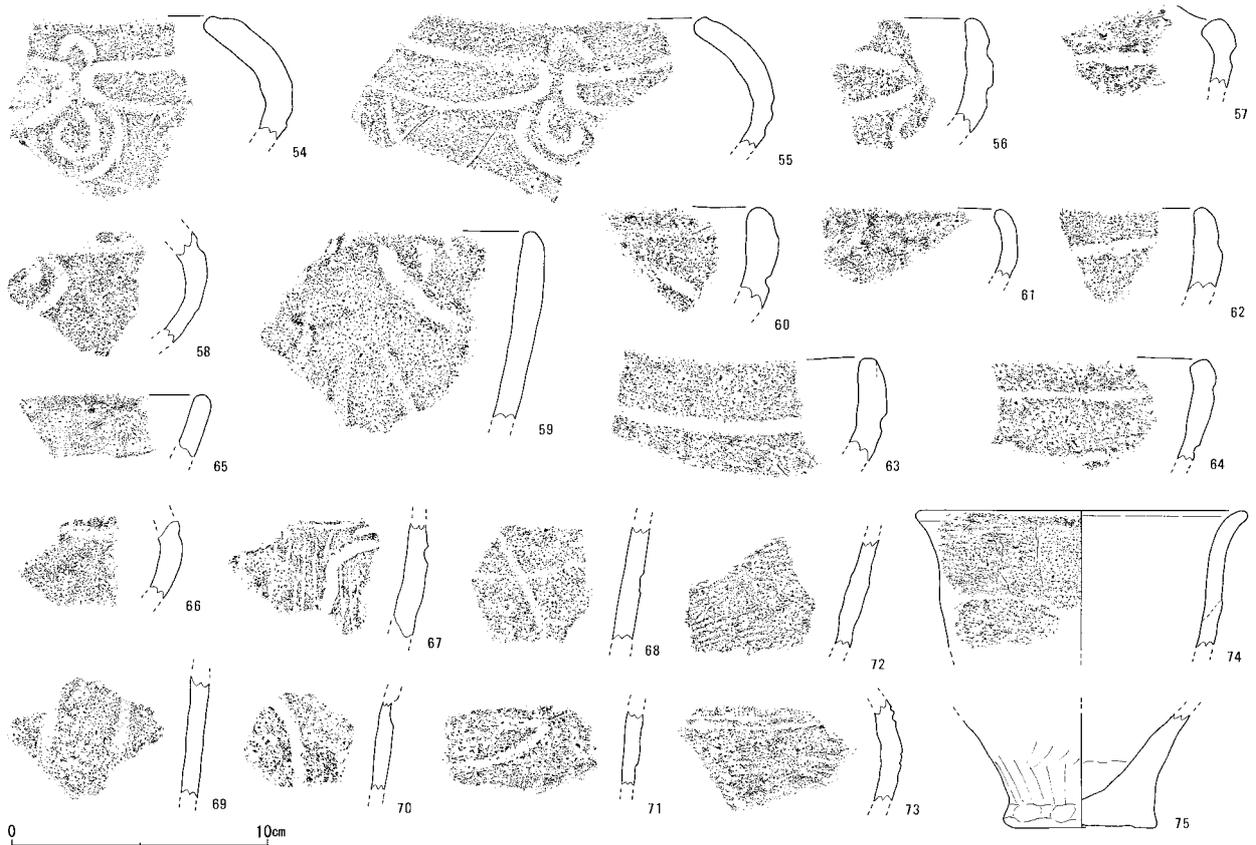
79～91は土師器皿である。79～81の底部は丸みを帯びて浅く、口縁部は外方へ大きく開く。斎宮編年という皿A bタイプに相当し、法量から第Ⅱ期第2段階と考えられる。9世紀前半代に位置付けられよう<sup>16</sup>。82～85は口径11～13cmの口縁部が内弯気味に立ち上がる器壁の薄い皿である。いずれも南伊勢系B系統の皿で、13世紀後半～15世紀初頭頃の所産と考えられる<sup>17</sup>。86～89は口径9～10cm、器高1.5～2cmの器壁がやや厚い小皿である。いずれも口縁端部のみがヨコナデされ、86・89は外面に面を持つ。斎宮編年の第Ⅲ期第2段階に相当し、11世紀前半代に位置付けられる<sup>18</sup>。90・91は南伊勢系のD系統に相当する皿である。90は口縁端部がつまみ上げられる。15世紀後半～16世紀代の所産と考えられる<sup>19</sup>。

92～94はロクロ土師器椀、95は同皿である。斎宮編年の第Ⅲ期第1～2段階に相当し、10世紀後半～11世紀前半の所産と考えられる<sup>20</sup>。

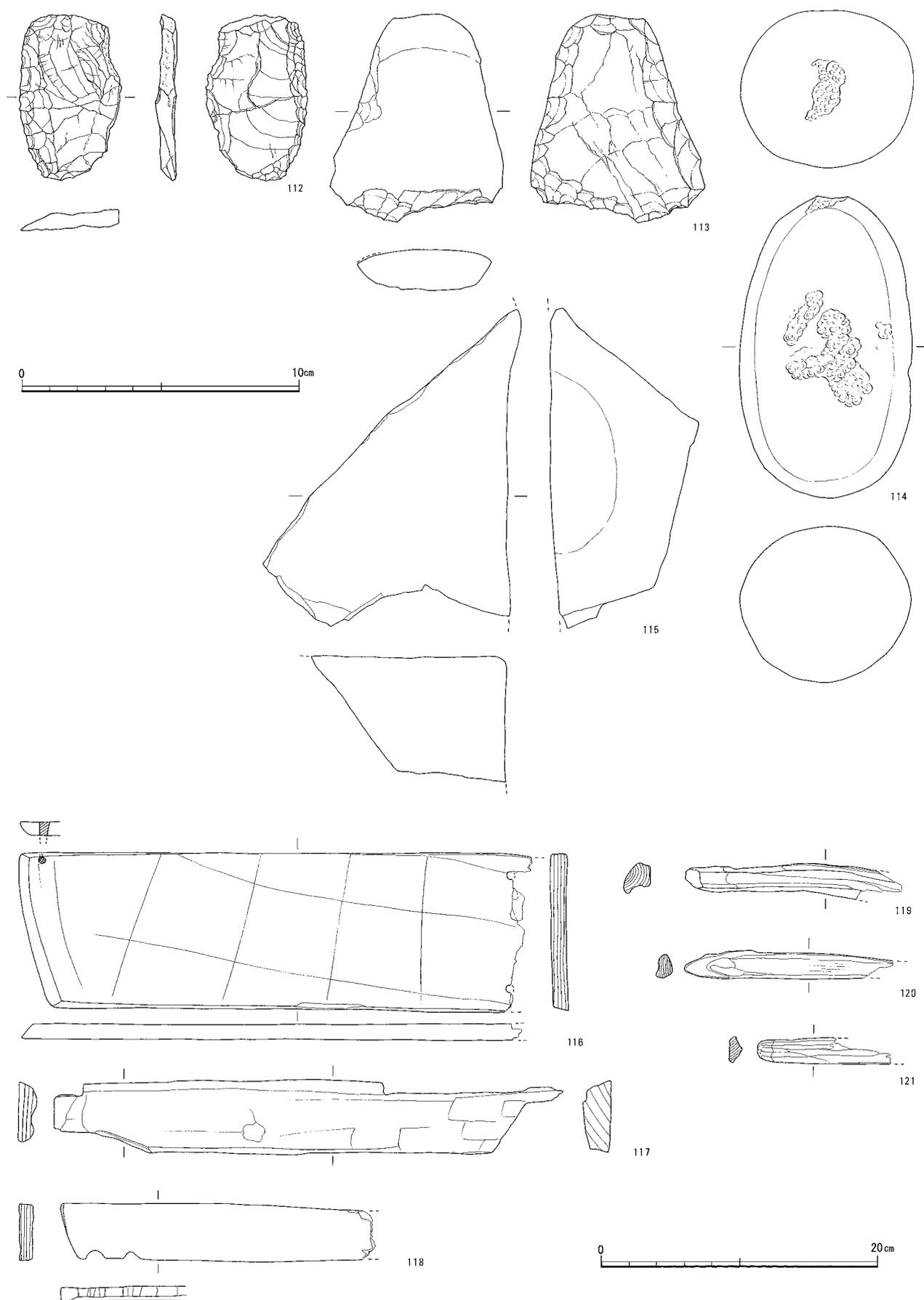
96～101は山茶椀・山皿である。96～98はいずれも渥美第5型式に相当し、12世紀末から13世紀初頭に位置付けられる。99・100は渥美、101は尾張の6～7型式に相当し、13世紀に位置付けられる<sup>21</sup>。なお、99の底部外面には判読不能ながら墨書が認められる。

102～106は土師器甕である。102は口縁端部外面に面を持つ。103は口縁端部内面に水平な面を持つ。104は口縁端部内面にヨコナデを受け、弱い窪みが生じている。105は内外面、106は外面にハケメ調整がなされ、106の口縁端部は小さく折り返される。これらは概ね奈良～平安期の所産であろう。

107～109は土師器鍋である。107は口縁端部が肥厚し、外面に面を持つ。扁平な器形を呈した鍋と考えられる。108は器壁が薄く、口縁部が受け口状となる。伊藤裕偉氏による編年（以下、伊藤編年と略表記）の第2段階に相当し、13世紀後葉～14世紀前葉の遺物と考えられる<sup>22</sup>。109は口縁端部が小さく折り返され、断面形が三角形を呈する。伊藤編年の第4段階に相当し、15世紀後半～16世紀代に位置付けられる<sup>23</sup>。



第30図 大谷遺跡D地区包含層他出土遺物実測図① (54~75=1:3、76~111=1:4)



第31図 大谷遺跡D地区包含層他出土遺物実測図② (112~115=1:2、116~121=1:4)

110は土師器鉢である。口径12.2cm、器高6.6cm、底径5.0cmと小型で、口縁部が内弯気味に立ち上がり、端部は尖る。橙色系の色調を呈し、器面の調整はナデとオサエのみで仕上げられる。斎宮編年第Ⅱ期第2段階に位置付けられる鉢と類似するため、9世紀前半頃の所産の可能性<sup>24</sup>がある。

111は陶器練鉢である。口縁端部の縁帯は上下方ともに僅かに延びるのみで、縁帯幅は短い。16世紀末頃の所産か。

112はチャート製の削器である。

113は撥形の粗製打製石斧である。図裏面の剥離面は周縁部が2次調整されるが、表面は礫表のままである。石材は砂岩である。

114は敲石である。表面と先端部に敲打痕が明瞭に残される。石材は凝灰岩である。

115は砥石である。破損品のため全体の形態は不明であるが、図表面は全面が使用面、側面は上半部が使用面となっている。石材は細粒砂岩である。

116～118は不明木製品である。116は厚さ1.2cmの板状で、残存する端部は弧状に加工され、穿孔が認められる。また、欠損部にも2箇所の穿孔が認められる。判然としないが、曲げ物の底板の可能性<sup>25</sup>がある。樹種同定の結果、スギと同定されている。118は厚さ1.1cmの板状で残存する端部に2箇所の挟りが認められる。樹種同定の結果、ヒノキと同定されている。

119～121は先端が炭化した木製遺物で、いわゆる「燃えさし」と考えられる。樹種同定の結果、119はマツ属複雑管束亜属、120はヒノキ、121はヒノキ属近似種とそれぞれ同定されている。

### (5) 範囲確認調査の出土遺物

122は縄文土器深鉢である。底径9cmで、底部の立ち上がりはあまり見られず、緩い角度で体部へ接続される。

123は弥生土器甕と考えられる。体部の内外面に同一原体と思われるハケメ調整が施される。

124は土師器皿である。口径13.6cmで、口縁端部にヨコナデを受け、端部外面に面を持つ。斎宮編年の第Ⅲ期第3段階に相当し、11世紀後半に位置付けられる<sup>26</sup>。

125・126はロクロ土師器皿である。125は平らな

底部にやや内弯気味に立ち上がる短い口縁部が付く。底部外面には糸切り痕が明瞭に残存する。斎宮編年の第Ⅲ期第2～3段階に相当し、11世紀代に位置付けられる<sup>26</sup>。126は底部が僅かに立ち上がり、内弯気味に立ち上がると推定される口縁部が付く。底部外面には糸切り痕が明瞭に残存する。斎宮編年の第Ⅲ期第1～2段階に相当し、10世紀後半～11世紀前半に位置付けられる<sup>27</sup>。

127・128は灰釉陶器碗である。ともに高い高台が体部下端に付され、128の高台は細く長い。いずれもH72窯式に相当し、10世紀後半代の所産と考えられる<sup>28</sup>。

129は同安窯系の白磁小皿である。平底であるが、外底が僅かに抉られる。所属時期は判然としないが、11世紀後半～12世紀前半頃の所産と考えられる<sup>29</sup>。

130～132は山茶碗である。いずれも低い高台が付されるが、131の高台は痕跡程度である。これらは渥美型第5～6型式の範疇に収まるもので、12世紀末から13世紀前半に位置付けられる<sup>30</sup>。

133は土師器甕である。「く」字状口縁部の端部が折り返される。残存部分での内外面のハケメ調整は認められない。12世紀前半代の所産と考えられる。

134は土師器鍋である。推定口径33cmの大型の鍋で、伊藤編年の第4段階d型式に相当し、15世紀後半から16世紀代の所産と考えられる<sup>31</sup>。

135は唐の武徳4年(621年)初鑄の「開元通寶」である。

### 【註】

①『多気遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1993年)

『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』(三重県埋蔵文化財センター 1996年)

以下、南伊勢系土師器皿の分類・編年は上記の文献に拠る。

②『山城遺跡・北瀬古遺跡』(三重県埋蔵文化財センター 1994年)

以下、古墳時代の土師器の分類・編年については上記の文献に拠る。

③後掲の「3 自然科学分析」に拠る。以下、木製遺物の樹種同定は上記に拠る。

④『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』

(斎宮歴史博物館 2001年)

以下、古代の土師器の編年については上記の文献に拠る。

⑤前掲註①

⑥前掲註④

⑦藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」(『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年)

以下、山茶碗の編年については、上記の文献に拠るが、藤澤氏に実見の上ご教示もいただいている。

⑧前掲註②

⑨前掲註①

⑩前掲註④

⑪前掲註⑦

⑫藤澤良祐氏のご教示に拠る。

⑬前掲註④

⑭前掲註④

⑮前掲註④

⑯前掲註④

⑰前掲註①

⑱前掲註④

⑲前掲註①

⑳前掲註④

㉑前掲註⑦

㉒伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」

(『Mie history』vol. 1 1990年)

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」

(『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年)

以下、土師器鍋の編年は上記の文献に拠る。

㉓前掲註㉒

㉔前掲註④

㉕前掲註④

㉖前掲註④

㉗前掲註④

㉘山本峰司「4.灰釉陶器・山茶碗」(『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社 1995年)

㉙中世前期の貿易陶磁器の時期判断は下記の文献に拠った。

山本信夫「IV 考察 1.中世前期の貿易陶磁器～その分析視点～」(『県営圃場整備国東川南地区関係発掘調査報告書 原遺跡七郎丸1地区・口寺田遺跡』国東町教育委員会 1999年)

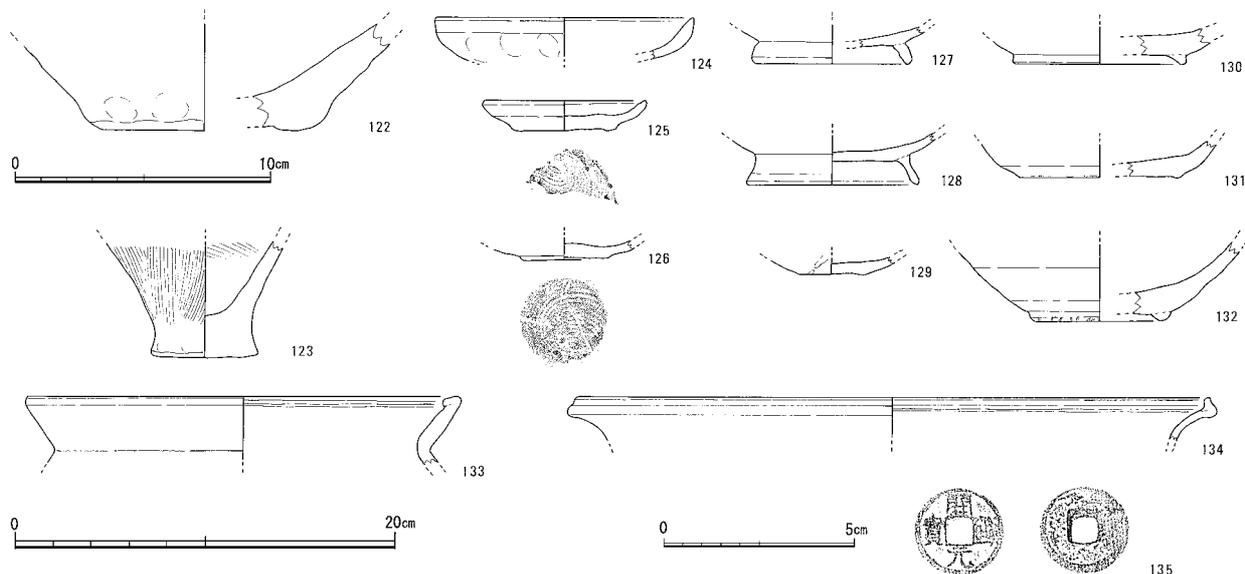
㉚前掲註⑦

㉛前掲註㉒

【参考文献】

・『木器集成図録 近畿原始篇』(奈良国立文化財研究所 1993年)

・『木器集成図録 近畿古代篇』(奈良国立文化財研究所 1985年)



第32図 大谷遺跡範囲確認調査出土物実測図 (122=1:3、123~134=1:4、135=1:2)

遺物 番号	登録 番号	器 種	調査 区	小地 区等	出土 遺構	出土 層位	法量 (c m)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
1	002-05	土師器 皿	B	AB 10	SR 1	砂質 土	7.0	1.2	-	外面:オサエナデ 内面:ナデ	密 (微砂粒 含む)	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 3/12	
2	002-04	縄文土器 深鉢	B	AB 10	SR 1	砂質 土	-	-	底径 5.4	外面:オサエナデ 内面:ナデ	密 (2.5mm以 下の砂粒多 く含む)	並	灰黄褐 10YR5/2	底部 12/12	
3	002-06	土師器 壺	B	S9	SR 2	灰白 色中 粒砂	13.8	-	-	外面:ヨコナデ・ハクメ (4本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (2.5mm以 下の砂粒多 く含む)	並	暗灰黄 2.5Y5/2	口縁部 3/12	
4	002-07	土師器 高杯	B	S9	SR 2	灰白 色中 粒砂	-	-	基部径 2.8	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ・シボ リ目痕	密 (4mm以下 の砂粒含 む)	並	灰黄 2.5Y6/2	基部 12/12	
5	011-01	樹木 原材	B	S11	SR 2	-	残存長 190.0	残存幅 18.0	-	-	-	-	-	-	樹皮残存
6	011-02	樹木 原材	B	S11	SR 2	-	残存長 80.0	残存幅 16.0	-	-	-	-	-	-	樹皮残存
7	003-01	土師器 壺	B	W11	SR 3	褐灰 色粘 質土	13.6	-	-	外面:ヨコナデ・ハクメ (5~6本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (3mm以下 の砂粒含 む)	並	灰黄褐 10YR5/2	口縁部 2/12	外面煤付着
8	003-02	縄文土器 深鉢	B	X9	SR 3	褐灰 色粘 質土	-	-	底径 7.5	外面:オサエナデ 内面:ナデ	密 (4mm以下 の砂粒多 く含む)	並	灰黄 2.5Y6/2	底部 5/12	外面煤付着?
9	006-02	弥生土器 壺	B	W11	SR 3	褐灰 色粘 質土	-	-	底径 4.9	外面:ナデ・ミガキ? 内面:ナデ?	粗 (2mm以下 の砂粒多 く含む)	並	灰黄褐 10YR5/2	底部 12/12	
10	002-02	縄文土器 深鉢	A	-	-	表土	-	-	-	外面:瓜形刺突・縄文 内面:ナデ	密 (1.5mm以 下の砂粒含 む)	並	外:褐灰 10YR4/1 内:にぶい黄褐 10YR4/3	小片	
11	002-03	縄文土器 深鉢	B	U11	-	包含 層	-	-	-	外面:条線 内面:ナデ	密 (3mm以下 の砂粒多 く含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2 黄灰 2.5Y4/1	小片	
12	008-06	縄文土器 深鉢	B	調査 坑19	-	-	-	-	底径 6.9	外面:ナデ 内面:ナデ	密 (1.5mm以 下の砂粒多 く含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	底部 12/12	
13	004-01	弥生土器 壺	B	AB 10	-	包含 層	-	-	底径 4.7	外面:ナデ 内面:ナデ	密 (4mm以下 の砂粒含 む)	並	灰白 2.5Y8/2	底部 6/12	摩滅のため調整 不明瞭
14	003-03	土師器 皿	B	AA 11	-	包含 層	10.0	-	-	外面:ヨコナデ・オサエ 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下 の砂粒含 む)	並	褐灰 10YR4/1	口縁部 1/12	
15	010-03	土師器 皿	B	調査 坑19	-	-	11.0	-	-	外面:オサエナデ 内面:ナデ	密	並	灰黄 2.5Y7/2 灰黄褐 10YR5/2	口縁部 2/12	
16	004-05	ロクロ 土師器 椀	B	Q7 ~14	-	包含 層	-	-	底径 6.6	外面:ロクロナデ・オサエ・ 高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (微砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 12/12	
17	008-03	ロクロ 土師器 椀	B	調査 坑23	-	-	-	-	高台径 7.4	外面:ロクロナデ・高台貼付 後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (0.5mm以 下の砂粒含 む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	高台部 4/12	
18	004-06	ロクロ 土師器 椀	B	Q12	-	包含 層	-	-	底径 6.0	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密 (微砂粒 含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	底部 8/12	
19	004-04	ロクロ 土師器 椀	B	Y7	-	包含 層	-	-	底径 5.7	外面:ロクロナデ 内面:ロクロナデ	密 (1.5mm以 下の砂粒含 む)	並	灰 7.5Y6/1	底部 12/12	
20	004-02	山茶椀	B	P8	-	包含 層	-	-	高台径 7.8	外面:ロクロナデ・高台貼付 後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (1mm以下 の砂粒含 む)	良	灰白 N8/0	高台部 4/12	
21	004-03	山茶椀	B	M13	-	包含 層	-	-	高台径 7.4	外面:ロクロナデ・高台貼付 後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (1mm以下 の砂粒含 む)	良	灰白 N7/0	高台部 2/12	
22	002-01	山茶椀	A	C8 ~14	-	包含 層	-	-	高台径 7.2	外面:ロクロナデ・高台貼付 後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (2mm以下 の砂粒含 む)	良	灰白 N8/0	高台部 4/12	
23	007-01	山茶椀	A	調査 坑25	-	-	-	-	高台径 7.0	外面:ロクロナデ・ヘラ切 り?・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (2mm以下 の砂粒含 む)	良	灰白 N7/0	高台部 12/12	内面墨少量付着

第7表 大谷遺跡出土遺物観察表①

遺物番号	登録番号	器種	調査区	小地区等	出土遺構	出土層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	
							口径	器高	その他							
24	007-02	山茶椀	B	調査坑22	-	-	-	-	高台径 8.4	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 N7/0	高台部 9/12		
25	003-05	土師器 S字状口縁台付甕	B	T11	-	包含層	13.9	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (7本/1cm) 内面:オサエナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/12		
26	003-04	土師器 甕	B	M13	-	包含層	-	-	-	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	灰白 2.5Y7/1	口縁部 1/12		
27	003-06	土師器 甕	B	Q12	-	包含層	21.8	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ	密 (2mm以下の砂粒含む)	並	灰白 2.5Y8/1	口縁部 1/12		
28	010-05	銭貨	B	M13	-	包含層	-	-	-	-	-	-	-	完存	「政和通寶」	
29	006-05	土師器 皿	C	AK29	SZ21	-	10.0	2.0	-	外面:ヨコナデ・オサエナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	やや粗 (3mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12		
30	006-03	土師器 台付甕	C	AH30	SR23	-	-	-	台部径 5.6	外面:ハケメ (8本/1cm) 内面:ナデ	やや粗	並	外:にぶい橙 7.5Y7/3 内:灰褐 7.5YR6/2	台部 2/12		
31	005-06	縄文土器 深鉢	C	AK31	-	包含層	-	-	-	外面:ナデ 内面:ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	外:褐灰 5YR5/1 内:灰褐 5YR4/2	口縁部 小片		
32	006-01	弥生土器 甕	C	AM30	-	包含層	20.1	-	-	外面:ヨコナデ・キザミ・ハケメ (6本/1cm) 内面:ハケメ (9本/1cm)	やや粗 (1mm以下の砂粒含む)	並	外:黒 N1.5/0 (煤) 内:灰白 10YR8/2	口縁部 1/12	外面煤付着	
33	006-04	土師器 高杯	C	AJ32	-	包含層	-	-	基部径 3.0	外面:ハケメ? 内面:ナデ	やや密 (1mm以下の砂粒含む)	並	外:にぶい黄橙 10YR6/3 内:褐灰 10YR4/1	基部 12/12		
34	005-04	ロクロ土師器 椀	C	AM27~30	-	包含層	-	-	高台径 7.2	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密	並	外:灰白 2.5Y8/1 内:灰白 2.5Y7/1	高台部 6/12		
35	005-03	山茶椀	C	AM27~30	-	包含層	-	-	高台径 7.0	外面:ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面:ロクロナデ	密 (0.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 N8/0	高台部 2/12		
36	005-02	陶器丸椀	C	AM27~30	-	包含層	-	-	高台径 4.4	外面:ロクログズリ・削り出し高台・施釉 内面:ロクロナデ・施釉	やや密	良	素地:灰白 7.5Y7/1 釉:暗赤褐 5YR3/4	高台部 3/12		
37	005-01	陶器丸椀	C	AE35	-	包含層	-	-	高台径 4.2	外面:ロクログズリ・削り出し高台・施釉 内面:ロクロナデ・施釉	やや密	良	素地:灰白 5Y8/1 釉:褐 7.5YR4/3	高台部 11/12		
38	005-05	土師器 甕	C	AC36・37	-	包含層	15.2	-	-	外面:ヨコナデ・オサエナデ・ハケメ (6本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ	やや粗 (2mm以下の砂粒多く含む)	並	外:黒 N1.5/0 (煤) 内:にぶい黄橙 10YR5/3	口縁部 2/12	外面煤付着	
39	009-03	土師器 甕	C	調査坑56	-	-	21.0	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR5/4	口縁部 1/12	内面炭化物付着	
40	010-06	煙管雁首	C	-	-	表土	全長 7.0	-	-	-	-	-	-	完存		
41	001-03	不明木製品	C	調査坑54	-	-	残存長 32.1	残存幅 2.5	残存厚 1.4	-	-	-	-	-	-	
42	001-02	不明木製品	C	調査坑54	-	-	残存長 14.3	残存幅 2.8	残存厚 1.1	-	-	-	-	-	-	穿孔有り
43	001-01	不明木製品	C	調査坑54	-	-	残存長 13.3	残存幅 2.2	残存厚 0.65	-	-	-	-	-	-	
44	014-07	縄文土器 深鉢	D	-	SR31	褐色中砂	-	-	-	外面:沈線 内面:ナデ	粗 (3mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄褐 10YR5/3	小片		
45	014-03	弥生土器 壺	D	W21	SK58	黒褐灰色粘土	-	-	底径 4.1~4.2	外面:ナデ・ミガキ 内面:ハケメ (16本/1cm)	やや密	並	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 12/12		
46	014-05	土師器 台付甕	D	X20~21	SD45	包含層	-	-	台部径 9.0	外面:ナデ・ハケメ (5本/1cm) 内面:ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	台部 2/12		

第8表 大谷遺跡出土遺物観察表②

遺物 番号	登録 番号	器 種	調査 区	小地 区等	出土 遺構	出土 層位	法 量 (c m)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
47	014-06	土師器 高杯	D	X20	SD 4 5	-	-	-	基部径 4.0	外面：ナデ・ミガキ・櫛描・ 三方透孔 内面：ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	基部 10/12	
48	024-01	木製品 棒軸形 曲柄平鉢	D	AA 26	SD 4 7 上層	暗灰 粘質土	残存長 33.5	残存幅 10.3	残存厚 2.0	-	-	-	-	-	
49	014-04	土師器 台付壺	D	X21	SK 4 6	黒褐 色粘 質土	-	-	台部径 9.0	外面：ナデ・ハケメ (6本 /1cm) 内面：ナデ	やや密 (2mm 以下の砂粒 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	台部 4/12	底部煤付着?
50	026-01	樹木 原材	D	X21	SK 4 6	黒褐 色粘 質土	残存長 50.9	残存幅 9.0	-	-	-	-	-	-	
51	023-01	樹木 原材	D	X21	SK 4 6	黒褐 色粘 質土	残存長 19.3	残存幅 10.4	残存厚 9.8	-	-	-	-	-	
52	028-01	木製品 板材	D	X21	SK 4 6	-	残存長 45.0	残存幅 25.2	残存厚 9.1	-	-	-	-	-	
53	027-01	木製品 直柄平鉢 未製品	D	X21	SK 4 6	黒褐 色粘 質土	残存長 44.6	残存幅 26.6	残存厚 6.8	-	-	-	-	-	
54	016-02	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
55	016-01	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 小片	
56	016-04	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	外：灰 5Y4/1 内：浅黄橙 10YR8/3	口縁部 小片	
57	017-07	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (4mm以下 の砂粒多く 含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 小片	
58	016-05	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (2.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	外：灰黄 2.5Y6/2 内：にぶい黄橙 10YR6/3	小片	
59	017-04	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (2.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 小片	
60	017-01	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (2mm以下 の砂粒多く 含む)	並	黄灰 2.5Y5/1	口縁部 小片	
61	015-04	縄文土器 深鉢	D	AC 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3mm以下 の砂粒多く 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 小片	
62	016-03	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (2.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 小片	
63	016-06	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (2.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	外：灰黄 2.5Y7/2 内：にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 小片	
64	015-01	縄文土器 深鉢	D	AB 26	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3mm以下 の砂粒多く 含む)	並	にぶい褐 7.5YR6/3 褐灰 10YR5/1	口縁部 小片	
65	017-06	縄文土器 深鉢	D	AD 26	-	包含 層	-	-	-	外面：ナデ 内面：ナデ	密 (3mm以下 の砂粒含 む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 小片	
66	016-07	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3mm以下 の砂粒多く 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	小片	
67	017-03	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3mm以下 の砂粒多く 含む)	並	黄灰 2.5Y6/1	小片	
68	017-02	縄文土器 深鉢	D	AD 25	-	包含 層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (2.5mm以下 の砂粒多く 含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	小片	
69	019-08	縄文土器 深鉢	D	排土	-	-	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3mm以下 の砂粒多く 含む)	並	外：にぶい黄 2.5Y6/3 内：浅黄 2.5Y7/3	小片	

第9表 大谷遺跡出土遺物観察表③

遺物番号	登録番号	器種	調査区	小地区等	出土遺構	出土層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
							口径	器高	その他						
70	015-05	縄文土器 深鉢	D	A C 27	-	包含層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (3mm以下の砂粒多く含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	小片	
71	015-03	縄文土器 深鉢	D	A B 26	-	包含層	-	-	-	外面：沈線 内面：ナデ	密 (4mm以下の砂粒多く含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	小片	
72	015-02	縄文土器 深鉢	D	A B 26	-	包含層	-	-	-	外面：縄文 内面：ナデ	密 (3mm以下の砂粒多く含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	小片	
73	017-08	縄文土器 深鉢	D	U24	-	包含層	-	-	-	外面：半截竹管文 内面：ナデ	密 (2.5mm以下の砂粒多く含む)	並	灰黄褐 10YR4/2	小片	
74	015-06	縄文土器 鉢	D	A D 21	-	包含層	13.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密 (2.5mm以下の砂粒多く含む)	並	灰黄褐 10YR5/2、4/2	口縁部 2/12	
75	009-01	縄文土器 深鉢	D	調査坑3	-	-	-	-	底径 8.0	外面：工具ナデ・オサエナデ 内面：ナデ	密 (3mm以下の砂粒多く含む)	並	外：浅黄 2.5Y7/3 内：にぶい黄橙 10YR6/3	底部 12/12	
76	019-02	土師器 椀	D	No.0 +40	-	包含層	-	-	-	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
77	018-01	土師器 杯	D	X21	-	包含層	12.4	3.8	-	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密 (0.5mm以下の砂粒含む)	並	外：にぶい黄橙 10YR6/3 内：にぶい黄橙 10YR7/3	完存	底部外面「十」もしくは「×」の線刻有り。
78	013-06	土師器 杯	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	12.8	-	-	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 2/12	
79	018-05	土師器 皿	D	排土	-	-	14.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	浅黄 2.5Y7/3	口縁部 1/12	
80	018-07	土師器 皿	D	排土	-	-	14.4	2.0	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密 (微砂粒少量含む)	並	外：灰黄褐 10YR5/2 内：浅黄 2.5Y7/3	口縁部 1/12	
81	018-08	土師器 皿	D	排土	-	-	16.0	2.3	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	外：灰白 5Y7/1 内：黄灰 2.5Y6/1	口縁部 1/12	
82	010-02	土師器 皿	D	調査坑3	-	-	13.0	-	-	外面：オサエナデ 内面：ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/4 灰黄褐 10YR5/2	口縁部 1/12	
83	014-01	土師器 皿	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	13.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	
84	018-04	土師器 皿	D	No.0 +40 ~	-	包含層	12.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	淡黄 2.5Y8/3	口縁部 2/12	
85	018-06	土師器 皿	D	排土	-	-	11.2	-	-	外面：オサエナデ 内面：ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	
86	014-02	土師器 皿	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	9.1	1.55	-	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 3/12	
87	013-05	土師器 皿	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	10.0	2.0	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 2/12	
88	013-04	土師器 皿	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	10.0	1.8	-	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密 (6mm以下の小石・砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 4/12	
89	018-03	土師器 皿	D	A G 24	-	包含層	10.0	1.8	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密 (0.5mm以下の砂粒・雲母含む)	並	外：灰 5Y4/1 内：にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 2/12	
90	018-02	土師器 皿	D	Y23	-	包含層	10.5	1.55	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/4	口縁部 3/12	
91	019-03	土師器 皿	D	排土	-	-	-	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12	
92	012-05	ロクロ土師器 椀	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	-	-	高台径 6.5	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3 7.5YR8/4	高台部 1/12	

第10表 大谷遺跡出土遺物観察表④

遺物 番号	登録 番号	器 種	調査 区	小地 区等	出土 遺構	出土 層位	法 量 (c m)			調整 (技法) の特徴	胎 土	焼 成	色 調	残存度	備 考
							口径	器高	その他						
93	008-02	ロクロ土師器 碗	D	調査坑5	-	-	-	-	高台径 6.8	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	淡黄 2.5Y8/4	高台部 12/12	
94	008-01	ロクロ土師器 碗	D	調査坑8	-	-	-	-	高台径 7.3	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密 (3mm以下の砂粒含む)	並	淡黄 2.5Y8/4	高台部 12/12	
95	008-04	ロクロ土師器 皿	D	調査坑3	-	-	-	-	底径 4.0	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	底部 12/12	
96	012-02	山茶碗	D	No.0 ~ +20	-	包含層	-	-	高台径 7.2	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白 N8/0	高台部 10/12	砂粒痕有り
97	012-04	山茶碗	D	No.0 ~ +40 ~ +57	-	包含層	-	-	高台径 9.0	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白 N8/0	高台部 2/12	初段痕有り
98	018-09	山皿	D	排土	-	-	8.4	2.1	底径 4.8	外面：ロクロナデ・ナデ 内面：ロクロナデ	密 (5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 5Y8/1	口縁部 3/12・底部 5/12	
99	012-01	山茶碗	D	No.0+40~	-	包含層	-	-	高台径 7.3	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白 N8/0	高台部 10/12	底部外面に墨書有り。 初段痕有り。
100	012-03	山茶碗	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	-	-	高台径 6.2	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ・ナデ	密	良	灰白 N8/0	高台部 9/12	初段痕有り。
101	018-10	山茶碗	D	排土	-	-	-	-	高台径 7.0	外面：ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面：ロクロナデ	密	良	灰白 2.5Y8/1	高台部 3/12	初段痕有り。
102	013-02	土師器 甕	D	No.0 +40 ~ +57	-	包含層	22.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや密	並	淡黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12	
103	012-06	土師器 甕	D	No.0+40~	-	包含層	20.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
104	013-03	土師器 甕	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	20.0	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	やや粗 (2mm以下の砂粒含む)	並	灰白 10YR8/2	口縁部 1/12	
105	019-05	土師器 甕	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	-	-	-	外面：ヨコナデ・工具ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	密 (2mm以下の砂粒含む)	並	外：黒 N2/0 (煤) 内：にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12	外面煤付着
106	019-04	土師器 甕	D	No.0 +40	-	包含層	-	-	-	外面：ヨコナデ・ハケメ (4本/0.6cm) 内面：ヨコナデ・ナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	外：褐灰 7.5YR4/1 内：にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12	外面煤付着
107	019-07	土師器 鍋	D	A E 21	-	包含層	-	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ	密 (雲母含む)	並	外：灰黄橙 10YR5/2 内：にぶい黄橙 10YR4/3	口縁部 1/12	外面煤付着
108	013-01	土師器 鍋	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	26.0	-	-	外面：ヨコナデ 内面：ヨコナデ	やや粗 (1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 1/12	内面炭化物付着
109	019-06	土師器 鍋	D	A G 24	-	包含層	-	-	-	外面：ヨコナデ・ナデ 内面：ヨコナデ・ナデ	密	並	外：黒 N2/0 (煤) 内：にぶい黄 2.5Y6/3	口縁部 1/12	外面煤付着
110	020-01	土師器 鉢	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	12.2	6.6	5.0	外面：ヨコナデ・オサエナデ 内面：ヨコナデ・工具ナデ?	密 (2mm以下の砂粒含む)	並	外：淡黄橙 7.5YR8/3 内：にぶい橙 5YR7/4	口縁部 5/12	
111	019-01	陶器 練鉢	D	排土	-	-	-	-	-	外面：ロクロナデ 内面：ロクロナデ	密 (0.5mm以下の砂粒含む)	良	灰 N6/0	口縁部 1/12	
112	021-04	削器	D	A B 26	-	包含層	残存長 6.0	残存幅 3.7	残存厚 0.8	-	-	-	-	完存	重量：22.4g 石材：チャート
113	021-01	打製石斧	D	V22	-	包含層	残存長 6.5	残存幅 6.3	残存厚 1.5	-	-	-	-	ほぼ完存	重量：87g 石材：砂岩
114	021-03	敲石	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	残存長 11.0	残存幅 6.2	残存厚 5.7	-	-	-	-	完存	重量：500g 石材：凝灰岩
115	021-02	砥石	D	A F 21	-	包含層	残存長 11.0	残存幅 9.3	残存厚 5.3	-	-	-	-	-	重量：462g 石材：細粒砂岩

第11表 大谷遺跡出土遺物観察表⑤

遺物番号	登録番号	器種	調査区	小地区等	出土遺構	出土層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
							口径	器高	その他						
116	025-02	不明木製品	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	残存長 36.9	残存幅 11.5	残存厚 1.2	-	-	-	-	-	
117	025-01	不明木製品	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	残存長 36.6	残存幅 5.35	残存厚 1.95	-	-	-	-	-	
118	022-01	不明木製品	D	No.0 +20 ~ +40	-	包含層	残存長 22.6	残存幅 4.0	残存厚 1.1	-	-	-	-	-	
119	022-02	炭化木製遺物	D	No.0 +40	-	包含層	残存長 15.6	残存幅 2.2	残存厚 1.9	-	-	-	-	-	燃えさし
120	022-03	炭化木製遺物	D	No.0 +40	-	包含層	残存長 15.1	残存幅 1.8	残存厚 1.1	-	-	-	-	-	燃えさし
121	022-04	炭化木製遺物	D	No.0 +40 ~ +57	-	包含層	残存長 9.7	残存幅 1.9	残存厚 0.9	-	-	-	-	-	燃えさし
122	008-07	縄文土器 深鉢	-	調査坑82	-	-	-	-	底径 9.0	外面: オサエナデ 内面: ナデ	密 (1~2mm の砂粒多く 含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	底部 3/12	
123	009-02	弥生土器 甕	-	調査坑70	-	-	-	-	底径 5.6	外面: オサエナデ・ハケメ (6本/1cm) 内面: オサエナデ・ハケメ (6本/1cm)	密 (0.5mm以下 の砂粒・ 雲母含む)	並	灰黄褐 10YR5/2	底部 12/12	
124	010-01	土師器 皿	-	調査坑70	-	-	13.6	-	-	外面: ヨコナデ・オサエナデ 内面: ナデ	やや密	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 1/12	
125	008-05	ロクロ土師器 皿	-	調査坑78	-	-	8.4	1.6	底径 5.2	外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ	密 (雲母含 む)	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 2/12	
126	007-09	ロクロ土師器 皿	-	調査坑28	-	-	-	-	底径 4.4	外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ	密 (雲母含 む)	並	灰黄 2.5Y6/2	底部 12/12	
127	007-07	灰釉陶器 碗	-	調査坑59	-	-	-	-	高台径 8.1	外面: ロクロナデ・高台貼付 後ナデ 内面: ロクロナデ	密	良	外: 灰白 5Y7/1 内: 灰白 5Y8/1	高台部 2/12	底部墨付着
128	007-04	灰釉陶器 碗	-	調査坑77	-	-	-	-	高台径 9.1	外面: ロクロナデ・高台貼付 後ナデ・施釉 内面: ロクロナデ	密	良	灰白 N7/0	高台部 1/12	内面墨付着
129	007-08	白磁 小皿	-	調査坑63	-	-	-	-	底径 3.4	外面: ロクロナデ 内面: ロクロナデ・施釉	密	良	素地: 灰白 5Y7/1 釉: 灰オリーブ 7.5Y6/2	底部 3/12	同安窯系
130	007-06	山茶碗	-	調査坑59	-	-	-	-	高台径 9.0	外面: ロクロナデ・ケズリ・ 高台貼付後ナデ 内面: ロクロナデ	密 (1.5mm以下 の砂粒含 む)	良	外: 灰白 N7/0 内: 灰白 5Y7/1	高台部 2/12	
131	007-05	山茶碗	-	調査坑59	-	-	-	-	底径 8.6	外面: ロクロナデ・ナデ 内面: ロクロナデ	密 (0.5mm以下 の砂粒含 む)	良	灰白 N8/0	底部 4/12	
132	007-03	山茶碗	-	調査坑88	-	-	-	-	高台径 7.3	外面: ロクロナデ・高台貼付 後ナデ 内面: ロクロナデ	密 (2.5mm以下 の砂粒含 む)	良	灰白 N7/0	高台部 3/12	
133	009-04	土師器 甕	-	調査坑11	-	-	22.8	-	-	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	密 (0.5mm以下 の微砂粒 含む)	並	外: 灰白 2.5Y8/1 内: にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	外面煤付着
134	009-05	土師器 鉢	-	調査坑67	-	-	33.0	-	-	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	密	並	外: 褐灰 10YR4/1 内: にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12	外面煤付着 内面炭化物付着
135	010-04	銭貨	-	調査坑79	-	-	-	-	-	-	-	-	-	完存	「開元通寶」

【凡例】

- ・遺物番号: 挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号: 実測段階の登録番号を示す。
- ・小地区等: 4m方眼の小地区または範囲確認調査の調査坑番号等の出土位置を示す。
- ・出土遺構: 報告書の遺構番号を示す。
- ・色調: 『新版標準土色帖』1999年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残存度: 土器・陶磁器は当該部位を12分割した際の残存度を示し、残存部僅少の場合は「小片」と表記した。石器・金属製品は完形のもの  
は「完存」と表記した。また、残存度を示しがたいものは「-」で表記した。

第12表 大谷遺跡出土遺物観察表⑥

### 3 自然科学分析

#### (1)はじめに

大谷遺跡では、自然流路等の遺構が検出されており、古墳時代頃と考えられる遺物が出土している。本報告では、出土した木製品と種実遺体の同定を実施し、木材利用および植物利用について検証する。

#### (2)木製品の樹種同定

##### ①試料

試料は、遺構内や包含層から出土した木製品や原材13点（試料番号1～13）である。

##### ②分析方法

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラル（抱水クロラル、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

なお、同定の根拠となる顕微鏡下での木材組織の特徴等については、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にす。また、各樹種の木材組織の特徴については、林（1991）、伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にす。

##### ③結果

樹種同定結果を第13表に示す。木製品・原材は針葉樹4種類（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・ヒノキ科）と広葉樹4種類（ハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・トネリコ属）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxylon*)  
マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柾目面の観察で仮道管と柔細胞が認められる。本来水平樹脂道も有すると考えられるが、本試料では確認できなかった。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。なお、試料番号8については板目面の

切片が作成できなかった。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don)  
スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.)  
Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ属近似種 (cf. *Chamaecyparis*)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。仮道管壁はヒノキに同定した試料よりも厚壁となる。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～10細胞高。

以上の特徴はアスナロ属やネズコ属とは異なるため、ヒノキ科の中でもヒノキ属（ヒノキあるいはサワラ）の可能性が高く、ヒノキ属近似種とした。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 (*Alnus subgen. Alnus*)  
カバノキ科

散孔材で、管孔は単独または2～4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1～30細胞高のもの集合放射組織とがある。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

遺物が完形に近い上に、木口面は全て加工面であるため、木口面の小範囲の切片しか作成できなかった。遺物表面の観察から環孔材である。切片では大道管の一部と小道管が観察できる。小道管は火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に

配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものとの複合放射組織とがある。

・トネリコ属シオジ節 (*Fraxinus* sect. *Fraxinater*) モクセイ科

環孔材で、道管は比較的厚壁で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、単独または2個が放射方向に複合して配列し、根臨海に向かって径を漸減させる。道管壁は厚い。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

#### ④考察

今回調査を行った木製品（農具未製品、棒軸形曲柄平鋏、板材、曲物の底板？、燃えさし、不明加工木、原材）は、樹種同定の結果、針葉樹のマツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・ヒノキ属近似種と広葉樹のハンノキ属ハンノキ亜属・コナラ属コナラ亜属コナラ節・コナラ属アカガシ亜属・トネリコ属が利用されていることが確認された。各樹種の材質は、針葉樹のマツ属複維管束亜属が強度・保存性が比較的高い。同じく針葉樹のスギ、ヒノキ、ヒノキ属近似種は木理が通直で割裂性が高く、加工が容易であり、ヒノキとヒノキ属近似種については耐水性も高い。一方、広葉樹では、コナラ節、アカガシ亜属、トネリコ属が重硬で強度が高い材質を有する。ハンノキ亜属もやや重硬な部類に入るが、保存性は高くない。

器種別にみると、農具原材と板材はアカガシ亜属、棒軸形曲柄鋏身はコナラ節であった。いずれも写真をみる限りではミカン割状あるいは柁目板状を呈する。アカガシ亜属は、鋏・鋤を中心に農具によく利用される木材であり、島地・伊東（1988）の統計でも西日本を中心に鋏・鋤の約9割にアカガシ亜属が利用されている。三重県内では、北堀池遺跡や六大A遺跡で古墳時代の鋏・鋤について樹種同定が実施されており、一部、シイ属、クスノキ、コナラ節、

ムクノキ等が利用されるが、多くはアカガシ亜属である（山田,1981；金原,2003）。一方、棒軸形曲柄鋏身については、これまでに六大A遺跡で同様の製品について樹種同定が実施されており、19資料中7資料がコナラ節、1資料がシイ属、残る11資料がアカガシ亜属に同定されている（金原,2003）。棒軸形曲柄鋏身の樹種は、アカガシ亜属が多い点で他の鋏・鋤類と同様であるが、他の鋏・鋤類に比較して、コナラ節の占める割合が比較的高い傾向がある。今回の結果も1点ではあるが、コナラ節が利用されており、本製品ではアカガシ亜属と共にコナラ節も比較的良好に利用されていた可能性がある。

一方、曲物底板？はスギ、不明加工木はスギおよびヒノキ、燃えさしは複維管束亜属とヒノキ科で、全て針葉樹が利用されている。このうち、曲物底板は、三重県内では六大A遺跡で200点を越える資料について樹種同定が実施されており、ヒノキ属（ヒノキ・サワラ）を中心に、スギ、アスナロ等が確認されている（金原,2003）。六大A遺跡の他には、北堀池遺跡、前沖遺跡、城之越遺跡等で樹種同定が行われており、スギ？、ヒノキ、アカガシ亜属の利用が確認されている（山田,1981；堀場,1986；金原,1992）。これらの結果から曲物底板には針葉樹が多様されている傾向があり、今回の結果は同調的な結果といえる。

原材と考えられる木材は、アカガシ亜属、ハンノキ亜属、シオジ節が確認された。原材であることから、何らかの用途に利用するために保管されていたことが推定される。このうち、アカガシ亜属は今回調査を行った木製品では農具原材と板材で利用が確認されている。一方、ハンノキ亜属やシオジ節は、今回の木製品中には確認されず、どのような木製品に利用されていたのかは不明である。三重県内では、堀町遺跡の弥生時代末期とされる棒状製品にハンノキ亜属を含むハンノキ属が確認された例があるが（パリノ・サーヴェイ,2000）、古墳時代の木製品にハンノキ亜属（あるいはハンノキ属）が確認された例は知られていない。一方、シオジ節を含むトネリコ属も堀町遺跡の室町時代とされる漆器椀に認められた例があるのみで（パリノ・サーヴェイ,2000）、古墳時代の利用例は知られていない。そのため、本

遺跡で確認されたシオジ節やハンノキ亜属がどのような用途に利用されていたのかについては、三重県内における木材利用状況の資料をさらに蓄積して検討することが必要である。なお、原材は、その性格を考えれば、周辺地域で伐採されてきた可能性が高い。シオジ節やハンノキ亜属には、河畔の湿地林や溪谷林を構成する種類が含まれており、遺跡周辺に湿地林等が見られた可能性がある。今後、花粉分析等による古植生復元も実施し、周辺植生と木材利用についても検討する必要がある。

### (3) 種実遺体の同定

#### ① 試料

種実同定は、D-No.0+20~40、D-X22、D-R22の包含層より各1点検出された種実遺体計3点について実施する。

#### ② 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察する。現生標本および石川(1994)、中山ほか(2000)等との対照から、種実の種類と部位を同定する。分析後の種実等は、種類毎に容器に入れ、70%エタノール溶液による液浸保存を施して返却する。

#### ③ 結果

D-No.0+20~40は常緑広葉樹のシイノキ属の果実に、D-X22、D-R22は栽培植物のモモの核に同定された(第14表)。以下に、同定された種実の形態的特徴等を記す。

##### ・シイノキ属 (*Castanopsis*) ブナ科

果実が検出された。黒褐色、長さ1.1cm、径7.7mm程度の広卵形で頂部は尖る。基部を占める着点は灰褐色、円状不定形。果皮は薄く、表面には細く浅い溝が縦列する。

##### ・モモ (*Prunus persica* Batsch) バラ科サクラ属

核(内果皮)が検出された。茶褐色、やや扁平な広楕円体。D-X22は長さ2.6cm、幅2.3cm、厚さ1.8cm程度で、D-R22は長さ2.3cm、幅1.9cm、厚さ1.6cm程度。頂部はやや尖り、基部は切形で中央部に湾入した臍がある。1本の明瞭な縦の縫合線が発達し、背面正中線上に細い縦隆条が、腹面正中線には浅い縦溝とその両側に幅の狭い帯状部がある。内果皮は厚く硬く、表面は縦に流れる不規則な線状の深い窪みがあり、全体として粗いしわ状に見える。

#### ④ 考察

D-X22、D-R22の包含層から確認されたモモは、古くから栽培のために持ち込まれた渡来種とされ(南木,1991)、観賞用の他、果実が食用、薬用等に広く利用される。当時の本遺跡周辺域におけるモモの利用や、利用後の廃棄等の人為的行為が指摘される。D-No.0+20~40から確認されたシイノキ属は、暖帯に優占する常緑高木であることから、本遺跡周辺域の山地に生育していたものに由来すると考えられる。また、堅果が食用可能である。本分析で確認された果実は完形であることから、食用された直接的な証拠には至らないが、持ち込まれ利用されていた可能性はある。(パリノ・サーヴェイ株式会社)

#### 【引用文献】

- ・林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集.京都大学木質科学研究所.
- ・堀場義平,1986,前沖遺跡木質遺物の樹種同定.「三重県埋蔵文化財調査報告74 前沖遺跡発掘調査報告」,三重県教育委員会,84-88.
- ・石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.
- ・伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181.
- ・伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所.66-176.
- ・伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201.
- ・伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166.
- ・伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216.
- ・金原正明,1992,木製遺物の樹種.「三重県埋蔵文化財調査報告99-3 城之越遺跡 -三重県上野市比土-」,三重県埋蔵文化財センター,137-143.
- ・金原正明,2003,樹種同定.「三重県埋蔵文化財調査報告115-17 一般国道23号中勢道路(8工区)建設事業に伴う六大A遺跡発掘調査報告(木製品編)」,三重県埋蔵文化財センター,18-22.
- ・南木睦彦,1991,栽培植物,古墳時代の研究 4 生産と流通Ⅰ,石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編,雄山閣,165-174.

- ・中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.
- ・パリノ・サーヴェイ株式会社,2000,堀町遺跡(第1次)における自然科学分析.「三重県埋蔵文化財調査報告123-7 一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告VII 堀町遺跡」,三重県埋蔵文化財センター,261-266.
- ・Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I.and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- ・島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織.地球社,176p.
- ・島地 謙・伊東隆夫(編),1988,日本の遺跡出土木製品総覧.雄山閣,296p.
- ・Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト.伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].
- ・山田 猛,1981,北堀池遺跡の木製品.「三重県埋蔵文化財調査報告51-1 三重県上野市 北堀池遺跡発掘調査報告第一分冊」,三重県教育委員会,35-36.

番号	実測番号	出土位置	遺構・層位	器種	樹種	備考
1	027-01	D-X21	SK46-No. 1	農具原材	コナラ属アカガシ亜属	加工段階の未製品
2	028-01	D-X21	SK46-No. 2	板材	コナラ属アカガシ亜属	
3	024-01	D-AA26	SD47上層	農具（棒軸形曲柄平鋏）	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
4	025-02	D-No. 0+20～40	包含層	曲物の底板？	スギ	
5	025-01	D-No. 0+20～40	包含層	不明加工木	スギ	
6	022-01	D-No. 0+20～40	包含層	不明加工木	ヒノキ	先端付近に抉りが2ヶ所
7	022-03	D-No. 0+40～57	包含層	燃えさし	ヒノキ	先端が焦げた木片
8	022-02	D-No. 0+40～57	包含層	燃えさし	マツ属複維管束亜属	先端が焦げた木片
9	022-04	D-No. 0+40～57	包含層	燃えさし	ヒノキ属近似種	先端が焦げた木片
10	011-01	B-S11	SR2	原材1	ハンノキ属ハンノキ亜属	加工（切断）痕有
11	011-02	B-S11	SR2	原材2	トネリコ属シオジ節	加工（切断）痕有
12	026-01	D-X21	SK46-No. 3	原材	ハンノキ属ハンノキ亜属	先端に加工（切断）痕有
13	023-01	D-X21	SK46	原材	コナラ属アカガシ亜属	加工（切断）痕有

第13表 大谷遺跡出土木製品樹種同定結果

地点・層位		取上年月日	分類群・部位			状態	個数
			和名	学名	部位		
D-No. 0+20～40	包含層	20060911	シイノキ属	<i>Castanopsis</i>	果実	完形	1
D-X22	包含層	20061017	モモ	<i>Prunus persica</i>	核(内果皮)	完形	1
D-R22	包含層	20061003	モモ	<i>Prunus persica</i>	核(内果皮)	完形	1

第14表 大谷遺跡出土種実同定結果

## 4 結 語

大谷遺跡で検出された遺構は、そのほとんどが人為的な遺構とは考えられない自然流路若しくは落ち込み等である。範囲確認調査の結果からも、住居跡等の人為的なものと考えられる遺構は検出されていなかったが、疎密はあるものの、広範囲に遺物が分布していることが確認されたため、遺物の分布密度が高い範囲を本発掘調査の対象地とした。A～D地区のような断片的な調査区設定がなされたのはこのような理由による。

今回調査で確認した遺構については、時期不明のものや断片的な調査で時期を推定したものが大半であるが、出土遺物は調査面積に比して量は多くはないものの、縄文時代～近世に至る幅広い時期の石器・石製品・木製品・金属製品・土器・陶磁器等が出土している。ここでは検出遺構・出土遺物を概観し、若干の考察を加えることで、今回調査の総括に代えたい。

今回出土した遺物では前期末～中期初頭の所産と考えられるA地区表土出土の縄文土器が最古のものである。D地区では中期～後期の縄文土器が比較的まとまって出土しており、詳細な時期は不明ながら削器や打製石斧・敲石等の石器、チャート・サヌカイトの剥片も出土している。当遺跡の北約700mに位置する斎宮池遺跡では中期末～後期初頭の小規模な集落跡が確認されており<sup>①</sup>、また、当遺跡の西約1.5kmに位置する上村池A・B遺跡ではナイフ形石器等の旧石器時代遺物や早期・晩期と推定される縄文時代遺物が採集されていることから、玉城丘陵は旧石器～縄文時代を通じて狩猟・採集のフィールドとされ、居を構えるに適した立地環境の良好な場所に小規模な集落を営んでいたものと推定される。当遺跡周辺で具体的な集落跡は特定できないが、付近に存在した可能性は否定できない。

続く弥生時代については数点の土器が出土したのみで痕跡程度の状態であるが、遺物の出土から付近に集落が存在した可能性は残される。

古墳時代の状況としては、B地区SR2、D地区SK46が特筆される。B地区SR2は調査区の中央部を南北に延びる自然流路で、遺構の時期比定に

はやや問題が残るが、端部に伐採痕（切断痕）が残存する原材が2個体出土しており、樹種同定の結果、それぞれハンノキ属ハンノキ亜属とトネリコ属シオジ節と同定されている。今回調査で出土した木製品の中には当該樹種は確認されていないため、どのような木製品に利用されていたのかは不明であるが、何らかの目的で森林から伐採され、保管されていた可能性がある。一方、D地区SK46は推定径3m程の不整形土坑であるが、底部から樹木の原材や加工途上の木製品が出土した。樹木の原材の中には端部に伐採痕（切断痕）が残存するものがあり、樹種同定の結果、ハンノキ属ハンノキ亜属とコナラ属アカガシ亜属と同定されている。また、加工途上の木製品は板材と直柄平鋏の未製品と考えられ、樹種は同定の結果、ともにコナラ属アカガシ亜属と同定されている。この土坑では、樹木の原材・原材から製品までの加工過程で製材された中間段階の板材・板材からさらに加工工程が進んだ段階の農具未製品が一括して出土していることから、製作作業を行う上での一種の保管庫的な性格の土坑なのかもしれない。この他、時期不詳ながらD地区SD47では、樹種がコナラ属コナラ亜属コナラ節と同定された棒軸形曲柄平鋏の鋏身が出土していることから、古墳時代頃には当地周辺で農業が営まれていたことが窺える。また、II章の歴史的環境でも触れたように、当遺跡の周囲に広がる玉城丘陵には多数の古墳が造営されており、これらの古墳造営に関わった集落が付近に存在したと考えられる。

古代～中世にかけても、所属時期に偏りはあるが、各時期の遺物が出土しており、当地周辺の土地利用が絶えることはなかったようである。また、ごく少量ながら、緑釉陶器・灰釉陶器・青磁・白磁のような陶磁器や、「開元通寶」・「政和通寶」のような銭貨の出土も特筆される。当遺跡の北約500mに位置する長谷町遺跡では9世紀末の火葬墓が確認されており、その埋葬状況から当時の有力者層の墓と考えられることから、当遺跡周辺に火葬墓造営に関わる集落が存在した可能性がある。

近世の所産としては、17世紀代の陶器片や煙管の雁首が出土しているが、当遺跡の南側に点在する現集落は当該期にはすでに成立していたと考えられ、

当遺跡周辺も水田や畑地などの土地利用がなされていたものと推定される。

今回調査した範囲は低湿地の埋没地であり、地元住民によれば戦前頃までは田舟を使用するような沼田であったという。今回出土した原材の中にシオジ節やハンノキ亜属に同定されたものがあるが、前節の自然科学分析でこれらの樹種は河畔の湿地林や溪谷林を構成する種類が含まれ、遺跡周辺に湿地林等が見られた可能性があるとして指摘されていることは調査結果と一致する。第33図で大谷遺跡とその周辺部の遺跡分布を示したが、大谷遺跡は玉城丘陵南部の谷筋に立地するものの、丘陵内の奥まった谷筋ではなく、南側平地部への開放部に位置することが分かる。また、周辺部では丘陵頂部や尾根筋には古墳（群）が造営され、台地や丘陵縁辺部に集落跡等が分布している。今回確認した遺物等を製作若しくは使用したであろう集落の位置は不明であるものの、おそらくは付近の丘陵縁辺部の平坦面若しくは緩斜面に当該集落が存在したものと推定される。今回の調査範囲は、このような集落の周縁部に位置する湿地帯と考えられるが、縄文時代以降、近世に至るまでこの地に暮らした人々の営為の痕跡が残されていたと言えよう。

#### 【註】

- ①『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第6号（三重県埋蔵文化財センター 2008年）
- ②『明和町史 史料編第一巻 自然・考古』（明和町 2004年）
- ③『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第5号（三重県埋蔵文化財センター 2007年）



第33図 大谷遺跡周辺遺跡分布図（1:25,000）

## V 附 編

### 1 はじめに

国営宮川用水第二期土地改良事業に伴い実施した分布調査の結果、斎宮調整池周辺で遺物散布が認められた下記の3遺跡で範囲確認調査を行った。調査の結果、明確な遺構が検出されなかったため本発掘調査には至らなかったが、各遺跡で一定程度の遺物が出土している。ここでは調査の概要と合わせ、出土遺物についても以下に報告することとする。

### 2 野田遺跡

#### (1) 調査の概要

野田遺跡の行政上の所在地は多気郡明和町池村字野田である。当遺跡は玉城丘陵北端の谷筋に立地し、明和町西池村集落の南約500mに位置する。調査前の状況は水田である。現地調査は調査坑を23箇所設定し、平成16・18年度の2ヶ年に亘って行った。調査の結果、表土である耕作土下に何層か砂質土層もしくは粘質土層を介在し、青灰色系の粘質土もしくは砂質土の地山に達したが、遺構は確認できなかった。石器、縄文土器、須恵器、中世の土師器・陶磁器等がほとんどの調査坑から少量出土しているが、

土層観察の結果から、当地は谷筋に形成された沼沢地と考えられる。遺物は周辺部から流入したと考えられるものもあるが、ほ場整備施工時の盛土等に混入したと考えられるものもある。

#### (2) 出土遺物の概要

1はチャート製の楔形石器である。2は縄文土器深鉢の体部片で、太めの沈線が横走する。中期末～後期初頭の所産であろう。3・4は口径が7～8cm程の南伊勢系土師器小皿である。伊藤裕偉氏<sup>①</sup>の分類によるB系統に相当し、15世紀末の所産と考えられる。5は土師器甕である。体部外面と口縁部内面に同じ原体とみられるハケメ調整が施される。上村安生氏<sup>②</sup>の分類による甕A1類若しくはA3類に相当する。6は龍泉窯系の青磁椀である。7は陶器練鉢である。口縁端部が丸く収められる。

### 3 黒桂遺跡

#### (1) 調査の概要

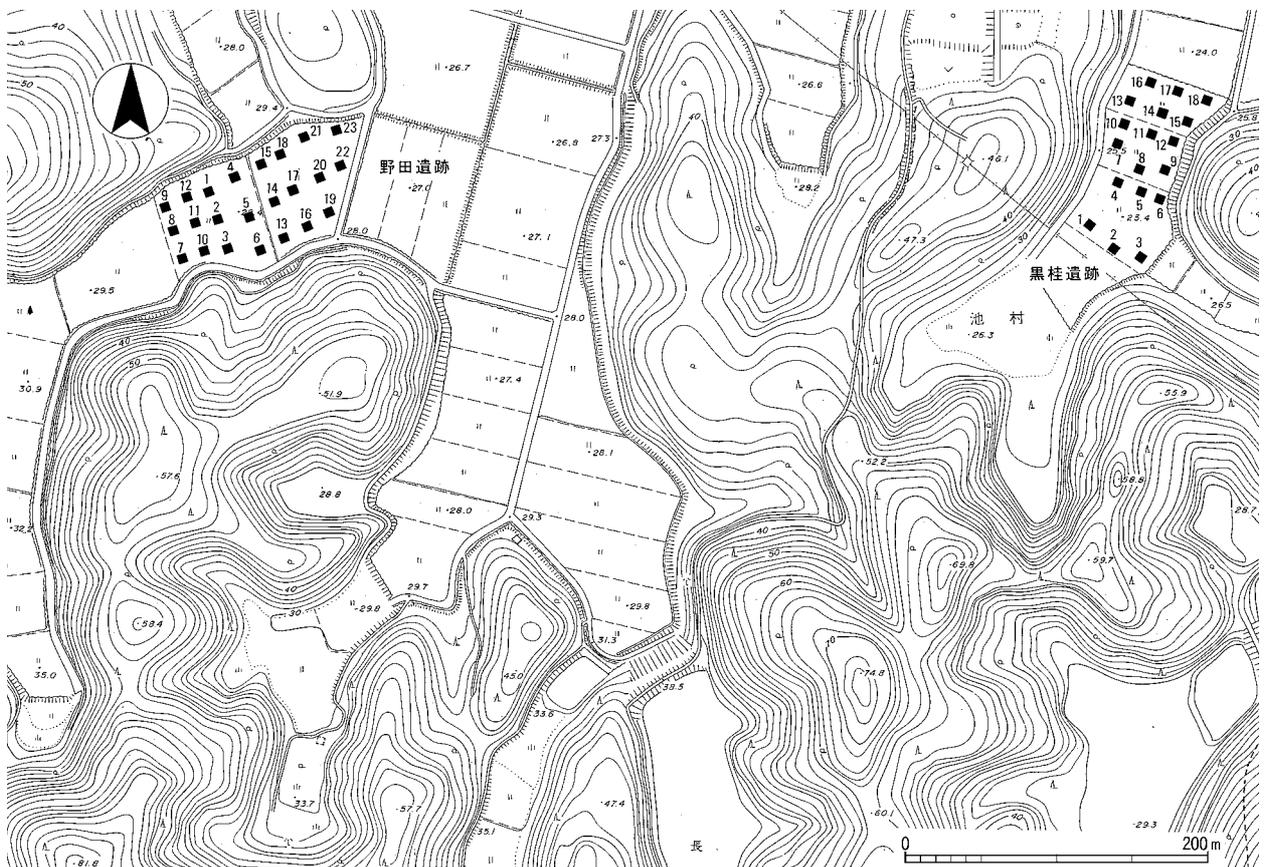
黒桂遺跡の行政上の所在地は多気郡明和町池村字黒桂である。当遺跡は玉城丘陵北端の谷筋に立地し、明和町東池村集落の南約500mに位置する。調査前の状況は水田である。現地調査は調査坑を18箇所設



第34図 範囲確認調査実施遺跡位置図 (1:10,000)



第35図 生洲遺跡調査坑配置図 (1:5,000)



第36図 野田遺跡・黒柱遺跡調査坑配置図 (1:5,000)

定し、平成16年度に行った。基本層序は上から耕作土、床土、盛土、旧水田、青灰色系の砂もしくは粘土の地山で、遺構は確認できなかった。出土遺物には中世の土師器・陶磁器等があるが、旧水田耕作時の混入もしくはほ場整備施工時の盛土混入遺物と考えられる。土層観察の結果から、当地は野田遺跡と同様に谷筋に形成された沼沢地と考えられる。

## (2) 出土遺物の概要

1は口径8cmほどの器高の浅い扁平な小皿である。斎宮第Ⅲ期第3段階に相当し、11世紀後半に位置づけられる<sup>③</sup>。2は口径6cm程の器壁の薄い小皿である。B系統に相当し、16世紀初頭に位置付けられる。3はD系統に相当する小皿である。16世紀代の所産であろう。4は口径15cm程の土師器杯である。斎宮第Ⅲ期第2～3段階に相当し、11世紀代の所産と考えられる。5は口径26cm程の土師器甕もしくは長胴甕である。口縁部が大きく屈曲し、内面が水平となる。外面には縦方向のハケメ調整が施される。6・7は土師器鍋である。6は伊藤裕偉氏の編年による第1段階a型式に相当し、12世紀後葉～13世紀前葉に位置付けられる<sup>④</sup>。7は4段階a型式に相当し、15世紀後半代に位置付けられる。8は陶器播鉢である。

## 4 いけす 生洲遺跡

### (1) 調査の概要

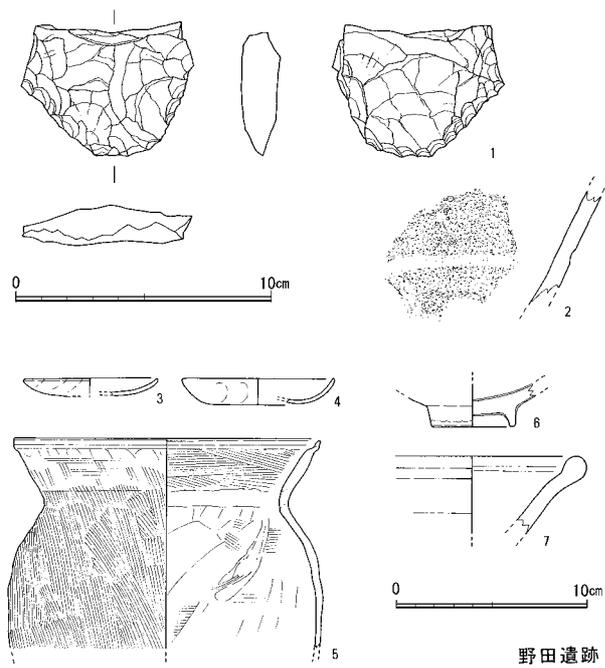
生洲遺跡の行政上の所在地は多気郡明和町池村字生洲である。当遺跡は玉城丘陵北端の谷筋に立地し、斎宮調整池本堤の北約200mに位置する。調査前の状況は水田である。現地調査は調査坑を32箇所設定し、平成16・18・19年度の3ヶ年に亘って行った。調査の結果、表土である耕作土下に何層か粘質土層を介在し、青灰色粘土もしくは灰色砂の地山に達したが、自然流路あるいは落ち込みとみられる溝状遺構以外は確認できなかった。土層観察の結果から、当地は谷筋に形成された沼沢地と考えられる。古代～中世の土師器や陶磁器等が出土したが、なかでも丘陵縁辺部に位置するT1・T2で比較的まとまって出土している。遺物の出自は周辺部からの流入やほ場整備施工時の混入が考えられるが、T1・T2付近は丘陵上からの転落・投棄も考えられる。

## (2) 出土遺物の概要

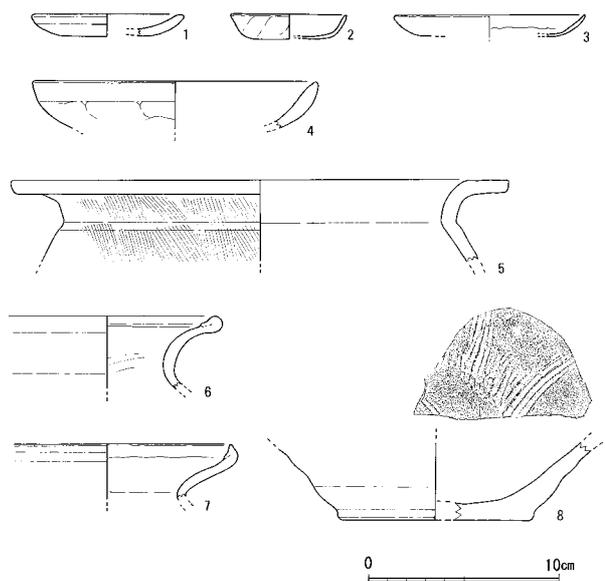
1～3は土師器杯である。1は丸い底部から内弯気味に口縁部が立ち上がる椀形を呈する。斎宮第Ⅰ期第1段階に相当し、飛鳥時代に位置付けられる。2は口径13cm余りで、1と同様の椀形を呈する。斎宮第Ⅰ期第2～3段階に相当し、奈良時代の所産と考えられる。3は口径14cmの土師器杯である。口縁部は内弯気味に立ち上がる。斎宮第Ⅲ期第2～3段階に相当し、11世紀代の所産と考えられる。4は内面を黒色化した黒色土器A類の椀である。5・6は山茶椀である。藤澤良祐氏の編年による第5型式に相当すると考えられ、12世紀末～13世紀初頭に位置付けられる<sup>⑤</sup>。7は美濃産の陶器丸椀である。16世紀代の所産であろう。8は土師器高杯である。口縁端部と脚端部を欠損するが、杯底部は丸みを持ち、やや深い椀形を呈する。面取りされない直線的な脚部が端部付近で大きく開く。外面には縦方向のハケメ調整が施される。斎宮第Ⅰ期、飛鳥～奈良時代の所産であろう。9は土師器甕である。内外面に同一原体と考えられるハケメ調整がなされ、口縁端部は尖る。10は体部下半～底部のみの残存のため全体の器形は不明であるが、土師器の鉢と考えられる。平底で、体部内面は未調整、外面はケズリ調整が施される。11～23は土師器甕である。外面のみハケメ調整がなされるもの、内外面共にハケメ調整がなされるものの二様がある。22は鍋形器形の可能性がある。24は口径21cm余りの土師器長胴甕である。25～27は土師器鍋である。25は外面のみハケメ調整が施された口径42cmの大型の鍋である。26は第3段階、27は第4段階に相当するとみられ、それぞれ15世紀前半、15世紀後半～16世紀前半の所産と考えられる。

## 5 まとめ

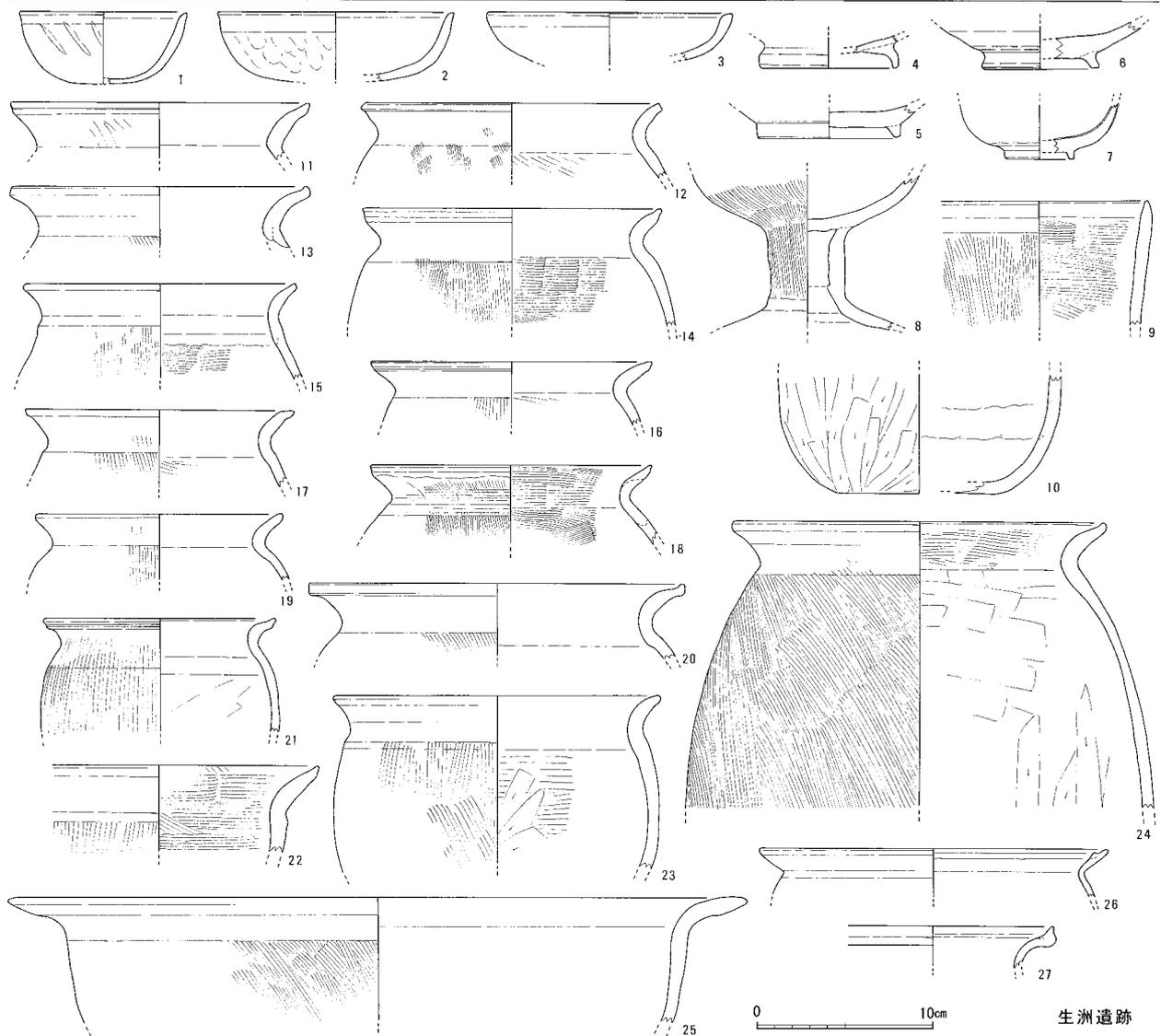
ここで報告する3遺跡は、いずれも玉城丘陵北端に位置する谷筋に立地している。遺跡の立地条件としてはIV章で報告した大谷遺跡と同様であり、遺跡のあり方も同様と言えよう。地形的に見て遺跡内に居住したことは考えにくい、縄文時代や古代～中世の遺物が確認されていることから、当該期に付近の丘陵縁辺部等の微高地で生活の営みがあったものと推定される。これらの遺跡が位置する丘陵地帯の



野田遺跡



黒桂遺跡



生洲遺跡

第37図 範囲確認調査実施遺跡出土遺物実測図（野田遺跡1・2=1:3、その他=1:4）

周縁部には現在も集落が営まれており、この丘陵地帯はいわゆる里山である。丘陵内部には現在集落は営まれていないが、小規模な集落がいくつか存在していた可能性がある。これまでに、生洲遺跡の南約400mの丘陵地内に位置する斎宮池遺跡で、縄文時代中期末～後期初頭及び奈良時代に小規模集落が営まれていたことが確認されており、また、不明確ではあるが、斎宮池遺跡の西約100mに位置する真木谷遺跡においても縄文及び奈良～平安期の人の痕跡が認められている<sup>⑥</sup>。丘陵地内での表面観察による分布調査では集落跡の発見は困難であるが、前述の遺跡以外にも未確認の小規模集落が丘陵地内に複数存在した可能性は認められよう。

#### 【註】

①『多気遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1993年）

『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター 1996年）

以下、南伊勢系土師器皿の分類・編年は上記の文献に拠る。

②上村安生「伊勢・伊賀における古代土師器煮炊具の様相」（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年）

③『斎宮跡発掘調査報告Ⅰ 内院地区の調査 本文編』（斎宮歴史博物館 2001年）

以下、古代の供膳具の編年は上記の文献に拠る。

④伊藤裕偉「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」（『Mie history』vol. 1 1990年）

伊藤裕偉「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」

（『鍋と甕そのデザイン』第4回東海考古学フォーラム 1996年）

以下、南伊勢系土師器鍋の編年は上記の文献に拠る。

⑤藤澤良祐「山茶碗研究の現状と課題」（『研究紀要』第3号 三重県埋蔵文化財センター 1994年）

⑥『宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査だより』第6号（三重県埋蔵文化財センター 2008年）

出土遺跡	遺物番号	登録番号	器種	調査坑No.	出土層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
						口径	器高	その他						
野田遺跡	1	002-04	楔形石器	8	-	全長 2.6	全幅 3.3	全厚 0.8	-	-	-	完存	重量: 8.0g 石材: チャート	
	2	002-03	縄文土器 深鉢	19	-	-	-	-	外面: ナデ・沈線 内面: ナデ	やや密 (2mm以下の砂粒含む)	並	外: にぶい黄橙 10YR5/3 内: 灰黄褐 10YR6/2	小片	
	3	001-01	土師器 小皿	3	灰色砂質粘質土	7.1	-	-	外面: オサエ 内面: ナデ	密	並	灰白 10YR8/2	口縁部 3/12	
	4	001-02	土師器 小皿	2	灰色砂質粘質土	8.0	1.4	-	外面: オサエ 内面: ナデ	密	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 3/12	
	5	002-01	土師器 甕	19	-	16.0	-	-	外面: ヨコナデ・オサエ・ハケメ (7~8本/1cm) 内面: ヨコナデ・ケズリ・ハケメ (7~8本/1cm)	やや密 (0.5mm以下の砂粒含む)	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 3/12	
	6	002-02	青磁 椀	20	-	-	-	高台径 4.4	外面: ロクロナデ・施釉 内面: ロクロナデ・施釉	密	良	素地: 灰白 N8/0 釉: 明オリープ灰 5GY7/1	高台部 3/12	
	7	001-03	陶器 練鉢	2	灰色砂質粘質土	-	-	-	外面: ヨコナデ・ナデ 内面: ヨコナデ・ナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 2.5Y6/1	口縁部 1/12	
黒桂遺跡	1	001-07	土師器 小皿	16	灰色粘質土	8.0	1.1	-	外面: ヨコナデ・ナデ 内面: ヨコナデ・ナデ	密	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 3/12	
	2	001-03	土師器 小皿	10	灰色粘質土	6.0	1.3	-	外面: オサエ 内面: ナデ	密	並	灰白 10YR8/2	口縁部 3/12	
	3	001-02	土師器 小皿	9	-	10.0	-	-	外面: ナデ 内面: ナデ	密	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 2/12	
	4	001-01	土師器 杯	2	灰土	15.0	-	-	外面: ヨコナデ・ナデ 内面: ヨコナデ・ナデ	密	並	灰黄褐 10YR6/2 褐灰 10YR4/1	口縁部 1/12	
	5	001-08	土師器 甕	17	オリープ灰色粘質土	26.0	-	-	外面: ヨコナデ・ハケメ (7本/1cm) 内面: ヨコナデ・ナデ	密	並	灰白 2.5Y8/2	口縁部 1/12	
	6	001-04	土師器 鍋	10	灰色粘質土	-	-	-	外面: ヨコナデ・ナデ 内面: ヨコナデ・ハケメ?	密	並	灰白 2.5Y7/1 暗灰黄 2.5Y4/2	口縁部 1/12	
	7	001-05	土師器 鍋	14	オリープ灰色土	-	-	-	外面: ヨコナデ 内面: ヨコナデ	密	並	灰白 10YR8/1・8/2	口縁部 1/12	
	8	001-06	陶器 搦鉢	15	灰色粘質土	-	-	底径 10.2	外面: ロクロナデ・施釉 内面: ロクロナデ・クシ目・施釉	密	良	素地: 灰白 10YR8/2 釉: 灰赤 10YR4/2	底部 3/12	
生洲遺跡	1	003-02	土師器 杯	T 1	-	9.5	4.1	-	外面: ヨコナデ・ナデ 内面: ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	口縁部 2/12	外面に工具痕
	2	003-01	土師器 杯	T 1	-	13.4	-	-	外面: ヨコナデ・オサエナデ 内面: ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 3/12	
	3	003-03	土師器 杯	T 1	-	14.0	-	-	外面: ヨコナデ・オサエナデ 内面: ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	灰黄褐 10YR5/2	口縁部 2/12	
	4	002-03	黒色土器 椀	T 1	-	-	-	高台径 8.0	外面: ヨコナデ 内面: ナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	外: 暗灰黄 2.5Y5/2 内: 黒色	高台部 4/12	
	5	002-05	山茶椀	T 1	-	-	-	高台径 8.1	外面: ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面: ロクロナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	良	灰白 N7/0	口縁部 7/12	
	6	006-02	山茶椀	T 2	-	-	-	高台径 6.7	外面: ロクロナデ・高台貼付後ナデ 内面: ロクロナデ	密 (微砂粒含む)	良	黄灰 2.5Y6/1	口縁部 5/12	
	7	001-03	陶器 丸椀	8	淡灰色砂質土	-	-	高台径 3.9	外面: ロクロケズリ・高台削り出し・施釉 内面: ロクロナデ・施釉	密	良	素地: 灰白 2.5Y8/2 釉: 暗褐 7.5YR3/3	高台部 4/12	

第15表 範囲確認調査実施遺跡出土物観察表①

出土遺跡	遺物番号	登録番号	器種	調査坑No.	出土層位	法量 (cm)			調整 (技法) の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
						口径	器高	その他						
生 洲 遺 跡	8	003-05	土師器高杯	13	-	-	-	基部径 6.0	外面:ヨコナデ・ハケメ (8本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	橙 5YR6/6	-	
	9	002-04	土師器甌	T 1	-	-	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm)	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/12	
	10	003-04	土師器鉢	T 1	-	-	-	底径 9.4	外面:ケズリ 内面:ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR7/2	底部 3/12	
	11	001-02	土師器甕	8	淡灰色 砂質土	17.0	-	-	外面:ヨコナデ・沈線・ハケメ 内面:ヨコナデ・ナデ	密	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 2/12	
	12	005-01	土師器甕	T 1	-	17.1	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (9本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (5本/1cm)	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
	13	005-03	土師器甕	T 1	-	17.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ 内面:ヨコナデ	やや密	並	灰黄 2.5Y6/2	口縁部 1/12	
	14	005-02	土師器甕	T 1	-	17.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (9本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (7本/1cm)	やや密	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12	
	15	005-06	土師器甕	13	-	15.5	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (7本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (9本/1cm)	やや粗 (1~2mmの砂粒含む)	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12	
	16	005-04	土師器甕	T 1	-	16.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (5本/1cm) 内面:ヨコナデ・工具ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 3/12	
	17	004-05	土師器甕	T 1	-	15.2	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 2/12	
	18	006-01	土師器甕	T 2	-	16.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (12本/1.3cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cmと13本/1.5cm)	密 (0.5mmの砂粒・雲母含む)	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部 2/12	
	19	005-05	土師器甕	T 1	-	14.1	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (8本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	やや粗 (1~2mmの砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁部 1/12	
	20	004-04	土師器甕	T 1	-	21.4	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (5本/1cm) 内面:ヨコナデ・工具ナデ	やや密	並	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 2/12	
	21	002-02	土師器甕	T 1	-	13.2	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (5~6本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR5/3	口縁部 4/12	内面炭化物付着
	22	004-02	土師器甕	T 1	-	-	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (4~5本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm)	やや密	並	浅黄橙 10YR8/3	口縁部 1/12	
	23	004-03	土師器甕	13	-	18.6	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (5本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (3~7本/1cm)・ケズリ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR6/4	口縁部 1/12	
	24	002-01	土師器長胴甕	T 1	-	21.2	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (8本/1cm) 内面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm)・工具ナデ・ケズリ	密 (1.5mm以下の砂粒含む)	並	にぶい黄橙 10YR5/3	口縁部 8/12	
	25	004-01	土師器鉢	T 1	-	42.0	-	-	外面:ヨコナデ・ハケメ (6本/1cm) 内面:ヨコナデ・ナデ	やや密	並	にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	
	26	003-06	土師器鉢	28	-	19.8	-	-	外面:ヨコナデ・ナデ 内面:ヨコナデ・ナデ	密 (1mm以下の砂粒含む)	並	灰黄褐 10YR6/2	口縁部 2/12	外面煤付着
	27	001-01	土師器鉢	7	暗灰色 粘質土	-	-	-	外面:ヨコナデ 内面:ヨコナデ	密	並	灰黄褐 10YR5/2 にぶい黄橙 10YR7/3	口縁部 1/12	外面煤付着

【凡 例】

- ・遺物番号:挿図掲載番号を示す。
- ・登録番号:実測段階の登録番号を示す。
- ・調査坑No.:範囲確認調査時の出土調査坑番号を示す。
- ・色 調:『新版標準土色帖』1999年度版による。複数の色調が存在する場合は併記した。
- ・残 存 度:土器・陶磁器は当該部位を12分割した際の残存度を示し、残存部僅少の場合は「小片」と表記した。完形の場合は「完存」と表記し、残存度を示しがたいものは「-」で表記した。

第16表 範囲確認調査実施遺跡出土遺物観察表②



# 写 真 图 版





I区SF7（西から）



I区SF7（東から：平成19年度工事立会調査区）



I 区調査区遠景及び旧参宮街道（南東から）



I 区工事完了後状況（南から）



Ⅱ区調査区全景（垂直写真：上が西）



Ⅱ区調査区全景（北から）



Ⅱ区SD24・36（南から）



Ⅱ区工事完了後状況（北から）



出土遺物①（土器・陶器）



出土遺物②（石器）



A・B地区調査区全景（西から）



C地区調査区全景（北東から）



C地区SR23（南から）



D地区調査区全景（北東から）



D地区SR31（南から）



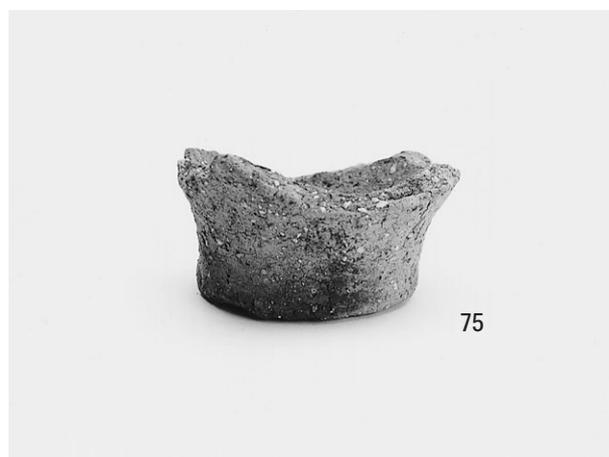
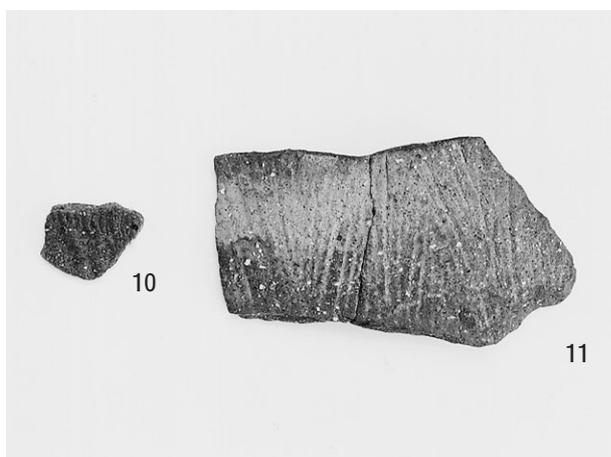
D地区SK46遺物出土状況（南から）



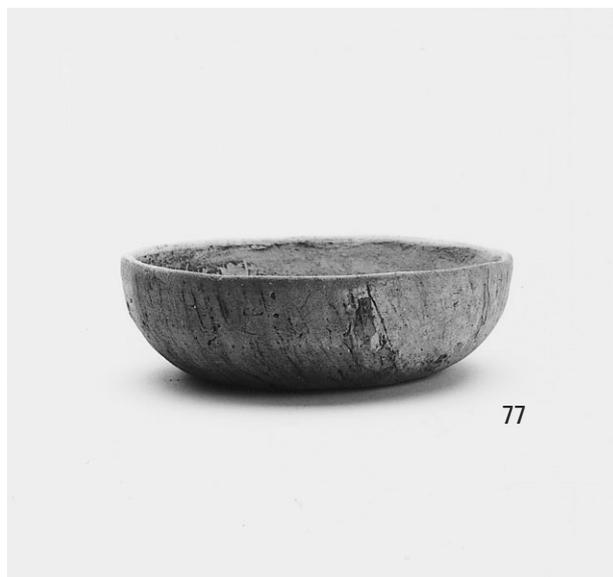
D地区SK46遺物出土状況近景（南から）



工事完了後状況（南東から）



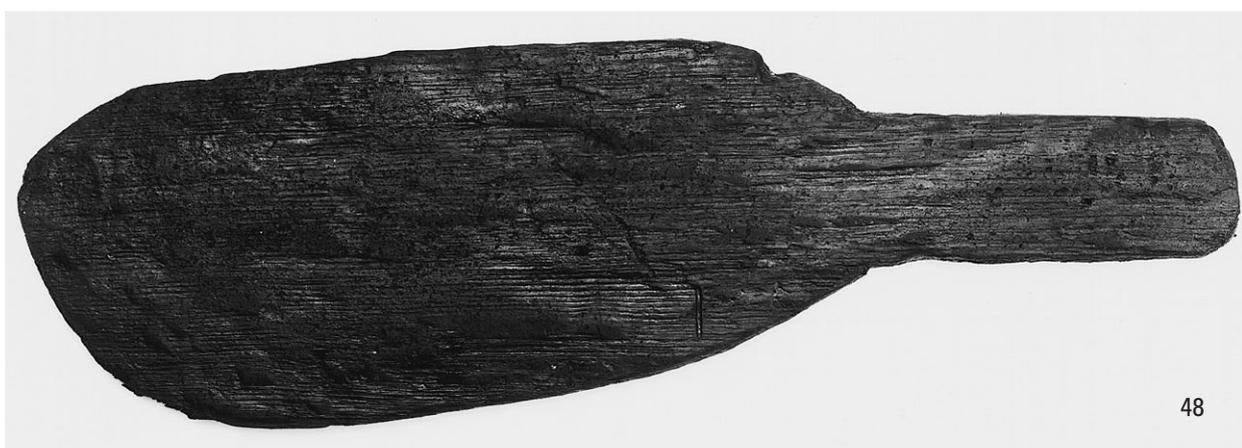
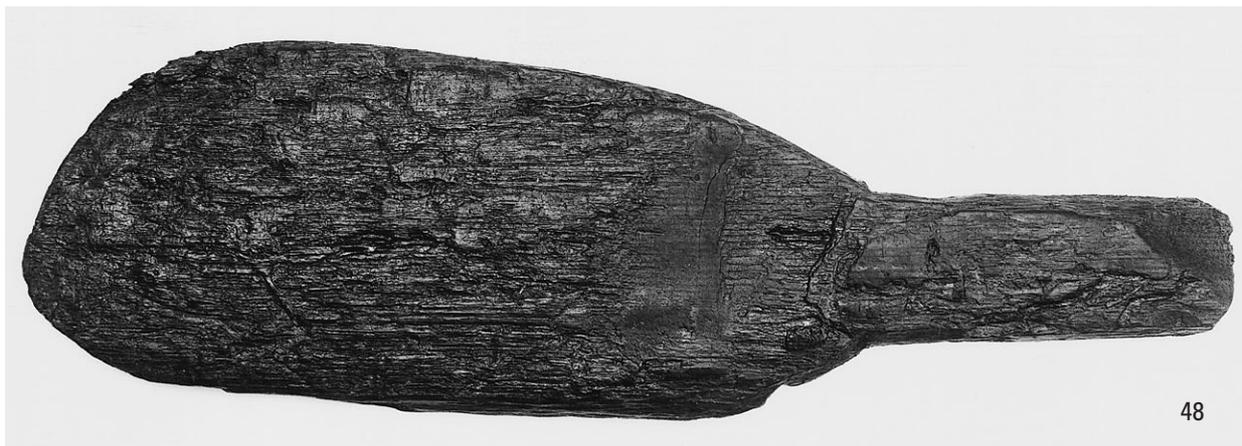
出土遺物① (土器)



出土遺物②（土器）



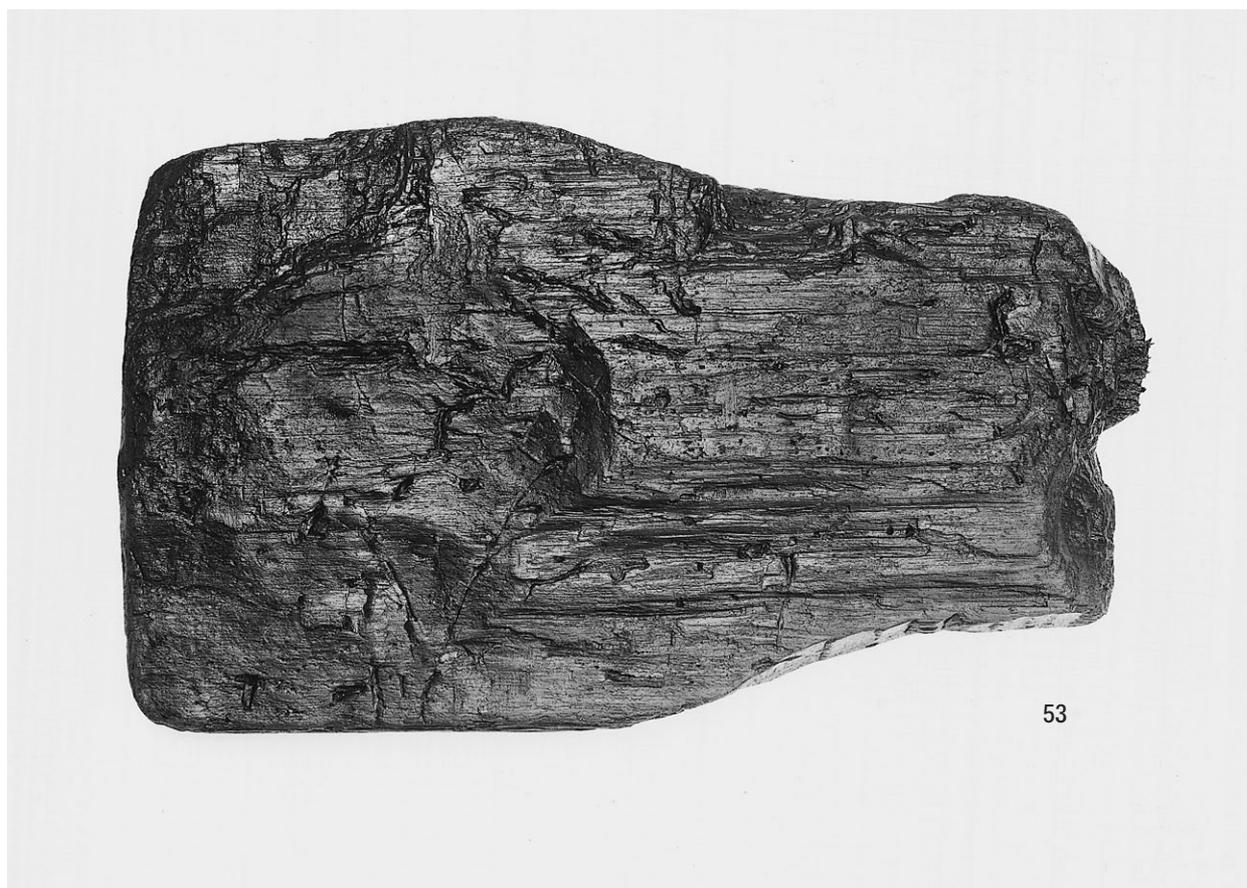
出土遺物③（土器・陶器）



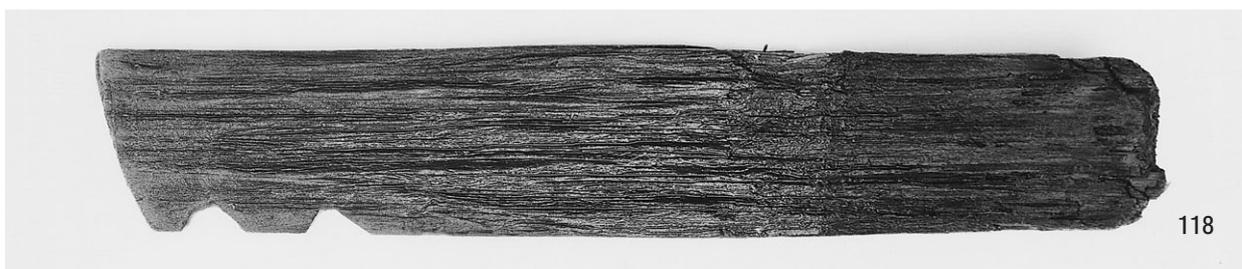
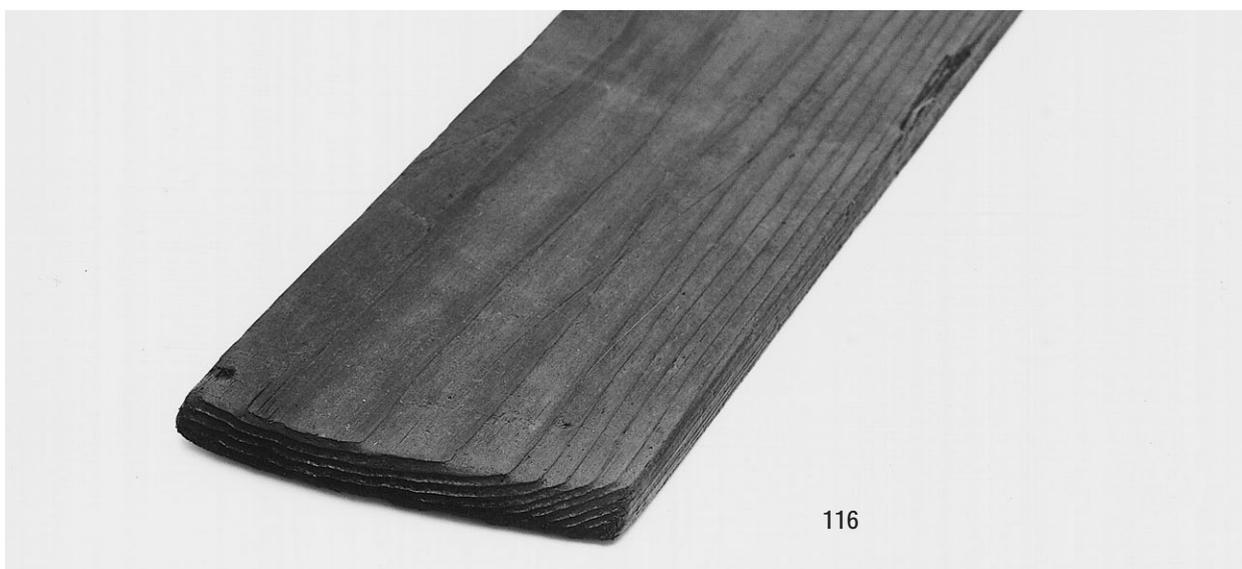
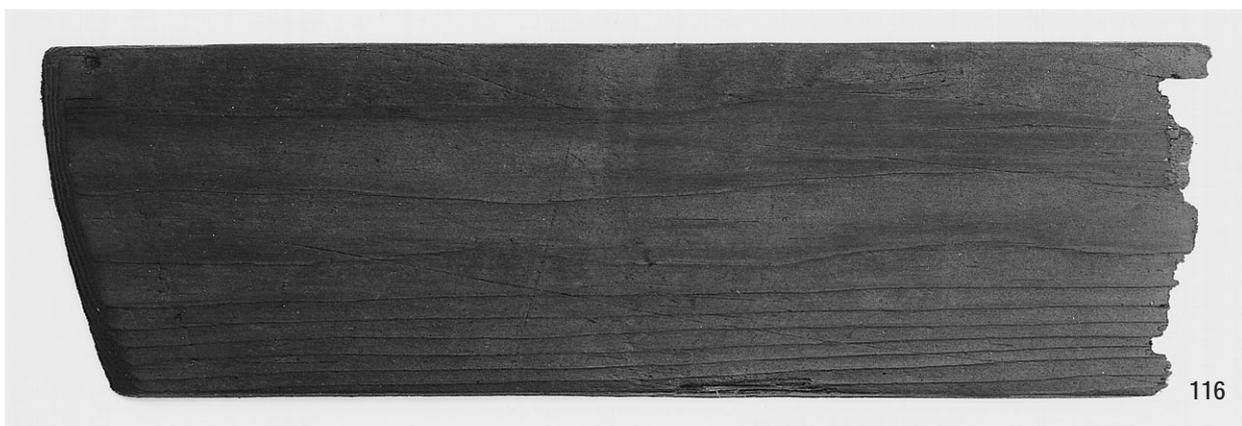
出土遺物④（木製品）



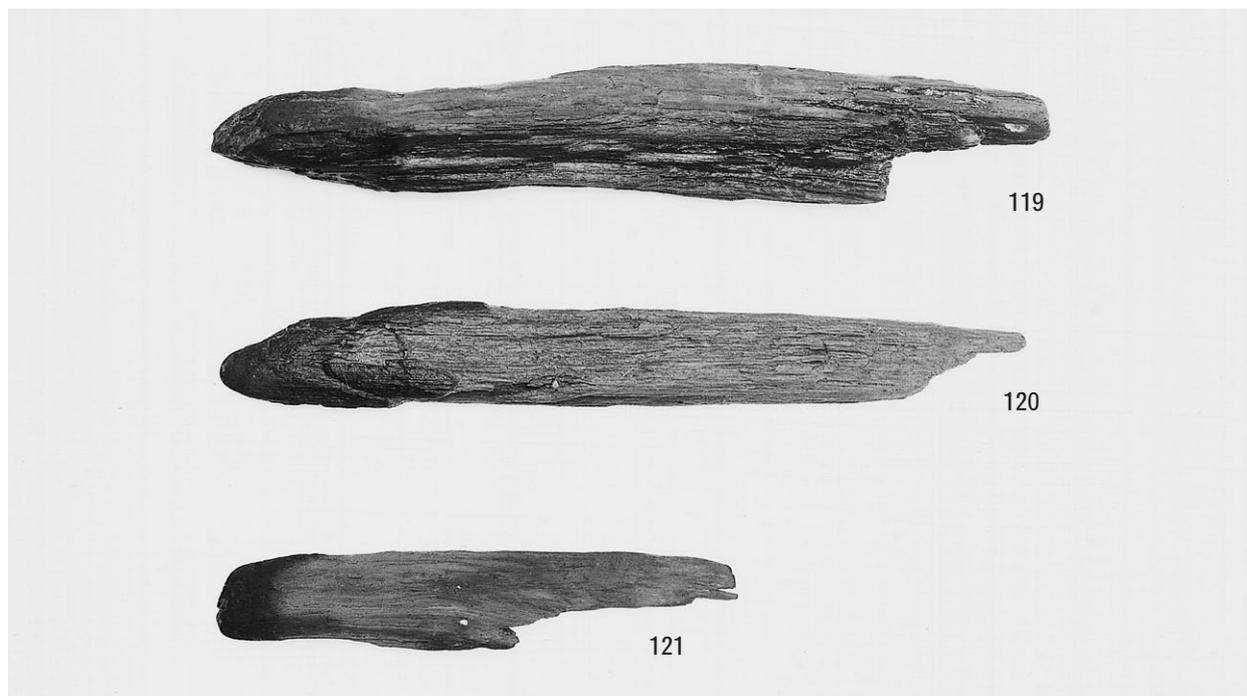
出土遺物⑤（木製品）



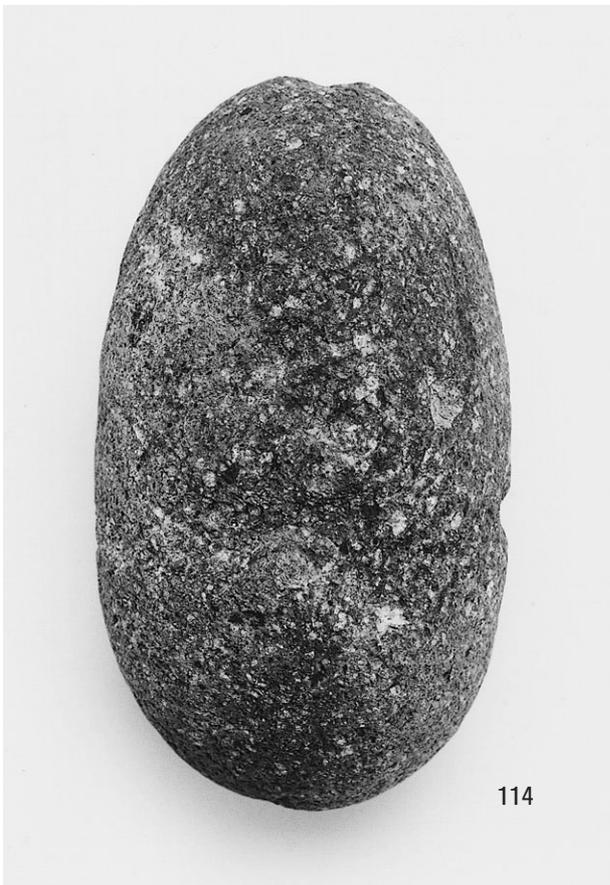
出土遺物⑥（木製品）



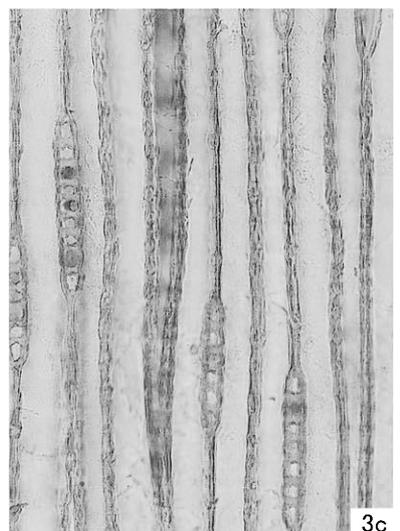
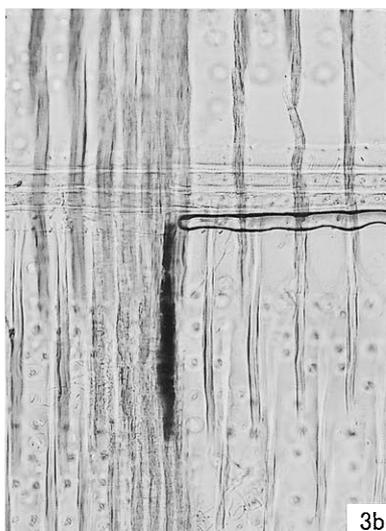
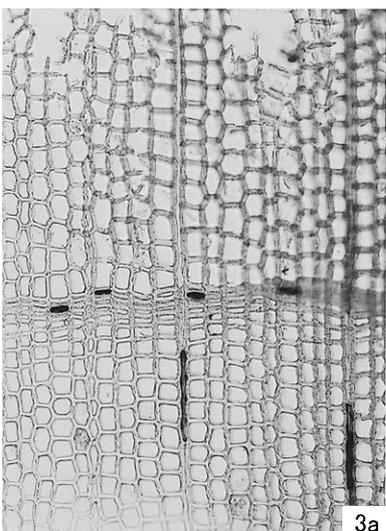
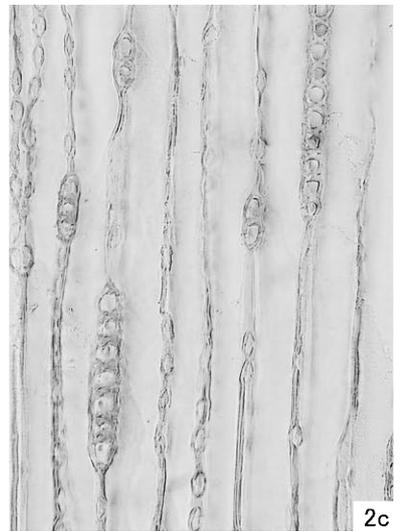
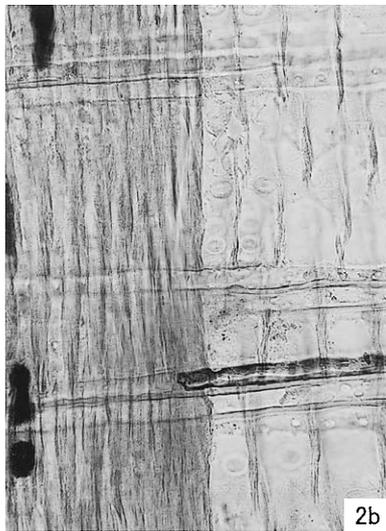
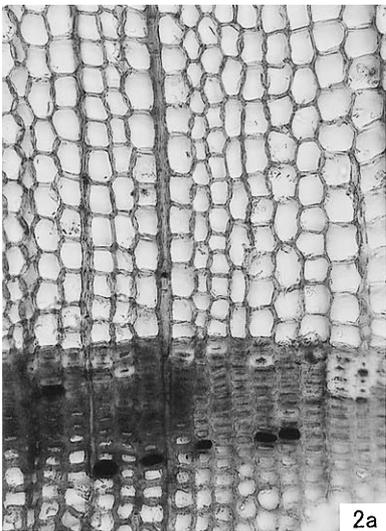
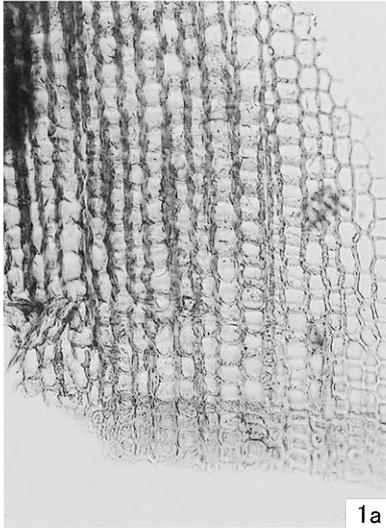
出土遺物⑦（木製品）



出土遺物⑧（木製遺物・金属製品）

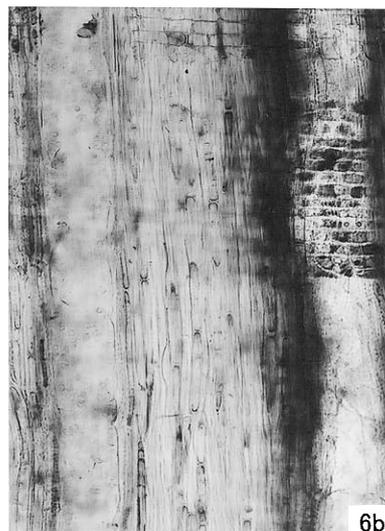
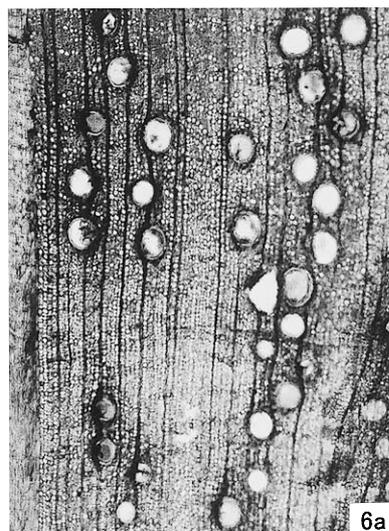
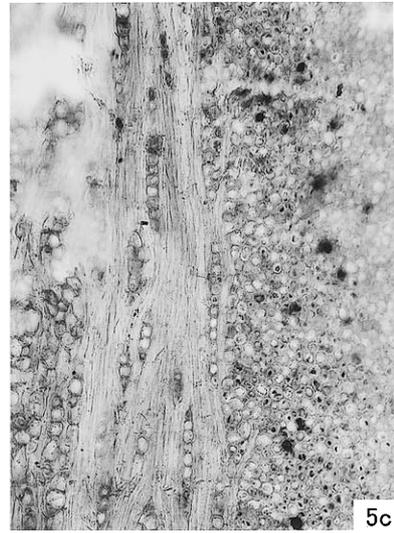
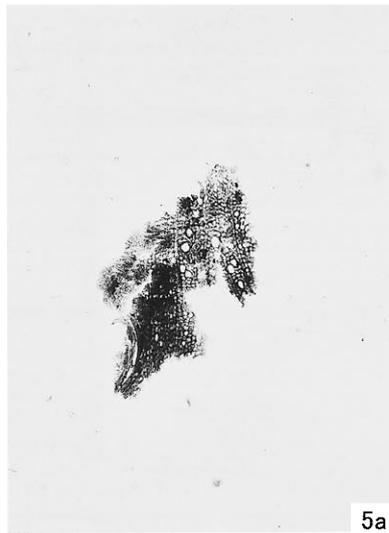
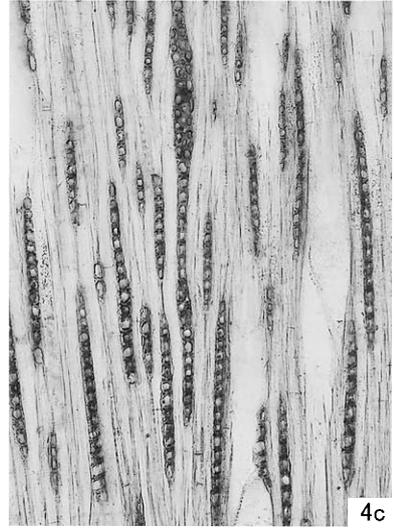
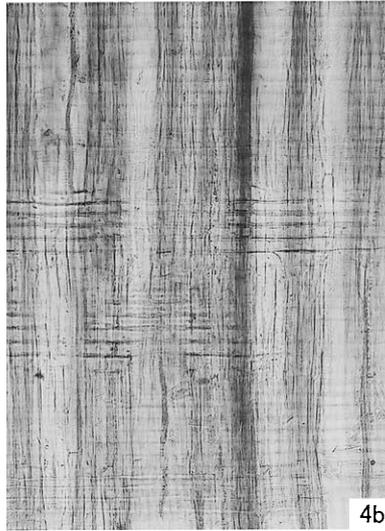
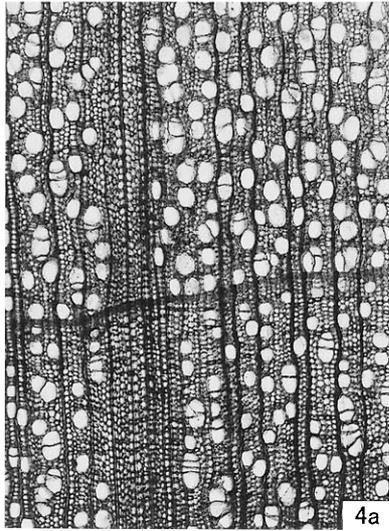


出土遺物⑨（石器・石製品）



1. マツ属複維管束亜属(試料番号8)  
 2. スギ(試料番号4)  
 3. ヒノキ(試料番号6)  
 a: 木口, b: 柁目, c: 板目  
 出土木製遺物顕微鏡写真①

200  $\mu$  m: a  
 100  $\mu$  m: b, c

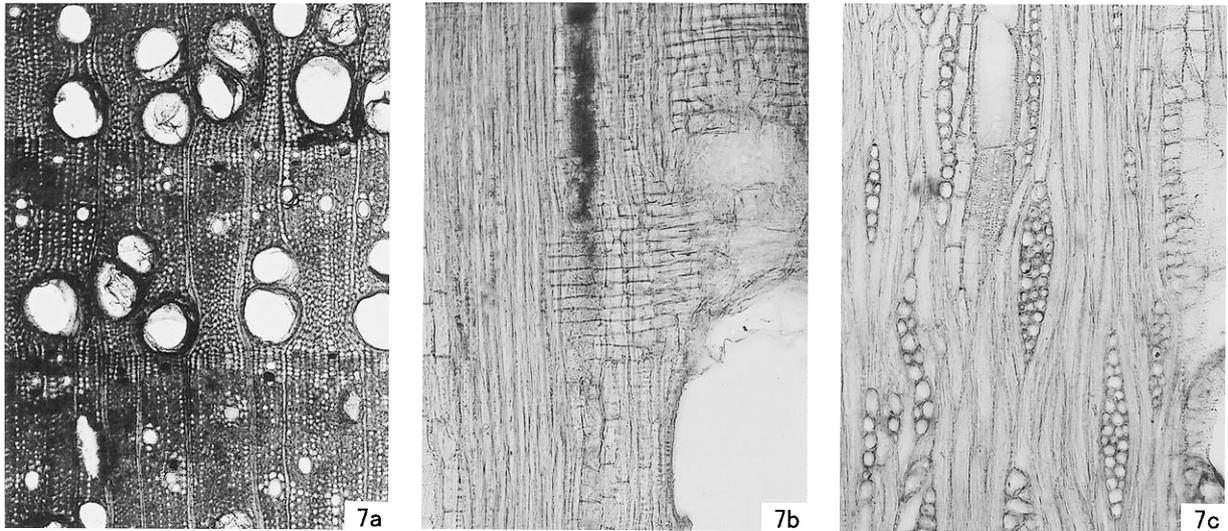


- 4. ハンノキ属ハンノキ亜属(試料番号10)
- 5. コナラ属コナラ亜属コナラ節(試料番号3)
- 6. コナラ属アカガシ亜属(試料番号13)

a: 木口, b: 柁目, c: 板目

出土木製遺物顕微鏡写真②

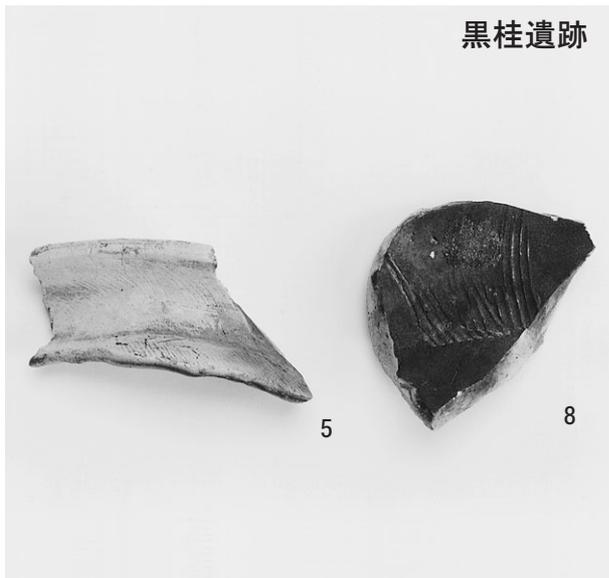
200  $\mu$  m: a  
200  $\mu$  m: b, c



200  $\mu$ m    200  $\mu$ m    1cm    1cm  
 (7a)    (7b,c)    (8)    (9,10)

- 7. トネリコ属シオジ節(試料番号11) a:木口, b:柾目, c:板目
- 8. シイ属 果実(D-No.0+20~40)
- 9. モモ 核(D-X22)
- 10. モモ 核(D-R22)

出土木製遺物顕微鏡写真③・植物遺体写真



範囲確認調査実施遺跡出土遺物



# 報告書抄録

ふりがな	ちよながいせきだいいちじ・おおたにいせきだいいち・にじはつくつちょうさほうこく							
書名	丁長遺跡（第1次）・大谷遺跡（第1・2次）発掘調査報告							
副書名	宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告VI							
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	208-6							
編著者名	小山憲一、パリノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 TEL0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2009年3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町	遺跡 番号					
ちよながいせき 丁長遺跡	みえけんたきぐんめいわちょう 三重県多気郡明和町 さいくうあざちよなが 斎宮字丁長	442	745	34 31 57	136 37 59	20060407～ 20060607 20080214～ 20080220	3,080m <sup>2</sup>	平成17・18 年度国営宮 川用水第二 期土地改良 事業
おおたにいせき 大谷遺跡	みえけんわたらいくんたまきちょう 三重県度会郡玉城町 かみたぬいあざふどう 上田辺字不動	461	464	34 29 57	136 36 31	20051115～ 20060125 20060908～ 20061031	5,735m <sup>2</sup>	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
丁長遺跡	その他の遺跡	奈良時代～ 江戸時代		道路（官道） 遺構・溝等		土師器・山茶碗 石器等	遺物重量 27.35kg	
大谷遺跡	その他の遺跡	縄文時代～ 室町時代		土坑・自然 流路等		縄文土器・土師 器・山茶碗・陶 磁器・木製品等	遺物重量 33.97kg	
要旨	<p>丁長遺跡：県内では国史跡斎宮跡の史跡範囲内でのみ確認されていた奈良時代の官道跡の延長部分を史跡範囲外で初めて検出。その他、中世～近世の溝・土坑等も確認した。</p> <p>大谷遺跡：時期不明のものが多く、自然流路等の遺構を検出。出土量は多くないが、縄文～江戸時代に至る幅広い時代の石器・土器・木製品・金属製品等の遺物が出土した。</p>							

三重県埋蔵文化財調査報告208-6  
宮川用水第二期地区埋蔵文化財発掘調査報告VI

丁長遺跡（第1次）・大谷遺跡（第1・2次）発掘調査報告

2009（平成21）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター  
印刷 光出版印刷株式会社